

部報



昭和五十年年度



No. **21**

北大馬術部

北大馬術部讃歌

作詩 三浦 清一郎
作曲 滝沢 南海雄

はるきたれば だいちひかゝる
しろがねのえんざん ゆめぼうぼうたり
たからかにいま そいななけわれ
らしんめのほまれあり
ほまれあり ほかく ほかく だい お
おわがぼこう われらしんめの
ほまれあり

北大馬術部讃歌

一、
春来たれば、大地光る
銀の遠山、夢茫茫たり
高らかに 今ぞ嘶け！
われら駿馬のほまれあり

二、
時来たれば 旗をかざせ
青雲の旅路に 意気軒昂たり
高らかに 今ぞ嘶け！
われら駿馬のほまれあり

三、
雲流れて 旅路遙か
青春の孤杖 泥濘はばめど
凜然と 進みて行かむ
駿馬のほまれあるかぎり
北大！ 北大！ おゝ我が母校
われら駿馬のほまれあり



目標は美である

天にとどかならなくても

我々は天を目指して

進む



全日学 本村兄と北隼号



全日学 添田兄とスターライト号



全日学 水野兄とハイエム号



全日学 柴沼兄と疾風号



全日学 阿部兄と天龍山号



全日学桑田兄とドン・ホッパー号

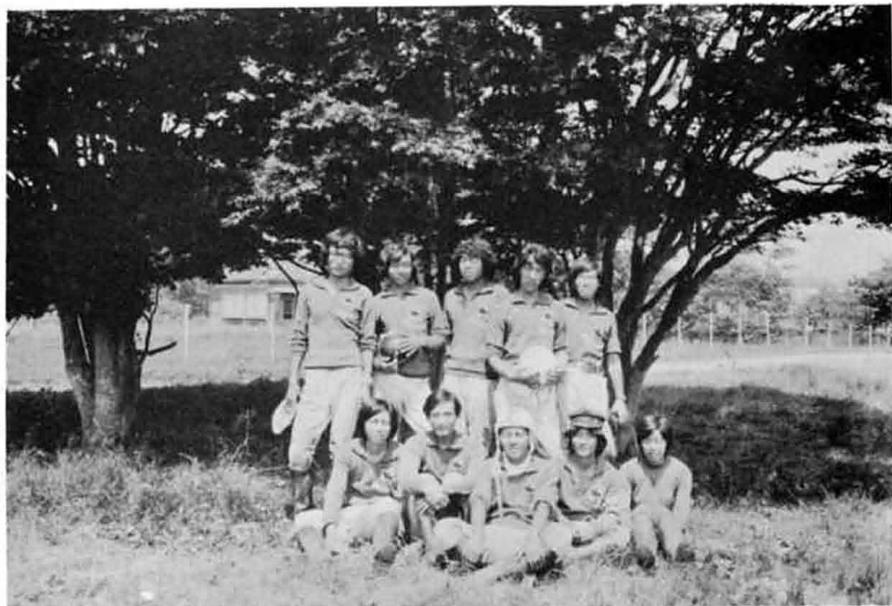


千里馬号離脱式



五十年年度卒部生

左より 本村兄、大東姉、若松姉(上)、水野兄(下)
柴沼兄、添田兄、阿部兄、円内森兄。



一年目 日高合宿



水産馬術部 ダイパレード号と渋谷兄

巻 頭 言

部長 河田 啓一郎

部長をお引受けしてから3度目の巻頭言を書くことになりました。光陰矢の如しといいますがまことに月日のたつのは早いものです。この3年間新米部長は何らの貢献もすることなく過ぎてしまいました。部長、部員諸君は毎年毎年元氣潑刺と活躍してくれ、北大馬術部の健在なることを天下に知らせてくれました。まことに有難いことと感謝しております。

丁度いま春の選抜高校野球大会がたけなわですが、私は高校野球が大好きです。ロッキード スキャンダルなどの暗い世相の中で、高校野球はまさに一服の清涼剤であります。

数万の大観衆を熱狂させる選手の一投一打の活躍を見るにつけ、暗れの試合に出ることのないマネジャーやレギュラー以外の部員のことを、私はつい考えるのです。これらの裏方さん達が合宿の世話をし、球拾いをして黙々と働いてくれてこそ、レギュラーの華々しい活躍があるわけです。

これはわが部においても同じことで、部員一人ひとりが、自分の持場を地味に忠実に果すことが、やがて大試合に好成績を上げうる原動力となることでしょう。

今年もやがて新入部員を迎え、岡田監督の御指導のもと全員一致協力して、元氣に頑張ってほしいものです。新米部長も今年は4年

目で最上級生ですが、無事卒業できるよう部長の役目を果たしたいと
念願しております。

皆様の御激励、御叱正を切にお願い申し上げます。



昨 年 を 顧 み て

監督 岡 田 光 夫

昨年七月に私は二十五年にも及ぶ土木畑の勤務から水道畑に移させられました。勤人として辞令一本で動くのは常であるとは云え発令になる二ヶ月前位からの新聞辞令だとか役所内のいろいろな推測の伴ったうわさなどのため落着かない日々がつづき今までの様に道路・河・橋、果ては選挙のピラはぎまで本当に広い範囲の仕事から解放されて水道一本の仕事であれば今までにくらべていさゝか閑もあろうと考えて居りましたが、いざその世界に入って見ますと先づ水道料金収入で賄なわなければならぬと云う水道の仕事は、丁度株式会社経営にも似て居り、やれ企業性を持ってだとか、やれ放漫経営は許されないとか全く今までの仕事の様に税金で仕事をし

て来たのと大違いの世界でとまどう事ばかりでした。おまけに水道料金改訂、わかりやすく申しますと水道料値上げの時期にぶつかりこの仕事も極めて頭の痛くなる仕事で全く無我夢中の内に一年経ってしまいました。従って馬場に出る回数も極めて少く本当に申し訳なく思っています。一昨年の栄光よ今一度と念じて居りましたが果せず残念でしたが、しかし部員諸君の意気少しも変わらず、頼もしい限りです。卒直に申し上げてやはり一昨年の好成績がかえって心の重荷になり充分持てる力を発揮出来なかつた憾みがありました。日本人はとかく試合を意識しすぎるとよく云われます

試合を気にしない様な度胸を持てればこれに越した事はありませんが、たゞ馬術だけは馬も試合のふんい気にもまれてしまふ事があります。私が学部二年目の時に浅岡大佐と云う人が札幌競馬場で馬場馬術の供覧をされた事がありました。その時に「これから供覧馬術を行うけれど演技が終っても拍手をしないでほしい、何故ならば運動するマーカー号は競走馬あがりの馬で、ようやく調教したとは云ってもこの様なふんいきの中で多数の人の拍手を受ければ忽ち昔の競走馬時代の事を思い出し調教がまるで元にもどってしまうからである」と云う註訳が加えられた事を思い出しました。使用馬の大部分が競走馬上りの現状を考えると、使用馬の調教もさる事ながら試合のふんいきにも順致させる事が必要であるとしみじみ考えさせられました。今年も四月になれば仕事の方も一袋落し（値上げが議会できまれば）少しは閑も出来るでしょう。又老骨に鞭打って早期練習にも顔を出さなければと自らをばげましている今日此頃であります。

元主将から 去るにあたり

添 田 昌 一

今の僕の気持ちにはただ後輩に期待し、応援するだけです。自分の置かれた環境に憶することなく、精いっぱいやってもらいたいと思います。

今、特に感じていることは、一年生から四年生までの個人が、それぞれの立場を理解し、領域にとらわれずに話し合い、やって欲しいということ、馬及び人の計画的トレーニングということをもっとよく考えるべきだったと感じています。

今ここで、もう一度じっくり考えて、その上で毎日の練習・管理等を積み上げてもらいたいと思います。朝の体操、合宿等もっと工夫できる様に思われます。

馬のことについて言うと、我々は障碍馬・総合馬を作ることであるから、不斉地をどんどん活用し、小さい障碍を数多く飛ば、こういうことが訓練でありトレーニングであり、かつ調教なのではないだろうか。人間の訓練はというと、特に下級生についていえることであるが、いかにクセのない素直な感覚、身のこなしを覚えるかということである。下を向くとか、拳をふせる、背をまるめるという悪いクセはつけてはならないし、直さねばならぬことだ。力まずに馬に乗れるということは、あながち馴ればかりではないのではないだろうか？

これからのクラブの課題ということを見ると、これらのことを最上級生を中心として徹底しいかに一丸となり切れるかということだろう。誰も浮き上がることなく、皆で挑戦して欲しいと考えますそんな時、誰でも自分から参加していれば「ウソ」ではないか。何かあった時、それを自分だけであれこれ考えても、おもしろくも何ともないではないか。

そういったことがないとかをする時、ものすごくオククウになります：：ね。最上級生を中心として、一丸となるということでもう一つ学生馬術の特徴として一年生から四年生までが乗ってゆくといいことです。

ここで何回も聞いてきた、組織的調教ということを良く考えてみて下さい。一年生が乗っている時でも調教の一端をにっているという事です。

その他、馬体管理にしても同じことが言えるでしょう。又、作業、草刈り、アルバイト、すべてその一線上にあります。こんなことは何度言われても言われ過ぎるといふことはないでしょう。

沈思黙考（我が四年間を省みる）

△驚ろきと夢中の▽

一年生の時のノートを見ると思わず苦笑いが出る。45鞍目の夜、「数多くの先輩同様ヒザの皮がムケた。非常にいたい。痛いヒザをかばいながらもっともっと乗りたいと思うのだが、「交代」と言われた時の先輩のうらめしいこと。（当時新馬が多く、一年目は十分たらずしか乗せてもらえなかったのだ）もう少し、もうちょっと：：：と思いつつ馬を降りるのである。後から聞くと非常にうまい人と

非常にへたな人はヒザはムケないという……。俺は非常にうまい人ではなかったのだ、地道に乗るしかないのだ。十一月、西村兄 全日学出場、テレビに写るかと思ひテレビを見据えるが残念にも出演せず、他の人の出場を見てドキドキする。俺も出たい。テレビに出たいと思う。

△先っ走りのV

二年目春、半沢先生御退官記念馬術大会で、北隼で小障礙に出場最もブザマに失墮、その晩「馬には乗れないよ。馬に乗せてもらっているだけか、最近ついてないことが続くがこれで終わりにしたいな。」

もう全然気弱で何と自分に言い聞かせたかというところ「ボーカーフェースで、次をめざそう。」

今見ると、まんがの様に楽しいが、その時は真剣なのだ。こうなると意識は、どんどん深みに入ってゆく。

鼓 動

ドキン ドキン また聞こえる。

いつも同じ様に聞こえる。

まったく俺のことはおかまいなし、勝手に動く

静かに聞くとそれが俺をゆすっていることに気づく

俺のことはおかまいなしに

指の先も、頭のとっぺんまで

体がしびれた様に思ひ一瞬がある。

ほんの一瞬……それが原動力を知らせるかの様に

まだ聞こえるだろう？

だんだんナンセンスなことを書き始めるので、本題にかえる。二年目後半、スターライトが俺の前に出現、神経質でとっつきにくい馬だなぁと感じる。気品が高くて、ちっとも人には気を許しそりもない。彼女の気持ちを自分の方に向けさせたいと思った。

△遠心力の三年目V

スターライトに本格的に乗り始めた。とても乗り切れる気などしなかったが、調教者で、先輩である松井さんの注意を自分なりに消化し、実践してゆこうと思う。作業主任をやり、計画し、乾草作業をし、土方をやり、大工をやり、トラックを運転して、もうグルグル……。

でも、馬に乗れるという生き甲斐を感じ続け、長い遠征をした。

△必死の四年目V

自分はいつも何かに影響していようと考え、四年目を送る。自分の意志などそっちのけで押しまくられ、押しまくった年だ。この頃のスターライトに対しては、信頼があった。止まらないことを確信していた。乗れる様になつたかなと思つた時、それ以上の良さを見せられ、最後までもたれつばかりだった。

△沈黙考の今V

次の道を見つけようと悪あがきしながらつい、ライトの顔がうかぶこの頃である。将来是非馬に乗りたいたいと思ひながら、もうライトほどの馬には会えないだろうと予感する。

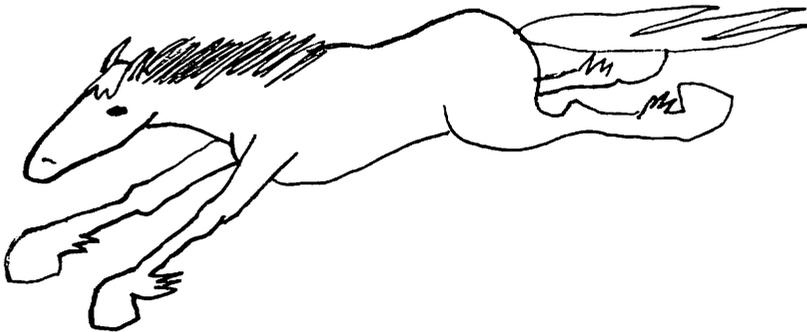
ふと思ひ浮ぶことに全日学での表彰の時のことがある。

ライトは、あの光景にびっくりしてあばれ回ったのである。

僕はいったいどんな顔をしていたのだろうか？ 何故あそこで飛び下りて落ち着けてやろうとはしなかったのか、それも不可能だったのか。

あまりの光栄に意識がぼけきっていたのだろうか。

彼女はさぞ不満だっただろう。馬をおりた今になって思うのである。やはり馬は、おりた時の方がやらねばならぬことが多いのだな。



目 次

○ 巻頭言	部長	河 田 啓一郎	
○ 昨年を顧みて	監督	岡 田 光 夫	
○ 去るにあたり	元主将	添 田 昌 一	
○ 役員報告			
主将	三年目	平 野 雅 裕	1
主務	三年目	佐 野 淳 之	2
会計	三年目	石 川 淳 子	4
飼育・馬匹	三年目	横 沢 敏 夫	7
馬具・備品	二年目	山 本 裕 介	8
作業	二年目	長 屋 滯 隆	9
	二年目	笠 間 淳 子	9
薬品	二年目	山 川 恵	10
文化	二年目	矢 田 明	10
記録	二年目	半 浦 剛	11
国立七大学戦	三年目	佐 野 淳 之	18
全日本学生三大馬術競技	三年目	桑 田 壮 平	19
水産馬術部より	四年目	阪 上 泉	23
○ 馬の頁			24
馬匹紹介、調教報告			
北単号、北燕号	二年目	本 城 敬 文	26
	二年目	矢 田 明	27
	四年目	本 村 洋 文	28
北武号	二年目	半 浦 剛	33
	三年目	桑 田 壮 平	34
北勇号	三年目	石 川 淳 子	37
	四年目	柴 沼 俊	37
北秀号	二年目	竹 林 圭 介	39
	三年目	横 沢 敏 夫	40

スターライト号	二年目	長屋 涪 隆	41
	四年目	添田 昌一	42
天龍山号	二年目	水井 とく子	43
	四年目	阿部 一哉	44
羊蹄号	二年目	山本 裕介	45
	三年目	平野 雅裕	46
出産報告	二年目	山川 恵	50
疾風号	二年目	笠間 淳子	51
	四年目	柴 沼 俊	51
	三年目	佐野 淳之	53
ハイエイム号	二年目	山川 恵	55
	四年目	水野 豊香	56
ドンホッパー号	二年目	大東 美奈子	59
	四年目	若松 光子	59
○ 離厩報告			
千里馬号	二年目	大東 美奈子	61
千里馬の過去			62
○ 同好会より			
市川 端彦			
○ 東京OB会より			
池内武夫君の思い出	第六代部長	半沢 道郎	67
池内悼を悼む	昭和九年卒	東園 基文	69
池内さんを偲んで	昭和十七年卒	現監督 岡田 光夫	70
○ 先輩寄稿			
乗馬発展への願	昭和六年卒	間 克市	71
OB諸兄への手紙	昭和四十二年卒	近藤喜十郎	73
○ 春夏秋冬 — (20 ± α) × 9 —			
雑感	三年目	佐野 淳之	74
貨車積のうた	一年目	岩田 正勝	75
雑感	一年目	中島 孝幸	76

ちかれたびー	一年目	蛭子雄次.....	76
雑感.....	一年目	飯島茂.....	77
じょうだん.....	一年目	滝華聡之.....	77
ちっほけな感傷	一年目	三好功悦.....	77
束の間の出来事.....	一年目	木村憲子.....	78
ナンジャクッ子	一年目	浪内陽子.....	78
○部員紹介.....			80
○名簿.....			98



役員報告

主 将

歴史的現在

平野 雅 裕

数年来の登り調子が昨年 of 全日本に於て、中障団体四位、総合団体五位という結果をみた。ここに宿題であった低迷からの脱出が果たされたといつてよいかと思う。新しい時代を向えた我々の任務は重い。もはや後退が許されないのである。現在、部員の誰もがそうした任務を感じ、それを果すべき意欲に燃えている。そうでなければならぬ。与えられた機運には乗じなければならぬ。ただ、そうした機運が先人の努力と模索の賜であることは忘れてはなるまい。機運に乗ずるとは先人の頭を踏みつけてより高い高みに登ろうとすることだ。しかしともかくその為には、先人の頭を土台としなければならず、我々が独立に新たな道を拓くというのではないという事である。

馬を介する限り我々は歴史的にならざるを得ない。のみならず、我々の部生活、練習の形態、調教法、基本的には馬に対する情熱、等すべてに亘つて歴史的に涵養されたものである。部に育てられたその故に部に対する責務を負う。部の発展を慮るということである。そして発展とは先人の遺した地盤の上に新たに石を積みむという事に

他ならない。年々積み重ねられたその堆石、それが伝統というものであろうか。伝統とは我々の上からのし掛る重みでもなければ、我々を締めつける桎梏でもない。それは我々が踏みつけ高みに登る為の足場である。伝統の上に伝統が築かれるのである。

今、我々は四十五年の歴史を一つの伝統として踏まえ、その上に新たな石を積みもうとしている。かつて幾度か先人は高峰を極めた。しかもなお更なる高みを求めるほどに貪婪であった。一つの山が築かれた。しかも更に高きを求めようとするなら、先づは、山をつき崩してでもよい、底辺を拡げることである。子供の砂遊びの論理である。低迷彷徨する中にも絶えず高みへの希求があった。過去の高峰がその希求を支える力であった。我々は、低迷の中に思索探求したその成果を考え、歴史的な意義を省る時、それをより拡がった底辺として持し、より高い高みへと飛翔することが出来るであろう。低迷を抹消し栄光を反復再現しようとするものではない。かつての高峰より、より高い所へ、先人の頭を踏み越え攀らんとするものがある。

調教法の現状と今後の課題

かつて伊式の採用と低迷とが結びつけて考えられ、そしてまた最近の向上がそれからの乖離の結果として見られる事、それは全く不可解といわざるを得ない。方式については自分の如き井底の蛙にはその詳細を知る由もない。ただ時々の試合と文章とで知るのみである。例えば、最新の馬術情報（一七八号）への団体大障害優勝者の寄稿によれば、アメリカカ・イギリス・ドイツ等それぞれの方式があり、最近ではアメリカ式が主流になりつつあるとのことである。し

かし著者はドイツ馬にドイツ流に乗ったのであり、どの方式かという事になれば「どれが良い悪いという事では無い。それぞれ馬に合った乗り方を採っているに過ぎない。」といつている。

方式の区別は厳として在るようである。しかし我々のいう伊式というものは果してそれらと同列に並べられるべきものであるかどうか。飛越をする上で馬に自然的な平衡をとらせること、騎手は馬の平衡に一致した前方騎座をとること、等伊式の原則といわれるものではないか。我々が伊式の採用という事を言った時、それは、馬を作りながら馬に乗らなければならないという時代の課題の中であって、障害馬調教上の基本点を確認したものであったのではないか。我々はもはや方式については悩むまい。それは我々の能力を越えた所の問題であるからだ。我々は学生馬術家として基本の修得をもって満足すべきであるからだ。我々はただ、伊式の言葉のもとに障害調教上の大原則を基本として固守し、それを貫きうる練習形態を整えるのみである。

馬を作り人を作る。そのどちらを先行させるということ無く平行してゆくこと、それが我々の課題である。調教上の基本と同様騎手の基本的技術が疎かにされてはならない。そして更により実践的より試合向けの技術無しには、試合に勝てない事も明らかである。理想的な馬を作ることが第一であるにせよ、理想をもっては現実に処せないという事である。今迄そうした理想に甘んじ試合の技術が軽視されて来た事は反省されるべきである。飛ばぬ障害を飛ばす技術障害を落さぬ技術、それを基本的技術の中で学んでゆくべきである。基本的技術の向上は馬場に於てもいうことが出来る。総合の耐久

を廃し複合にせよとの意見が出る昨今である。そうした退歩は断固阻止するにしても、調教審査が大きな比重を占める事は昨年の全日本を見て明らかである。昨年規定の変更有り、馬体の伸暢と運動の流暢が要求された事は、我々の望む所であった。減点をもう十点減らす事、でなくば勝目はない。

馬の入換

部の歴史は馬の歴史である。部の発展はスムーズな馬の入換に基礎づけられる。現在馬が揃っているといいながらそれに安んじていけば、何年かの後には一時に馬が老齢化することになる。それはいけない。馬十頭、一頭十年の寿命とする単純計算では毎年一頭の割で馬の入換が必要になる道理である。常に新馬を育てること。新陳代謝を活発にすること。より良い馬が育てばたとえ現役馬でも惜しまないこと。現役馬であればそれ丈屠場に出さずに済むのである。現在、繋養馬十一頭。北隼・北勇の老齢化が目につく。新馬の北燕の成長に期待すると共に、広く良馬を求める次第である。

主務

佐野淳之

昭和五十年十月より先代の阿部兄の後を継いで主務になりました。ほぼ半年の間主務として動いてきた訳ですが、その間に私なりに思ったことなどを述べてみたいと思います。

まず、当部に於る主務は、他の運動部に於るそれとは異なり（他の部では他の学校の女子に來てもらつてマスコットの存在としての意味の強いところもあるようです）練習や作業などは他の部員と等しく行ないかつ所謂マネージャーとしての仕事も同時に行なうという性格を持っています。

従つて暇が仕事にとられ日常の生活にも変革を余儀なくされるのは当然の事でありました。然し私はこれを否定するものではありません。卒業してしまつと、在学生とは少しづつ考えが変わつてくるのと同様に、部員と同じ事をせぬマネージャーは真には部員の事からならないような気がします。

いや、社会とはそんなものではなく、もっと組織的なものだよ。と言われれば返す言葉はありませんが、現在の部に於ては、この方式が一番能率的であり、主務自身としても居心地がいいようです。尤も、昨晩飲み過ぎたりして朝の練習に出られず、昼頃起きて学生部との交渉などに行く時程、自分が惨めでだらしなく感ずる時はありません。

次に思うことは私達をとりまく学生環境と社会との食い違いです。例えば、アルバイトの交渉に行つた時、特に相手が社会の歯車の一つと感ずる時は自分一人の力ではどうにもならない冷たい社会の壁を目のあたりに感覚し、文字通り涙を飲んで妥協せざるを得ないことがあります。確かに学生はろくに勉強もせずに甘えてばかりいるという言葉も聞かれます。しかし、学生が学生なりの素直さと奔放さを捨てて何になりましょう。大人は誰もが子供の時があつたにも拘らず子供の心は削り知れないものです。

また金銭の面でも自分の信念とかけ離れたものを感じることがあ

りますが、個々の例は省略するとして、毎年問題にされ代々の主務及び会計が部報に書かれている当部での財政問題について言いますと、例年の如く樂觀視出来ないことは今年も同様でありまして飼料代としての学生部からの援助も前借りを続けているというよりな形で成り立っております。財政難では最近札幌市も頭を痛めているようですが、要するに収入のわずかな増加が、高騰する物価高に追いつかぬということでもあります。

やはり一番大きなものが飼料代次に鉄代であります。一昨年より恵庭の牧場で乾草運びのアルバイトをして乾草を分けてもらひ助かっています。学生故日常のアルバイトにも限界があり焼け石に水といった感をまぬがれません。また蹄鉄については札幌に一軒しかない鉄屋さんに頼んでいます。自分で改蹄することは財政的にもコペルニクスの転向となる訳ですがそれもママならず必至の支出となっています。また遠征費も輕視は出来ません。北海道という場所柄及び大きな試合が出来るほど施設が完備していないという理由で、試合は大抵北大の馬場では出来ないという不利に涙を吞んで遠くまで出かけるというのが現状です。

通常の主務の仕事を紹介しますと、一番大きな比重を占めるのは学生部体育掛との折衝です。予算問題の他に、部活動に必要な数々の備品は、かなりけずられはしますがほとんどが学生部からの援助です。電球やバケツから始まって除雪車の配置、砂・水道の修理等学生部へ行く理由には日常事欠きません。然し物品援助は以上のようですが現金での援助は正にすずめの涙程です。例えば昨年の三重での全日学遠征援助についても再三の交渉の成果もなく貨車代等の援助は一切出ず、全日本出場選手一名に付き千五百円という定まっ

た額しかもらえませんでした。馬術部は他の多くのクラブのような身体一つで行けば試合が出来る訳ではなく馬も運ばなければならぬし多勢の部員と共に遠征しなければ試合も出来ないクラブであるという現状を訴え全般に渡って援助の増額を要求してゆくつもりです。学生部に関係するものとしてトレーニングセンターがあります。これは札幌オリンピックに備えて北大構内の北西の辺地に建てられたもので、オリンピック終了後から主として運動部の合宿に使われています。年に数回ある部員全員の合宿にはここを使い、日頃馴染みの少ないシャワーや真っ白いシーツの上で翌日の練習、作業及びトレーニングの鋭気を養っています。

収入の面では、競馬場でのアルバイトが若干額が増えたものの他の所では増額の見込みのあるものは見あたりません。もしOBの方で部費の滞納金が残っていることを思い出した方がありましたら御一報下さい。なお古いOBの方で久しぶりに札幌に来られた際、うそでもいいですから「部費を未だ払ってなかったんだよ」と言ってお下されば感謝感激です。

まあ今のは半分冗談ですが、札幌へお越しの際はぜひ馬に乗ってお話をお聞かせ下さい。それが何よりのプレゼントです。

主務をやっている感じることとは伝統というか先日の残した足跡です。私達が今やっていることも今までやってこられたOB諸兄が基です。同様の意味で今私がやっていることが後に続く後輩諸君にとって少しでもプラスになるべく頑張っていていくつもりであります。

最後に、

私が困っている時には正確な助言をくれる主将の平野始め同輩の

連中、細々とした計算をまかせっきりに行っている会計の石川、頼りにもなり短文では文才を見せる副務の本城、主務関係でも備品についてばかり余りある山本。私の手際の悪さで迷惑をかけたばかりの部員諸兄。この場を借りてお礼とおわびを申しておきます。これからよろしく。

会 計

石川 淳子

昭和五十一年四月から八月までは、表のような収支が予想されます。今年は、学生部よりの援助が去年と比較して、三十五万円ほど増加したものの、やはり赤字はまぬがれる緊急の手段としては、アルバイトや、部費を上げることが考えられますが、これらの手段には、やはり問題があるように思われます。しかし、表に示すような支出は減らすことも、ほとんど不可能であり、結局いろいろな収入源のうち、増加できるものを見つけていく以外ないようです。

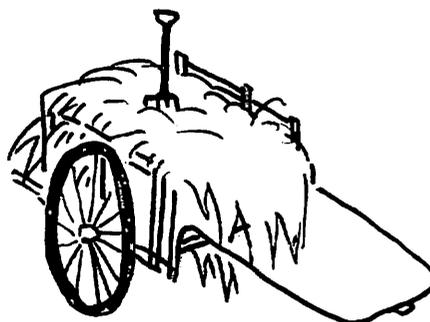
昨年は、同好会より、鞍一騎を寄附していただき、部員一同、感謝しております。

今後とも、御援助宜しくお願い致します。

S 51. 4 ~ S 51. 8 の収支予想

収 入		支 出	
部 費	20 万	飼 糧	68 万
アルバイト	58.5	蹄 鉄	58
補助金	31	馬具・備品	8
その他	15	薬 品	10
計	124.5	遠 征	27
現 在	61	事 務 文 化	44
計	185.5	そ の 他	10
			225

* 約40万の赤字が予想できる。



決 算 報 告

S 50. 1 ~ S 50. 12

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計
部 費	38260	42000	25091	83324	61020	18510	31900	2300	21015	24838	27615	22110	387983
アルバイト	0	0	48160	17000	10800	41156	296930	135150	0	117900	159700	0	826796
補助金	0	0	101200	0	0	100000	0	35600	0	74000	1029500	0	1340300
その他	65000	13000	173023	17060	66140	221811	17500	23773	56000	434	44350	71954	770045
収入合計	103260	55000	347474	117384	137960	381477	346330	196823	77015	217172	1261165	94064	3325124
飼 糧	0	0	460000	0	3380	0	2690	258850	3620	4830	0	2700	736070
蹄 鉄	0	0	100000	0	100000	0	0	302000	0	0	0	353500	855500
馬具・備品	3440	1250	12446	47789	6512	950	43700	3250	11098	22871	8315	182000	343621
薬 品	4400	0	0	23420	0	11260	25890	7440	58645	2150	0	63950	197155
遠 征	0	0	0	0	0	3840	146500	281220	0	60000	322800	15000	829360
事務文化	4970	36684	47021	50289	191505	16365	2891	5088	9430	15840	14305	8741	403129
その他	30700	0	6405	44125	7855	15710	1796	5570	5240	82357	23050	3460	226268
支出合計	43510	37934	625872	165623	309252	48125	223467	863418	88033	188049	368470	629351	3591104

馬匹飼料

横 沢 敏 夫

馬体管理の仕事の水野兄より9月から引き継ぎました。いかに安く飼料を調達し、馬達の腹を適度に満たし、その健康を維持増進させるのが私の任務です。

飼料関係：：まことにせちがらい世の中で馬術部も財政難の状態にあり（詳細は会計に任せます）飼料代も引き締めざるを得ないのです。この財政難の下で馬達の腹を満たすことができるのは、多くの方々のお世話になってのことです。

乾草は佐合氏の紹介により、恵庭の水本牧場の御好意で、年間使用量の3分の1強を我々の作業に替えて供給してもらいました。

悪天候による乾草の不作にもかかわらず、大変助かりました。昨年の残りや購入した分で3月末まではもちますが、あと青草が茂るころまでの分は購入する予定です。

又、燕麦・フスマも渡部商店にお願いし、できるだけ安く購入しています。

寝ワラについては小野氏、農学部との契約によるそれぞれの供給の他に、帯畜大OBの方の馬の世話をしたことに関して思いもかけぬ供給を受けたこともあり、来年の秋まで悠々と暮らせます。

供与量も無駄が無い様にしたいと思ひ、その参考とすることを目的の一部として、体重の測定を毎月行い飼料との関係を見ようとしています。未だ参考とするに到らず、運動量のみで加減しています。

馬匹関係：：日常の手入れ（朝夕）の際に馬体の健康状態を調べ馬体管理表に記入することを日課としています。体温を測定し、平常の外傷、疾病等は部員達の手で治療します。

しかし、やはり獣医学部、特に外科のお世話になることが大変多いのです。跛行の診断、化膿傷の治療等の他、今年は去勢手術が9月末に2頭に施されたり、同じ日に羊蹄号の妊娠までもが発見されその後の診断も継続して戴いたり、大小さまざまのことで忙しい先生方の手を煩わせています。

馬の怪我は人間の注意により防げるものが多いと思われまふ。一つの例として鞍傷についてです。まともな鞍を注意して置くならば、決して鞍傷は作らないでしょう。馬体にとり不適と思われる鞍でも使わなければならない現状では非常なる注意を払って装鞍し、その様な鞍でも鞍傷ができない様にしています。しかし、実際には殆ど常時、いずれかの馬が軽い鞍傷気味です。特に今年の北燕号（新馬2年目、最劣の鞍）に鞍傷ができ、更に化膿させてしまい、獣医で手術を受け、十一月中頃から3ヶ月ほど休ませなければならなくなってしまうました。良い鞍があったならば、誰しも思うところですが、使えろと判断された鞍で鞍傷を作ったミス、治療の不行届きによる傷の悪化その結果、長いブランクを作ってしまったことは、まことに面目無く、反省しております。

最後に羊蹄号の妊娠という一大事件について概略説明します。9月末になるまでは妊娠などとは夢にも思いませんでした。その前の数ヶ月間、原因不明ながら体重が異常に増え続け、又腹が横に太くなってきたのでもしやと思ひ、獣医に連れて行ったところ案の定でした。8月の北日本学生、道大と頑張って、いよいよ全日学で活

躍というときでしたが、気づくのが遅く、既に妊娠6ヶ月という診断できらめざるを得ませんでした。はたしてその6ヶ月前を調べてみますと、牡馬を放したという不祥事がありました。2月の末の出産まで母体の健康管理に留意すると共に、獣医で出産時期をうかがい、その前後には家畜病院のすみに入院しめてたく出産となる予定です。その後の養育については検討中です。我が部で仔馬が誕生するのはほんとうにめでたいことです。しかし、作ってしまったことは、まことに恥ずかしい次第です。放馬させるということは非常に危険なことであり、又一シーズンの詰めが完結できなかったというのも惜しいばかりです。

さて、部員一同、我らが愛馬のかゆいところに手が届くほどかわいがり、充分手入れ管理し、来年の活躍を期して頑張ります。

飼料関係の方々、獣医の先生方、又馬の命である足を気づかないながら装蹄して下さる太田さん、その他の皆さん、来年度も御助力下さる様お願い致します。

馬具備品

山本裕介

昨年の十月にこの役に任命された時には、馬具備品について全く他人事のように頼り切っていた私は、不安でいっぱいでしたが、怠慢ながらもやっと仕事がかかるようになってきた次第です。現在のおもな仕事としては、馬具・大工道具・試合遠征用の雑品・厩舎設

備等の管理修理であります。守備範囲は広いと言えば広いですが、日常は馬具修理がほとんどといった具合です。

現在一番の悩みの種は、(毎年のことではありますが)鞍の老朽化です。今のところ使用可能な鞍が、馬十一頭に対し、十二騎。新しいのが二騎、残り十騎のうち限界にきているのが3騎で、他の使用可能な鞍でも、鞍骨の開き気味の鞍がほとんどで、こればかりは修理不可能で、どうしようもありません。又、修理が長期に渡る時などは、馬休の馬の鞍との兼ね合いでどうにか間に合わせているといった状態です。馬乗りにとって鞍は、馬乗りの命であり、馬術部にとって飼料と並ぶ不可欠な物ですから、最低限馬具だけは、大切にしたいものです。又、去年は、同好会より、鞍一騎、寄贈していただき、たいへん助かりました。お礼申し上げます。

もう一つ、言いたいことは、やはり、大工道具のあとかたづけ、部室等の清掃のずさんさです。この点はもっと私の方で注意しなければならぬとは思いますが、大学生である部員諸兄ですから、最終的には各々の自覚を信頼する他ありませんので、公共物は大切にしましょう。

最後に、部室のそうじ、手入れ用タオルの洗濯、日用品類整理など積極的に実行された作業係の人、学生部よりの物質援助に交渉してくださる、主務の兄には、これからもよろしく願うと共に、お礼申し上げます。

作業

長屋清隆

笠間淳子

役職としての作業は、今まで貨車積み、乾草・寝ワラ運び、雪割り等々、多くの全員作業の指揮がその主な任務であったが、平野中将の指示で、各役職がさまざまな部活動を互いにカバーし合うことになり、作業としても単なる指揮者ではすまされなくなった。

あらゆる点に目を注がなければならぬが、その処理の全てを強制という形で解釈すべきではないと考える。部員の自主性を尊重した上で如何にして問題を処理していくかということは困難であるが上級生が下級生に対し身をもって示すのがやはり妥当であろうと思われる。

全員作業などでは、作業主任として、その全内容を予め先取りしておくことによって、貨車積みなどは比較的スムーズに行なえるようになってきた。

しかし、役職としての性格上、人を使うため、一方で細かな点を確実にふまえた上で、他方、常に全体のバランスを把握していなければならず、なかなか気苦労が多いけれども、やりがいのあることは確かである。

肉体労働についてゆけない女子に見合った作業をさせるためと、細かな点まで目が行き届くようにするために補作的な意味で女子を起用し、笠間がその任に当たっている。

今回、作業に女子を加えたのは、細かい所に注意が行き届くようにという考えからでしたので、いわゆる作業らしい作業以外の日常一般に関してを主に私が受けもつことにしました。

そこでまず部室を見まわしたところ、そのきたないこと／＼はたしてここは人間の住む所なのだろうか。部室のきそなさは、わかってはいるのだけれど、慣れてしまったからか、誰もきれいにしようとはしないのです。人馬一体も、ここまでできてはしようがないので、とにかく部室を中心に人間のすみかをなんとかしようということになりました。今のところ、ゴミ捨て、トイレ滑掃を当番制にしたり、いろいろ試してはいるのですが、まだ汚れの根源をなくすには至りません。やはり部員一人一人の自覚をさらに促す必要があるようです。

また、この役職になって感じたのは、人を使うことのむずかしさです。作業をやるということは、決して楽しいものではない。その精神的・肉体的負担をできるだけ軽くするよう努めなくてはなりません。かといって、気を許せばしまりが無い、いいかげんなものになり、能率も悪くなります。やはり、一番必要なのは、各自の自主的な姿勢でしょう。役職として、作業を合理的・計画的にすることは可能ですし、努力しているつもりですので、部員諸兄には、さらに積極的な作業にとりこんでほしいと思います。

薬品

山川 恵

諸物価上昇の折、薬品もその例にもれず、急激ではありませんが上昇しています。昨年と一昨年の十月から十二月の三ヶ月間の支出を比較してみると、三万四千円ほど増加しています。昨年九月までの一年間の支出が二十二万。シュベール、インフルエンザを計算にいれなければ十四〜五万であることを考えると、この増加はあまりにも大きすぎます。これは、値上がりということもありますが、他の理由として、全日本遠征の頭数が増えたこと、全日本遠征の時から新しい薬品を取り入れたことがあげられ、また、現在、在庫もかなりあります。新薬品としては、ブレドニゾロン、キモトリプシンなどの注射液があります。これら有効な新薬品はどんどん取り入れていきたいのですが、薬品が余って使わぬものがでてきても無駄ですし、支出がかさむばかりです。そこで、より効果のある物を知らねばならないのですが、これが薬品という役割にありながら、私自身まことにあいまいなのです。これにはどうしても獣医との接触が必要になってきます。現在までも、獣医の諸先生方に色々とお世話になっていますが、ここでお礼を申し上げるとともに、これから更に御協力をお願いする次第です。また、薬品の知識は、全部員に持っていてもらいたいので、この方面の活動もしていきたいと思っています。日常使うものの濫用を防いだり、より使い易く改良したりしようとは思いますが、まだほとんど手をつけていない状態なの

で、これから一つ一つやっていこうと思っています。

文化

矢田 明

写真もたくさん出来ました。皆様、よろこんでおられます。スケート大会、サッカー大会も開きました。部外活動にも、以後力を入れるつもりです。

私を中心とした文化活動が、クラブの潤滑油になれば、そして安楽椅子になれば、また、馬に与える愛撫のようなものになれば、そう思い努力を重ねているつもりであります。何分にも、忙しいこの身ではあります。が、しかし、努力しております。そして、皆様の協力があればこそ、この役職も成り立つのでございます。

評、うそつき／はったりかますな／
性格を変えろよ／

評の評、ありがとうございます。そう言ったあたたかい言葉が私を勇気付けてくれるのであります。しからはこれからも、その精神で、御支援のほど、良ろしく、御願います。

評の評の評 あほう／

評の評の評の評 いや いや／

記 録

昭和50年度行事報告

半 浦 剛

9月	1	7	2・3年目合宿
10月	11・12	29	1・3年目合宿
	18	10%	道内親善馬術大会―於岩見沢競 役員交代コンパ―於クラ館
11月	3		全日学貨車積
			7 大学定期戦―於馬事公苑 全日学―於三重県国体会場
12月	20		大掃除
1月	2		初乗・初詣―北海道神宮 強化練習
	6	11	新年会―於鍋万
	18		
4月	7	13	合宿―新2年目対象
	28		新歓コンパ
5月	4		第3回半沢杯馬術大会―於北大
	11		速乗会―盤溪スキー場
	25		第12回対酪農大定期戦―於酪農大
6月	7	8	北大祭
	21	22	第10回道自馬馬術大会―於北大
7月	13	20	1年目日高合宿
	14	21	3・4年目苜草合宿
	22		十和田へ貨車積
	31	5	北日本学生馬術大会―於北里大
8月	16	18	第22回道大兼国大予選―於畜大 着札、貨車降し

昭和50年度 戦績報告

対帯広畜産大学、酪農学園大学定期戦 3月9日 於北大
○シニア戦 第2位 酪・北・畜 本村・阿部・荒井
○ジュニア戦 優勝 北・畜 森・半浦・竹林・大東

対東北大定期戦 3月23日 於東北大

- 1年目戦
負 長屋、本城、左海、矢田
- 2年目戦
負 横沢、平野、桑田、荒井
- 3年目戦
勝 添田、水野、柴沼、阿部
- 女子戦
負 若松、石川、山川、笠間

第3回半沢杯争奪馬術大会 5月4日 於北大

○バルクール・ド・シヤス

1位	羊蹄	平野3	78秒
2位	北勇	柴沼4	89秒
3位	天龍山	阿部4	91秒
8位	疾風	桑田3	110秒
失権	ドンホッパー	若松4	経路違反
失権	北秀	横沢3	第3.4.10拒止
4位	ドンホッパー	小野(北大同)	95秒

○小障碍

1位	ドンホッパー	佐野3	満点(55秒)
2位	疾風	山本2	"(57秒)
5位	天龍山	長屋2	-4
失権	北秀	本城2	第1.3反抗
4位	スターライト	半沢(北大同)	満点(65.5秒)

○中障碍

4位	スターライト	添田4	-8
----	--------	-----	----

1位 ドンホッパー 小野(北大同) 満点

第12回対酪農大学定期戦 5月25日 於酪農大

○複合(馬場の点数不明)

2位	スターライト	添田4	-12.5
3位	羊蹄	平野3	-40
	北勇	柴沼4	-40
失権	天龍山	阿部4	第1.1反抗第10.2反抗
失権	北秀	横沢3	第2.第4.第10.1反抗
失権	北武	桑田3	第8水濼3反抗

○小障碍

1位	ハイエイム	水野4	満点
3位	疾風	佐野3	-7
失権	北武	半浦2	第8水濼3反抗
失権	北秀	矢田2	S前1分反抗
失権	北勇	笠間2	S前1分反抗

○中障碍

1位	スターライト	添田4	-4(水濼落下)
3位	北隼	本村4	-16
失権	北勇	柴沼4	(第3.第4.第5.1拒止)

第10回北海道自馬馬術大会 6月21.22日 於北大

○複合馬術

	スターライト	添田4	障碍1落
	ドンホッパー	若松4	"2落
	疾風	柴沼4	"1落1反抗
	天龍山	阿部4	"3落1反抗
失権	北武	桑田3	山形3段にて
失権	北秀	横沢3	第2.3拒止

} 馬場の点数不明

○中障碍

2位	ドンホッパー	添田4	-4
6位	スターライト	添田4	-8

8位	ハイエイム	水野 4	- 1 1
10位	羊蹄	平野 3	- 1 1.7 5
14位	北隼	本村	- 1 6

○小障碍

8位	天龍山	左海 2	- 5.7 5
失権	北秀	山本 2	S前1分反抗
失権	北武	山川 2	第6.3拒止

○選抜中障碍

2位	ドンホッパー	添田 4	(140完飛)
7位	ハイエイム	水野	2逃避1落

○六段

4位	北隼	本村	110落下
----	----	----	-------

第11回北日本学生馬術大会 7月31日～8月5日 於北里大

○中障碍 第一走行 第二走行

1位	スターライト	添田 4	- 8	- 4
6位	北隼	本村 4	- 2 0	- 2 4
7位	ハイエイム	水野 4	- 2 8	- 1 9

以上3頭全日学権利

失権	北勇	柴沼 4	(乾濠オクサーにて)
失権	ドンホッパー	若松 4	(乾濠オクサーにて)
失権	羊蹄	平野 3	(乾濠オクサーにて)

○総合

3位	ドンホッパー	添田 4	余力満点	- 1 1 8.2 5
6位	疾風	柴沼 4	- 1 4 0	
10位	天龍山	阿部 4	- 2 3 5.8	
14位	羊蹄	平野 3	- 3 0 9.9 5	

以上4頭全日学権利

失権	北秀	横沢 3	(余力最終にて)
失権	北武	桑田 3	(調教にて)
棄権	北隼	本村 4	

○ B障碍

1位	疾風	佐野	3	満点
2位	北燕	本村	4	-4
3位	スターライト	長屋	2	-7
4位	天龍山	半浦	2	-8

第22回北海道馬術大会兼国体予選 8月16～18日 於畜大

○ 総合

5位	ドンホッパー	添田	4	-138
9位	天龍山	阿部	4	-185.5
失権	疾風	柴沼	4	耐久にて
失権	北秀	横沢	3	余力にて
失権	北武	桑田	3	余力にて
棄権	北隼	本村	4	
棄権	ハイエイム	水野	4	

○ 婦人障碍

6位	ドンホッパー	石川	3	-8
----	--------	----	---	----

○ 小障碍

2位	スターライト	森	2	満点
11位	天龍山	竹林	2	-19.25
14位	ダイパレード	阪上	4	-27.75

○ 中障碍

4位	スターライト	添田	4	-16.25
失権	羊蹄	平野	3	トンネルバーにて
失権	疾風	佐野	3	トンネルバーにて
失権	北勇	柴沼	4	カマモコバーにて
棄権	ハイエイム	水野	4	
棄権	ドンホッパー	若松	4	
棄権	北隼	本村	4	

第3回道内親善馬術大会 10月11・12日 於岩見沢競

○ B馬場

ドンホッパー 桑田
北秀 小野(北大同)

○関門飛越

2位 北武 中島1 1反抗
ドンホッパー 岩田1 2反抗

○社会人障害

1位 北秀 小野(北大同)

○小障碍

3位 北秀 横沢3 バラージュ 満点
4位 ドンホッパー 大東2 バラージュ -4
5位 北武 佐野3 バラージュ -8
15位 天龍山 山本2 -4
16位 北武 本城2 -7
失権 羊蹄 水井2 ツイタテにて

○中障碍

5位 北武 佐野3 -9
6位 天龍山 阿部4 -21
失権 ドンホッパー 桑田3 経路違反
失権 羊蹄 平野3 ドラム横木にて
棄権 疾風 柴沼4

国立七大学定期戦 11月6・8日 於馬事公苑

○一回戦

東北大 -364.5 北大 -698.75 負け

○敗者復活戦

東大 -121.55 北大 -65.7 勝ち
以後雨天為頂位つかず、優勝 京都

第18回全日本障碍・総合馬術大会 11月14日～21日 於三重県鈴鹿市国体会場

○中障碍

第1 第2

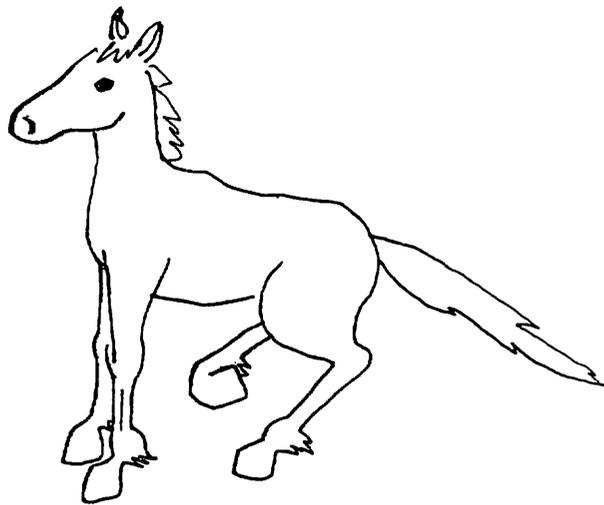
8位	スターライト	添田 4	- 8.2 5	- 8
16位	北隼	本村 4	- 2 0	- 8
	ハイエイム	水野	失- 5 9.2 5	失- 5 9.2 5

団体成績 第4位

○総 合

9位	疾風	柴沼 4	- 1 0 2.2 5
13位	天龍山	阿部 4	- 1 5 9 $\frac{1}{6}$
15位	ドンホッパー	桑田 3	- 1 6 3 $\frac{1}{6}$

団体成績 第5位



国立七大学戦

11月6・7日

平野 雅裕(3) 桑田 壮平(3)
横沢 敏夫(3) 佐野 淳之(3)

札幌では初雪の声も聞かれる十一月六日七日に、ケヤキ並木の紅葉にはえる東京馬事公苑にて復活第二回国立七大学戦が催されました。

今年の主管は名古屋大学で、馬事公苑と東京大学の馬を借りて行なわれました。

去年の輝しい成績から多少の不安と期待を受けながら経験の少ない貸与馬戦に臨みました。試合は馬術部のない阪大を除く六校で、主審は千葉さん、対戦方式は前年度のような総当りは出来ず、まず予戦で二校を選び、予戦の敗者復活戦を行なって合計三校で決勝リーグを行なうという形式でした。馬の頭数が足りない故の方式でしたが、馬に乗る回数が少なくなるという点でまず残念でした。

四名戦で北大のメンバーは三年目の男子、平野・桑田・横沢・佐野と丁度四人全部出場しました。

第一戦は北日本地区で馴染みの東北大学戦です。

後から考えると負ける試合ではなかったと信じているのですが、東北大学の連中の方が多少とも度胸が座っており、第一試合という緊張も併って北大のミスが目立ち、ベル前スタートや前段で失権してメチャクチャやられた、馬に後段でスタート前反抗一分取られたりして大差

で敗れてしまいました。

六日の最終試合第五試合では、北大は東大と対戦しました。今度は双方とも大きなミスはなかったのですが、反抗された障碍の位置、反抗後の対応、及びタイムが比較的よかった為に、東大減点二二・八五、北大減点六五・七〇で勝つことが出来ました。

明日の京都大学戦に全力で戦う決心を見せていた矢先、降り続いていた雨が翌日になっては暗くて遠くが見えない程の大雨となり、朝の打合わせで、少なくとも午前中の試合は断念せざるを得ないという結論に達しました。

とにかく午後からの決勝リーグは決行することにして、午前中の試合は皆さん考慮したあげく、馬に乗らないで勝敗を決めることは誠に遺憾なのですが、やむを得ずジャンケンで決定する事とし、案の定負けて午後の決勝リーグに参加出来なくなり涙を吞みました。うらむべきかな、昼頃になると、女心の方がよっぽど安定していると思われる程の秋晴れに豹変しました。そこでもう一度会議をもって対策を考えただけですが、馬の頭数及び時間の問題等の理由で午前中の試合を午後に行なうことは不可能ということで、東北大、名大、京大間で決勝リーグが行なわれました。結局ジャンケンで北大に勝った京大が優勝し、二位東北大学、三位名大の順でした。総じて落

下はほとんどないのですが、拒止される事が多かったようです。ちょっと乗っただけでその馬の性質を知るといって鋭い感覚は未だ我々には身につけていないといってしまうかもしれませんが、一度馬に乗って試合に臨んだら、技術云々は日頃の練習によるものとしてともかく、絶対にゴールを切るといふ気迫と拒止された時などに対する冷静な判断力は失なうべきではないと再認識することが出来ま

した。各人試合が終つて思うところは様々だと思ひますが、憶測するに初戦の東北大学に負け決勝リーグに残れず、意を決した翌日の試合も雨とジャンケンでお流れになつた惜敗の屈辱、及び数々の偉大な成績を残した四年生卒部後我々四人が自らの力で今年一年の北大馬術部を背負つていかねばならぬという責任と決意であつたに違ひありません。

国立七学戦といつても阪大に馬術部がなく六校で対戦すること、時期が他の運動部と違つて秋にあるということ及び復活して間もない為体制固めが出来ないという理由から馬術は、各大学体育会公認の正式な七大学戦の種目とはなつておりません。雰囲気も他のクラブよりも親睦的な傾向が強いようです。来年は北大の主管です。で、ぜひ上記の問題をこくふくして正式の種目に入れ、かつ優勝杯を手に入れようと日夜努力しております。

最後になりましたが、千葉さん、添田兄のお父上、平野さん、どうもありがとうございました。

全日本学生三大馬術競技

11月14日～21日

学生障碍

北隼 本村洋文(4) スターライト 添田昌一(4)
ハイエイム 水野豊香(4)

総合

疾風 柴沼 俊(4) 天龍山 阿部一哉(4)
ドン・ホッパー 桑田壮平(3)

全日学観戦並びに参戦記

三年目 桑田壮平

学生馬術界における最高峰とも言ふべき全日本学生障碍飛越競技会及び総合馬術競技会は今年、十一月十四日から二十一日までの八日間、三重県鈴鹿市にある三重県馬術競技場で国体と全日本馬術大会の後を受けて開催された。

我々は北日本予選で出場権を勝ち得た北隼、スターライト、ハイエイム(以上障碍)、天龍山、疾風、ドン・ホッパー(以上総合)の計六頭という大所帯をこの地に送り込むべく十一月三日に貨車二輜で札幌を出発した。青森から日本海側をひた走りに走り、予定で

は一週間から十日かかるはずがたったの四日で貨車降ろし場所である国鉄加佐登駅に到着した。全馬とも多少旅の疲れは見えるもの、怪我もなく元気に競技会場へ一番乗りということに相なった。

この三重県馬術競技場は今年三重県で国体が開催されるということでその馬術競技場として新たに造られた馬場で、障害馬場、馬場馬場、準備馬場それに厩舎とさすがにどれも素晴らしく整備されており、特に障害馬場は東京馬事公苑の角馬場にも劣らぬ広さであった。到着五日後にドン・ホッパーが左後肢に跛行をきたし獣医師の方に蹄球部圧迫と診断され結局ぶつつけ本番ということになったが、他の選手各馬は十二日から当地での練習を許可されると同時に最後の調整に取りかかり、後は本番を待つのみであった。

そして十四日、朝からあいにくの雨であったが障害馬場において入場式が挙行された。いよいよ開幕である。入場式はさすがに全国各地で予選を勝ち抜いてきた各大学だけあってその威風堂々たるものであり総勢百十数頭が一同に会し、全日学にふさわしい幕開けの式であった。その中において我が北大もドン・ホッパーを除く五頭が堂々行進し、「北大今や健在なり」という印象を強烈にした。

さて、翌十五日から、二日間に渡り中障第一、第二走行が行なわれたのであるが、その経路は一目見るだけでは個々の障碍のポリューム、難度においてはバンケットもなく、さほど難しい様には思われなかったが、よく見ると障碍の配置の仕方などに落下で差がつくような配慮が見られ、満点でゴールする為には相当な注意力とテクニックが必要であるように思われた。

第一走行の日は朝からどしゃ降りて最悪のコンディションの中で行なわれた。我が北大の先陣を司さどるのは出場番号十一番、本村

兄騎乗の北隼号。スタートから少しつまり気味であったがやはり二年のキャリアを持つ本村兄と北隼号のコンビは見ていると安心だ。まずは五落下の減点二〇でゴール。

次に控えるは出場番号四十番、本命の添田兄騎乗スターライト号入場後場内アナウンスが「この人馬は昨年この競技の優勝人馬です。」と一際大きな声で告げる。皆が困睡を呑んで見守る中、スタート！

小さいが全身バネのような体で障碍を一つ一つ拾うように通過。観戦している者にとっては障碍一個飛ぶごとに心臓がぐっと締めつけられる思いである。しかしそれ以上に添田兄の胸中には我々の想像を絶するものがある。ただ無心としか言い得ない。やはり若干の気負いも見受けられたが第十一障碍まで無過失で通過。満点でゴールも真近と思われた瞬間、第十二障碍ダブルのaで落下。続く第十三障碍水壕に後肢が入る。結局減点八・二五でゴール。しかし人馬とも精一杯やったという感じであった。

さて最後に控えるは出場番号五十八番、水野兄騎乗のハイエイム号。皆の期待と注目の中、スタート！
ところが次の一瞬、本当に自分の眼を疑いたくなるような事が起きた。第一障碍で二拒止。三回目、水野兄の気力でやっと通過。しかしこれで馬のペースが狂ってしまい再び悪夢を見ることになった。第四から第五へ向かう時、直角に左へ折れて第八障碍トリブルのbとcの間を通らなければならぬのだがそこで曲がり切れず、トリブルのb障碍を逆手前から通過。結局経路違反失権ということになってしまった。無念！

翌日、前日は打ってかわった好天の中で第二走行が行なわれた。

出場番号は前日と変わらず。

まず先頭の本村兄騎乗北隼号。本村兄、部生活最後の有終の美を飾るべく第二障碍と第八障碍のトリブルのcで落下しただけで、減点八でゴール。皆、俄然意気上がる。ここで一気に波にのれば或いは団体三位も可能だ。

次は添田兄騎乗のスターライト号。前日の気負いはもう見られず結果は二落下、減点八であったが安定した飛越ぶりであった。

さあ、最後は水野兄騎乗のハイエイム号。前日の悪夢を見事払いのけるべく皆の期待を一身に背負ってスタート、ところが悪夢はまた甦った。

スタートした次の瞬間、非情にも失権のベルが鳴る。

皆一瞬自分の耳を疑った。「えっ？」

すると場内アナウンスが流れた。

「ベル前スタートにより失権です。」

「そんな馬鹿な？」

しかしそれは事実であった。水野兄・ハイエイム号が入場後、敬礼。しかし障碍整備が終わっておらずスタートOKの合図が下されないうちにスタートしてしまった。何とも悔やまれる一瞬である。

さて、中一日置いて十七日より三日間、今度は総合馬術競技が同じ会場で行なわれた。僕は添田兄の配慮によりこの競技にドン・ホッパーに騎乗して参加する幸を得ました。以下駄文ではありますがそこで体験したことを述べてみたいと思います。

前に述べた様に、ドン・ホッパーは到着五日後に左後肢に跛行をきたし蹄球部圧迫らしいとの獣医師の診断で毎日左後ろの蹄を水で冷やす日が続いた。とにかく試合の前日まで治ってくれたらよい

と思っていたが症状は一進一退で騎乗もできず、不安と焦りが日増しに強くなっていった。そして試合出場の三日前、つまり十四日の

晩、さらに悪いことには左後肢がフレグモーネ様を呈した。当地の獣医師の方に晩をおしてかけつけて戴き何とか症状の悪化を防いで戴いたものとても試合に出場できる状態ではなかった。しかし一

最後まで飽きらず最善の努力を惜しむな。」と困りの人達から励

まされ、また速征に参加していた部員全員に交代で徹夜の看病をしてもらった結果、本当に奇跡としか言い様がないが肢の腫れがひき跛行もせず、何とか試合に参加できる状態まで回復することができた。しかし参加種目が総合という非常に苛酷な体力を馬に強制する

競技であるのでいつ症状が悪化するかもわからない。だがここまできたら徹夜で看病してもらった部員全員の努力に報いるためにも一発勝負にすべてを賭ける心境で試合に臨んだ。

まず第一日は調教審査。準備馬場に入って恐る恐る準備運動を始める。しかしその懸念は不要であった。何と不思議な位よく動き、跛行も全くなし。添田兄にいろいろアドバイスしてもらって審査馬場へ。各運動課目を何とか無難にまとめ結果は減点七十三と六分の一。

二日目は最大のヤマ場である耐久審査。あいにく朝から本降りの雨で最悪のコンディションとなった。この悪条件に悪条件が重なった状態のもとで四十一番目にスタート。

スタートした以上あとはゴールを目指すのみ。運を天に任せる気持で障碍に向かう。第一障碍をまたぐようにして通過。第二はなんなく通過。少し余裕が出る。しかしそれも束の間、第四でつまり後肢をあてる。僕はバランスを崩してしまい落馬。気を取りなお

して次の障礙へ。この様にして前半はどの障礙もつまり、またぐようにして通過。後半第十、十一障礙あたりからは馬も調子に乗りはじめ、「ガンバノ」と半分馬に半分自分に声を掛けながらコースを走る。そしてとうとうゴールまであと五つ。団体では拒止馬が続出したという水濛飛び込み障礙も掛け声もろとも何なく通過。大きな坂の登り降り、すぐ生垣障礙。上で人間大きくバランスを崩すも馬の首に捕まりながら通過。あと二つ。障礙馬場に入ってバンケット飛び上がり飛び降り通過。あと一つ。高さ一m二〇、巾二mくらいの土手障礙を大きく飛越して通過。あとはゴール目指してまっしぐら。「出場番号四十一番、桑田選手、北海道大学、乗馬ドン・ホッパー号、ただいまゴール致しました。」という場内アナウンスが流れ、やっと我に返る。本当によくふんばってくれた。疲れがどっと出る。スタートしてからゴールするまで七分四十五秒。この間は全く空白のようにも思われるし、反対に全てのものが凝縮されたような気もする。今思えば不思議な時間であった。

三日目、最後の難関である余力審査。その前に行なわれた馬体検査において、一番心配された跛行も認められずまた馬体は一度聴診器を当てられ一瞬どきっとしたが異常なしと診断され、まずはほっとする。

さていよいよ最後の正念場である。考えてみればここまでやってこれた事自体本当に不思議なくらいである。しかし後ろに部員全員の力強いバックアップを感じる。前日の落馬による減点が大きく、上位進出は難しかったがもう絶対にゴールを踏める、という自身は強く動かないものであった。

場内アナウンスの呼び出し、入場、敬礼。スタートOKのベル、

スタートノ

第七障礙まで大きな飛越で無過失。騎手は少々遅れ気味。大きく右へ回転して第八障礙ダブル。ここで一旦馬体をつめることを忘れ伸び切ったまま向かったためaでつまり、bで落下。第九障礙も落下。大きく右へ回転して第十通過。第十一障礙巾三mの水濛。速くから出しすぎ踏み切りが遠く後肢が入る。そして最終通過、ゴール。結局三落下で減点三〇。最終トータル、減点一六三と六分の一。

阿部兄騎乗の天龍山号、柴沼兄騎乗の疾風号も無事ゴールを切り三頭とも帰ってこれたわけだが、僕が一番減点が大きく皆の足を引っぱってしまい、結局団体成績五位であった。

前にも述べた様に、一度は出場を断念しなければならなかったのがこの様に出場できて、しかも最終審査でゴールを踏むことができたのは本当に奇跡に近い出来事だと思いが、この奇跡を起こしてくれたのは遠征に参加した部員、札幌で留守を預かる部員全員の熱意のおかげであり、これ程部全体のチームワークの重大さを痛感させられた事はなかった。いろいろな意味で本当に貴重な体験をしたと思ふ。

最後に、ドン・ホッパーの馬匹として終始縁の下の力持ちになつてくれた三好君、大東嬢には深く感謝の意を表します。本当に御苦労様でした。

北大水産学部馬術部より

阪上 泉

一昨年の秋、灰色の空と背灰色の海を持つ函館の地に生まれて初めて降り立った。しかし、彼の地で馬を持つという事は、これっぽっちも考えてはいなかった。列車に乗って居る間は馬術部を再建してやろうだの、競馬場で一日中馬に乗ってやろうだの、まるで小学校に入学する子供のように単純に考えていたのだが。しかし函館に一步足を踏み込むやいなやそんな考えが泡のように消えてしまった。先登のTさんの「オイ、お前が来たからには馬を一頭入れよう。厩舎と馬場なんぞはないが、なんとかなるだろう。」の一言で。あるのは「果して、俺に出来るのか。いや、こりゃっ大変なことになったワイ」という、まるで山の様な障碍に向かった道産子の心境であった。馬が来るまでは「そんなこと出来るかいな。」と何度心の中で繰り返した事か。しかし、現実に十一月十日の小雪の中、ダイバレード号十一才、牡なんていうのが来てしまった。は、「ええい、毒食らわば皿までだ。もう後には引けませんよ。やるしかないでしょう。」という具合で当水産学部馬術部がまがりなりにも活動を開始した次第であります。

そして早二年が過ぎようとしています。この間に色々なことがありました。まるでビー玉をバケツからぶちまけたように頭の中をそれらの思い出が走ります。そして発足当時の部員で卒業してしまつた渋谷兄や新野姉には、ともかく苦勞の掛けどおしでした。しかし

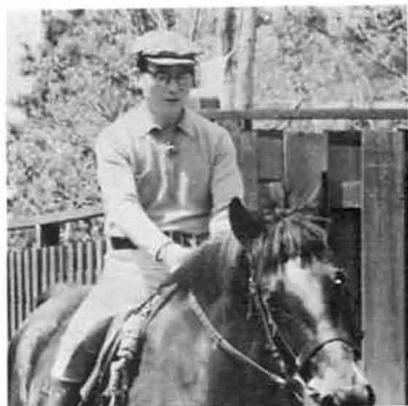
それらの思い出を言葉にして書くのは百年早い気がします。後四十年して、部報に原稿を書けども言われるまでは書けないと思います。

一応、現在の部の活動についてだけ記して置きます。現在、在函OB三名、現役六名の零細世帯であり、自馬一頭、自馬予定一頭です。厩舎は農家の納屋、馬場は学部の中にある広場と砂浜です。まともな馬術部や乗馬クラブに馴れた目には、想像を絶した代物であります。部員諸氏は大いに張り切って居ます。そして、厩舎・馬場を学内に造ろうと日々学生掛を相手に頑張つて、学生掛長をして「馬術部の諸君の顔を見ると、馬に見えて背筋がゾッとします。」等と言わせて居ます。しかし、自馬が一頭の為、初心者等の練習は毎日競馬場へ行きその馬を借りて練習して居ます。練習は日曜日を除く毎日、朝の六時から八時までです。初心者も最初から一人で乗せる為、落馬が多いようで、「馬から落ちたら、なるべく地面に伏せた方が、馬が蹴つても、頭の上を足が通過して危なくないんじゃないですか、先登。」なんぞという後登も居ます。現在の水産においては部員一人一人が個性的に伸び伸びとやって居るようになります。それを失なわずに、一つのクラブとしての、まとまりが出て来ればいいと思つて居ます。そしてそれも少なからず出て来て居るようです。最後に我々水産生は、二年半という短かい間に騎手の技術はさることながら、馬をも調教せねばなりません。普通の考え方では、無理なことかもしれません。しかし、そんなことは言つて居られません。その為に先登諸氏や本学の馬術部部員諸兄に指導等を多々御願ひすることになると思ひます。その切には宜しく御願ひ致します。

乱筆乱文御容赦願ひます。

馬のページ

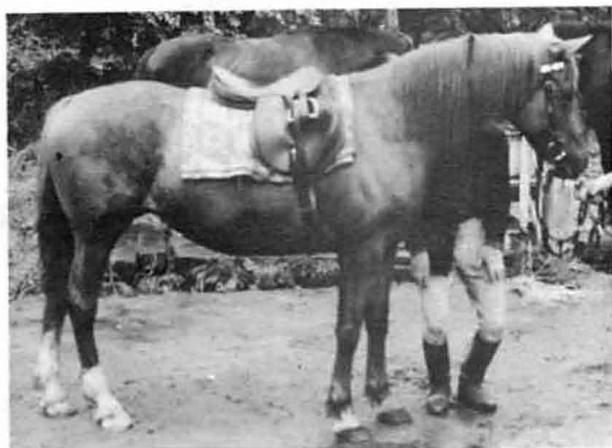
- 馬匹紹介
- 調教報告



河田部長と北武号



天龍山号



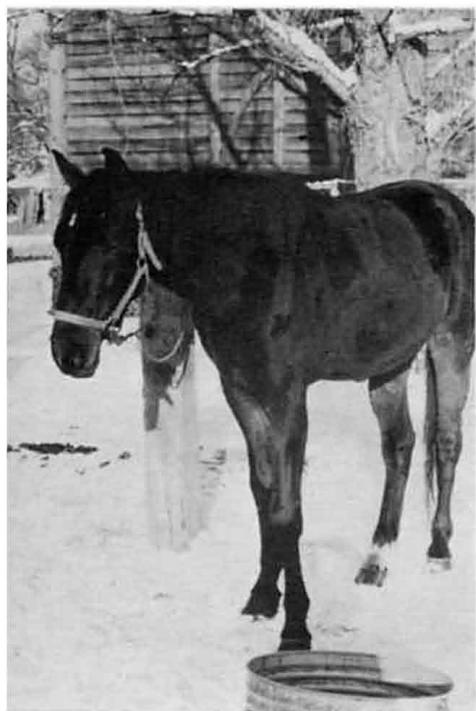
北秀号



スターライト号



疾風号(左)と北勇号(右)



ドン・ホッパー号



羊蹄号と北驛号



北 隼 号



北 燕 号



水野兄とハイエム号

北 隼 号

牡 サラ 鹿毛

昭和36年4月20日生

有珠郡伊達町産

父 サラ ガルガドール

母 サラ ライジングマンナ

体重 470 Kg

本 城 敬 文

二年間馬術部において私が一番長く接している馬は、北隼号・セントールである。彼との最初の出会いにはよく憶えていない。私の入部当時、すなわち二年前の四月頃は、彼に乗る機会もほとんどなく、又牡馬であることから他馬と隔離されていたため接することもほとんどなかった。朝練習に行くとクラブの入口近くに居る馬、それが彼であった。五月・六月の試合のこともよく憶えていない。

その彼との付き合いの始まりは、八月旭川で道大があったとき馬匹をやったことだ。チーフの本村兄にどんどん大きく歩かせるように言われ必死に歩いた。必死にというのは訳があって、彼は牝馬を見ると興奮するためである。一度などは土手の下を歩いていただけだが、上を牝馬が通りかかったのを見つけて土手の上まで私を引きずって登ってしまった。幸い、その時はすぐ離すことができ大事に

は到らなかつたが、それ以来絶対他馬には近づけるのをやめ、他馬のいない所を選んで曳馬をした。

そして幸か不幸か彼のサブチーフとなったのが二月頃だったと思う。前にも経験していたが、とにかく彼のサブになって一番頭を悩ましたのがこの曳馬であった。チーフの本村兄からは出来るだけ下の柔かい所を大きく大きく歩かせるように言われるが、他馬の姿が目に入るともう興奮して曳馬どころではなくなるので、しかたなく他馬と会わないコースをとるか、他馬と会わない時間帯をとるかした。それにその時間が30分以下であったことはあまりなかった。なぜなら本村兄はいつも30分以上曳馬をするからである。こっちは負けてはいられない。こうなったら意地であった。

他馬をさけつつの30分の曳馬がすんだら今度は手入れである。まず蹄洗。彼是他馬のいる水飲み場へは行けないので、いつもバケツで。彼はつなぎを持たれるのを非常に嫌がったのでかならず蹄を持って、それも素早くやる必要があった。蹄洗がすんだらブラシ。彼はブラシも少々嫌いだ。彼はきれいな好きで馬房もきれいだし、体もあまり汚れないのでたいていかるくブラッシングするだけなのだ。が、絶えず前後左右に動きまわって抵抗する。うっかりしていたら咬まれてしまう。咬んだ時しかろうとすると頭を高く上げて殴られまいとする。敵もさるものだ。でも彼はごくたまに気分が悪いとき本気になって咬む。彼の歯型が残っている人が何人いるだろうか。これで手入れが終わるかというところはいかない。彼はいつもどこかにケガをしていた。ケガをしていなかった日は数える程しかない。パドックですりむいたり、放馬してケガ、追突、交突（特に冬場クランポンをつける）とひどかった。そのため彼の後肢のクランポ

ンは特に小さい。貨車積中に暴れてケガ、立ち膨れ、フレグモーネ等々。そのための治療もしなければならぬのだ。オキシドール、赤チン、ヨーチン等で消毒し、ガーゼを当てる。ひどいときはマイシリンを注射する。熱があつて膨れてきたらリバノールで冷やす。おかげで治療法は一番早くマスターできた。

ようやく治療も終わり、やっと馬房へ。馬体管理表に、曳馬何分治療何々と書くときの快感は、他のサブにはちよと味わえないものである。

彼とは貨車の中でもいっしょだった。一年目の全日学、二年目の北日本、全日学と同じ貨車に乗って行った。彼は他馬との相性がよくないので、貨車積ではできれば一頭だけの方がよかつたが、それができないときは隣りに荷物を置いてできるだけ他馬と離れた。なぜなら彼は急に暴れだすことがあるからだ。一年目の北日本への貨車積のとき違う車両に乗っていたのでよくは知らないが、盛岡の操車場での蒸し暑くて虫の多い夜、突然彼が暴れだし、隣りにいた北勇は転倒して動けなくなるし、それはもう大変だった。真暗な中で懐中電燈の光をたよりに乾草を投げ出し、北勇を立てさせて狭い貨車の中で場所を入れかえた。それから治療。今から思い出しても信じられないことであつた。

でも普通は非常におとなしく、たまに飼料もねだつて前かきをする程度である。おもしろいことに彼はリングゴやミカンが好きで私達が果実を食べているとすぐ欲しがる。おかげでリングゴのシンやミカンの皮の捨て場所には困らなかつた。

彼とのサブとしての付き合いは結局新しい馬配が決定するまで続いた。途中他のサブになつたこともあつたが他の馬のことはあまり

よく憶えていない。その間、思い出すのは彼の気性の荒さ、治療、曳き馬の大変さ、その気遣い性の中にちよびり秘めたかわいらしさそして彼を包みこむ兄の愛情である。

北 燕 号

驥 サラ 鹿毛

昭和46年3月14日生

勇払郡鶴川町産

父 サラ マタドア

母 サラ リュウウエー

体重 508 Kg

矢 田 明

ようやく傷が直りました。三ヶ月の馬休は彼にとつても私にとつてもクラブにとつても良いことではありませんでした。私は、思いました。彼は何にも知りません。ですが、私は、あえて教え込むつもりは、今はありません、彼が覚えるまでゆっくり待ちます。

彼は、何にも知りません。知らないと言うことは、知り得るといふ事につながります。私たちの努力いかんによっては、彼は、馬らしくなります。

かわいいやつです。大好きです。デコの次に、
三ヶ月のブランク、私と彼は、その間に、調教の成され方を、調

馬券によって、実際に学んだ。この教訓を忘れなければ、何か、出来るような気がします。何分、残りつき合いですので言葉もあまり出ません。でも、いつも彼のことを考えています。愛する恋人以上に

事実、つまり実際の状況は如何と申せば、一口に言わせてもらえば、過渡期、とても申しましょか。本村兄の調教段階を知り、理解した上で、以後は、私自身が彼を導く時期に來てると考えます。調馬索の時期に於ては、彼は後退はしても、進歩はしていません。でも、私自身は少し進歩しました。調教に対する心構えを学びました。「忍耐」口に出すのは誰でもできます。でも、それはつらいことです。待つことだけです。大会のことを考えた場合、それは、あせりとなり、精神的に重荷でもあります。でも、そこでクラブ員は第一目標でもある試合の前提としての調教に全力を傾けるべきであると考えているから、あせってはいけない。もう、あせらず待てるような気がします。

常に思うことは、皆様には申し訳しかねますが、試合というのは単に結果に過ぎないということです。物事、結果ではありません。過程の上に立った結果、つまり、全体とても表現しましょうか。それが、そう言う考え方が大切なのではないでしょうか。理想といえそうです。でも、理想は、有って然るべきもので、理想無きは、自己矛盾となるはずで。

最近、緊張ということがわかりかけて來ました。緊張した運動はとても大切です。そして、緊張を解いた状態がある運動課目の中でこそ、それが意味を持ちます。馬は生き物です。そして、人間は、その生き物に乗るのです。

北隼号と北燕号

「セントオール」と「ツバメ君」

本村洋文

部報の原稿には、毎年頭を悩ませられるものですが、それにしても昨年の部報に続いて今年もまた両馬について何がしかのものを書ける自分を、今は幸せだと思っております。15才の北隼と5才の北燕、北隼とは結局2年間コンビを組んだわけですが、その間彼は私にとって先生であり、また最良の友でした。

一方北燕は、私のたった一人の生徒であり、可愛い弟でした。今年の新年会で、「私の夢は、いつの日か馬を持ち、それにセント・スワローという名前を付ける事です。」と言ったら、みんなから笑われました！こっちは本気で言ったのに——もっとも、冷静に考えれば、それは結局夢のままに終わってしまうかもしれないという予感もしますが、今後たとえ馬から離れざるを得なくなったとしても、自分を馬気違いだと思っている私としては、その夢を忘れたくないしまた忘れることもないでしょう。

前書きはこれくらいにして、まず北隼号の昨年の経過を報告します。3月末から4月にかけて、北海道の春はまだというのに、セントオールの春は一足早くやって來て、牝馬に向って柵の自由飛越を2度・3度。すごい飛越能力だなぁと一方では関心して、こちらは柵直しに精を出しました。しかし、高くした柵の更の上に彼はいつも

簡単に飛び越え、結局、いたずらがすぎて馬場埒にのっかって大怪我。その為、5月初めの半沢杯はパスということに相成りました。

昨年の彼と私にとっての初戦は、6月の対酪農定期戦であり、中障のみに出場し、4落でスターライトについて2位となり、彼と私のコンビは2枚目の「紙」を手に入れました。もう一枚の「紙」は、一昨年のやはり対酪農戦でしたが、結局、2年間で2枚しか「紙」をもらうことができませんでした。どうせ焚付けぐらいにしかかならないのだからと思うのは、やはり私の負け惜しみなのでしょうか。

その後、7月の道自馬ではやはり4つ落として、今度は番外に甘んじ、いよいよ本番の北日本学生に向いました。昨年の開催地である十和田は、ひどい猛暑にみまわれ、厩舎の中にじっと立っているだけで、馬体からは汗が吹き出すという具合でした。元々暑さに弱い北牛ですが、これには全く参ったようであり、飼いは上り、呼吸は乱れ、あのいつもは爛々と輝く瞳も、死んだ魚のそのように生気を失ってしまい、一時はほんとにどうなるかと心配しました。しかし中障では、さすが根性の馬、減点を落下のみにとどめ6位となり、西村さんの時から数えると4年連続して全日本学生への切符を手に入れました。

北牛の馬体状況を考えれば当然ここでやめるべきだったのでしょうが、欲張って総合馬術に出場したのが大きな間違いだったのです。ステイブル走行中、ほとんど馬体が上らなくなり、障障という障障には派手に足をぶつけ、もう少しして人馬転、ということが何度あったことか。ただ気力のみでゴールをめざし、緩慢なる動作でもって大地を押し進んでいる、という感じでした。もちろんゴールを切ることは切りましたが、後で見ると、打撲、裂傷、等膝か

ら下は文字どおりポロポロ……もちろん、翌日の余力審査は棄権し、続く道大会に向けての帯広遠征にも加わらず、ただ一頭、治療と休養の為、札幌に帰った次第です。それ以後、みんなが帯広から帰ってくる8月末まで、私は朝から晩まで北牛につきっきりでした。なにせ札幌に残っていたのは、北牛と私だけだったのですから。

さて、9月から11月初めまで、本来なら全日本学生に向けて最後の調整を行わなければならないのですが、恥ずかしいことながら、なかば私の側の責任ゆえに、そしてなかば北牛の側の事情ゆえに、ろくな練習ができなかったというのが実情です。もしそれゆえに、全日本学生で失権でもしていたならば、後になって大きな悔が残ったことでしょう。しかし全日学が目前に迫っても、練習できぬゆえの不安なり、あせりなりは全く感じられませんでした。失権など想像だにできず、むしろ、北牛にとって今必要なのは、訓練ではなく休養なんだ、と私自身そう信じきっていました。また騎乗できた時も、それまで付けていた丸い棒拍さえ捨て、外見的には非常におとなしい練習を心がけました。9月・10月の2カ月間で、どのくらい障障を飛んだでしょう。おそらく両手両足の指の数ぐらいではないかと思えます。もっともそれはあくまで外見の話であって、いろいろ考えることは確かにありましたが、それについては後で触れることにします。いずれにせよ、元々北牛は一四〇〜一五〇くらいは軽く飛越する能力を秘めているのですから仰々しく拍車をつけ、顔には背すじをたてて乗るなんて、全く騎手の未熟さをさらけ出す以外のなにものでもないでしょう。実際、拍車を捨ててみると、北牛は驚くほど落ちついてきましたし、またそうかといって、前進氣勢については何の不足も感じられませんでした。

そのような経過をたどって、いよいよ全日本学生となるわけです。全日学の会場である三重県馬術競技場に到着したのは、試合のちょうど一週間前でしたが、その日馬場ではオールジャパンの大障碍が華やかに繰広げられていました。フィנק、ミヌススラー、マンハッタン、メリーメリー、など馬乗りの誰もが一度は乗ってみたいと願う馬ばかり……：自分の試合のことも忘れ、そのすばらしい競技に目をみはったのは、一人の馬乗りとして当然のことでしょう。その中でも特に印象深かったのは、はじめて目のあたりに見る杉谷選手の卓越した技術でした。姿勢、騎座は無論のこと、走行中における前後左右の伸縮、具体的に言えば、飛越後一旦歩度を落とし、次の障碍の直前でその障碍の高さ、あるいは幅に合わせた歩度で通過する。しかも、それが端から見ているとごく自然に、そう、それが自然の節理にかなった馬の運動のごとく、私には思われたのです。もちろん次元の違いがあるかもしれませんが、あんな化物みたいな馬を自由自在に、そしてしかも自然にあやつる一流選手に比べ、骨と皮の15才の老馬ごときで（ボウズごめん）今日はひっかけられるのではとびくついている自分が、ほとほと情無くなりました。そして一週間後の試合では、できるできないは別問題として、歩度の伸縮を、そして私が北隼を踏み切らせるのではなくて、北隼が適切な踏み切りをせざるを得ないような誘導を心がけようと、心に誓った次第です。

さて学生障碍第一走行、あいにくその日は豪雨と強風にみまわれ最悪の条件だったのですが、やはり5個も落としてしまいました。減点20点ですから、当然上位入賞の望みはなくなつたわけで、第二走行はむしろ少し気が楽になり、スターライトの添田君やハイエイ

ムの水野君と共に、団体入賞をめざし、落ちついて騎乗することができました。敬礼した後、「ボウズ、これが最後だぞ」と声をかけスタートに向かったところ、仕事をほうり出してわざわざ岡山から駆けつけてくださった則近さんの姿が、ちらっと目の中を通りすぎたのです。これにはどれほど勇気づけられたことか。

結果は2落で減点8。障碍の程度、それに2人のそれまでの戦績を考えあわせると、これが私と北隼にとって最高の試合でした。

二年間も乗っていて、最後の最後の試合でやっと自分自身満足できる走行をすることができたわけです。やはり一週間前の大障碍は、私にとって百鞍練習する以上の効果があったようです。試合後北隼を曳き馬していると、則近さんが駆け寄ってきて、まるで自分のことのように喜んでくださいました。先輩とはありがたいものだと思いますと同時に、ふと則近さんの姿が来年の私の姿と二重写しになり、ちょっぴり感傷的な気分になってしまいました。さて、今年北隼に騎乗するのは四年目の佐野君であります。ついでに彼のPRを一つ。私の北隼の騎乗を通して最もかけていたもの、それは「余裕」ではなかったかとつくづく感じます。馬が神経質であればある程、悍が高ければ高い程、騎手はそれをやさしく包み込んでやらねばなりません。もし私にもう少し余裕があれば、彼の能力を十分引き出すことができたのではないかと、思うからです。その点において、私は佐野君に多くを期待しています。なにせ彼は「余裕」のかたまりみたいな男なのだから……：もともとこれについて彼自身の弁はかなり異なるかもしれませんが。冗談はさておき、佐野君の健闘を心から期待します。

これで一応書きたいことは書いたつもりですが、第一に、私の技

術のおよび精神的未熟さゆえに、これと云って彼の能力をひき出すことができなかったこと、第二に、昨年はいち頭ツバメ君という新馬に乗っていたため創造する喜びを新馬の方に求めてしまったこと、第三に、詳しく日誌をつけておらず彼から離れてもう三ヶ月以上たった今、その記憶は霧の中に消えてゆく馬の姿のように、おぼろげになってしまったことなどの為、今年もやはりまともな調教報告を書くことはできませんでした。結局調教報告をかくという事は、恥をかく、ということではないかとつくづく思います。そこで最後に、恥をかきついでと云ってはなんです、北隼に魅了され、彼と共に馬術部生活の大半をすごした一部員として、彼の現在までの総括と将来への期待を述べ、この報告を終わりたいと思います。

昭和36年春、フランス産サラブレッド、ガルガドールの血を受けて誕生したセントオールは、競走馬として9才まで走り続け、昭和44年10月、北大馬術部の北隼号として第2のスタートを切ったことは、御存知の方も多いことと思います。その後2年程、小栗さんが調教され、昭和47年、西村兄をチャンとして全日学に初出場し、見事ゴールを切ったのです。その後、48年は則近兄、49・50年は私と人は変われども、この精悍な純血のサラブレッドは変ることなく失権を知らぬ馬として、ただ黙々とゴールをめざして障碍をとび続けてきたのです。難をいえばただ一つ、もちろんそれは鞍上の騎手の責任と言えるものでしょうが、勝てなかった。この4年間の全日本学生の成績をみても、一番よかったのは則近兄が総合で12位となつたのが最高で、あとは15〜24位までを行ったりきたり、しかし、落下を心配せねばならないという面を除けば、北大馬術部にとってこれ程安心して見ていられる馬はいなかったように思われます。

もっともこの4年間、北隼自身は以上のごとく変ることなく障碍を飛び続けてきたのに対し、その間彼を取り巻く北大馬術部の状況が大きな変貌を遂げたことは周知の事実です。

一昨年、スターライトが彗星のように現われ、全日学を制覇し、その後もハイエイム、ドンホッパー、疾風、天龍山と新しい馬が次々と育ってきたわけです。全日学に於いて、私が一〜二年生の頃は関心はというと、それは北隼が何位になるか、ということでした。しかし、今やそこに於ての我々の関心は、個々の馬が上位入賞すること以上に団体で3位内入賞なるか、ということにあります。関東勢に比べエントリーの際の不利もあって、昨年は不幸にして障碍は団体4位、総合は団体5位に甘んじ、我々の悲願は達成されませんでした。しかし、それは今や悲願ではなく、もう少しで手の届くところにあると思われるのです。その時、失権を知らない北隼の安定した力は、団体優勝をめざす北大チームの大きな戦力となるだけでなく、彼の双肩にかかる期待は今までのそれとまさるともおとらないものになるでしょうし、またそうであってほしいと願うのです。

頑張れ北隼 / 頑張れセントオール

さて、これからが北隼の調教報告になるわけですが、さすがに大分疲れてきましたので、所々端折ったものになることをお許し下さい。彼の容姿・容貌については、昨年の部報を見ていただければ大かた見当はつくと思いますが、その他、動作・性格、どれをとってもすべてマンガチックなものばかり。去年は全く楽しい思いをさせてもらいました。もっとも本心を言うと、2年前スターライトを

調教された松井さんのように『今年、目標の中障レベルまでもって来たわけであるが……』という書き出しで、格調の高い調教報告を書きたかったのであります。ところが、実際はなにをやっていたかというところ……

○月×日：外乗に於て、壕の馴致のため常歩で向けたら、なんとツバメ君、あれよあれよという間に壕の中に入ってしまい、その中で動けなくなってしまった。仕方なく下馬して、彼を引っ張り上げようとしたが、いかんせん彼の体重は五〇〇kg以上……とにかくしんどかった。彼は果して馬なのであるうか。

○月×日：最近思うのだが、朝馬房に行くとき他の馬はワラの中にポロがあるのに、なぜツバメ君だけポロの中にワラがあるのだろうか。ワラは腸の蠕動運動を促進する効果があるというが、それも程度問題だと思ふ。もう少し上品になってくれよ、だって君は由緒正しいサラブレッドなんだろう。

○月×日：今日、本で兎頭という項を調べてみた。(もちろん彼が兎頭だから)それによると『額と鼻梁が曲線を描くようにふくれているものを兎頭またはローマン・ノーズという……中略……サラブレッドにはほとんどみられない頭の形であるが、ごく稀にいても、直頭に比べるといかにも凡庸にみえるので好まれない』どうせそんなことじゃないかと思っただけ……

以上は、「北燕ノート」からの抜萃ですが、今から振り返ってみても、果して彼を調教していたのか、それとも彼を着にして私一人が楽しんでいたのかよくわからないくらいです。それゆえ、当然胸を張って調教報告など書ける筈ありませんが、彼と遊ぶにしろ、彼

に何かを教えるにしろ、少なくとも彼の背にまたがった時には、ただ一つ、前へ、前へ、ひたすら前へ、それだけを思って騎乗してきました。もちろん、体力訓練なり、馴致なり、扶助の諒解なり(具体的に言うならば、まず頸の低伸を求め、ハミを噛ませた状態で運動させ、そこにおいて脚の扶助を教えるとも言ましようか)、また障碍飛越なり、他にやるべきことは山ほどあるように思われますしかし、前二つは別としても、頸の低伸を求め、ハミを噛ませることは、直接的にコブシで動きかけるものではなく、むしろ馬を前に出すことによって間接的に馬がコブシに依ってくるものであるし、また障碍飛越にしても、キャバレッティなり、飛び易い間隔に置いた踏み切りを自得させる為の連続障碍なり、具体的な練習方法はいろいろありますが、それには脚をつかわれたら前に出るといふ、人と馬との間の基本的な約束事を徹底させることが第一条件であると思ふのです。初めは北燕が重いからという理由で、とにかく前に出すことを心がけようと思っただけですが、そのうち軽い馬も、いやむしろ軽い馬こそ脚で前に出さねばならないことに気がきました。北単だけに乗っていると、騎手とは全く関係なしに馬の方がどんどん前に出てしまうので、ついついそれを忘れがちでしたが、北燕に乗ることによって私は馬というものはどうであれ脚で前に出さねばならないという、いわば馬術の原点を学んだような気がします。前にも書きましたが、夏以後北単に騎乗する際拍車を捨てたのも、脚で前に出すための一つの手段であり、結局それは北燕に学んだことと言えます。

さて、以上のような考え方のもとで昨年一月から調教を始め、約半年が過ぎました。——その間に行った具体的な課業はあえて省

簡単に飛び越え、結局、いたずらがすぎて馬場坪にのっかって大怪我。その為、5月初めの半沢杯はパスということに相成りました。

昨年の彼と私にとっての初戦は、6月の対酪農定期戦であり、中障のみに出場し、4落でスターライトについて2位となり、彼と私のコンビは2枚目の「紙」を手に入れました。もう一枚の「紙」は、一昨年のやはり対酪農戦でしたが、結局、2年間で2枚しか「紙」をもらうことができませんでした。どうせ焚付けぐらいにしかならないのだからと思うのは、やはり私の負け惜しみなのでしょうか。

その後、7月の道自馬ではやはり4つ落として、今度は番外に甘んじ、いよいよ本番の北日本学生に向いました。昨年の開催地である十和田は、ひどい猛暑にみまわれ、厩舎の中にじっと立っているだけで、馬体からは汗が吹き出すという具合でした。元々暑さに弱い北軍ですが、これには全く参ったよう、飼いは上り、呼吸は乱れ、あのいつもは爛々と輝く瞳も、死んだ魚のそのように生気を失ってしまい、一時はほんとにどうなることかと心配しました。しかし中障では、さすが根性の馬、減点を落下のみにとどめ6位となり、西村さんの時から数えると4年連続して全日本学生への切符を手に入れました。

北軍の馬体状況を考えれば当然ここでやめるべきだったのでしょうが、欲張って総合馬術に出場したのが大きな間違いだったのです。ステイブル走行中、ほとんど馬体が上らなくなり、障りという障りには派手に足をぶつけ、もう少しで人馬転、ということが何度あったことか。ただ気力のみでゴールをめざし、緩慢なる動作でもって大地を押し進んでいる、という感じでした。もちろんゴールを切ることは切りましたが、後で見ると、打撲、裂傷、等膝か

ら下は文字どおりポロポロ……もちろん、翌日の余力審査は棄権し、続く道大会に向けての帯広遠征にも加わらず、ただ一頭、治療と休養の為、札幌に帰った次第です。それ以後、みんなが帯広から帰ってくる8月末まで、私は朝から晩まで北軍につきっきりでした。なにせ札幌に残っていたのは、北軍と私だけだったのですから。

さて、9月から11月初めまで、本来なら全日本学生に向けて最後の調整を行わなければならないのですが、恥ずかしいことながら、なかば私の側の責任ゆえに、そしてなかば北軍の側の事情ゆえに、ろくな練習ができなかったというのが実情です。もしそれゆえに、全日本学生で失権でもしていたならば、後になって大きな悔が残ったことでしょう。しかし全日学が目前に迫っても、練習できぬゆえの不安なり、あせりなりは全く感じられませんでした。失権など想像だにできず、むしろ、北軍にとって今必要なのは、訓練ではなく休養なんだ、と私自身そう信じていました。また騎乗できた時も、それまで付けていた丸い棒拍さえ捨て、外見的には非常におとなしい練習を心がけました。9月・10月の2カ月間で、どのくらい障りを飛んだでしょう。おそらく両手両足の指の数ぐらいいかなと思います。もっともそれはあくまで外見的な話であって、いろいろ考えることは確かにありましたが、それについては後で触れることにします。いずれにせよ、元々北軍は一四〇〜一五〇くらいは軽く飛越する能力を秘めているのですから仰々しく拍車をつけ、顔には青すじをたてて乗るなんて、全く騎手の未熟さをさらけ出す以外のなにものでもないでしょう。実際、拍車を捨ててみると、北軍は驚くほど落ちついてきましたし、またそうかといって、前進氣勢については何の不足も感じられませんでした。

調教された松井さんのように『今年、目標の中障レベルまでもってきたわけであるが……』という書き出しで、格調の高い調教報告を書きたかったのであります。ところが、実際はなにをやっていたかというところ……

○月×日：外乗に於て、壕の馴致のため常歩で向けたら、なんとツバメ君、あれよあれよという間に壕の中に入ってしまい、その中で動けなくなりました。仕方なく下馬して、彼を引っ張り上げようとしたが、いかんせん彼の体重は五〇〇kg以上……とにかくしんどかった。彼は果して馬なのであるうか。

○月×日：最近思うのだが、朝馬房に行くとき他の馬はワラの中にボロがあるのに、なぜツバメ君だけボロの中にワラがあるのだろうか。ワラは腸の蠕動運動を促進する効果があるというが、それも程度問題だと思う。もう少し上品になってくれよ、だって君は由緒正しいサラブレッドなんだろう。

○月×日：今日、本で兎頭という項を調べてみた。(もちろん彼が兎頭だから)それによると『額と鼻梁が曲線を描くようにふくれているものを兎頭またはローマン・ノーズという……中略……サラブレッドにはほとんどみられない頭の形であるが、ごく稀にいても、直頭に比べるといかにも凡庸にみえるので好まれな』どうせそんなことじゃないかと思っただけ……

以上は、「北燕ノート」からの抜萃ですが、今から振り返ってみても、果して彼を調教していたのか、それとも彼を肴にして私一人が楽しんでいたのかよくわからないくらいです。それゆえ、当然胸を張って調教報告など書ける筈ありませんが、彼と遊ぶにしろ、彼

に何かを教えるにしろ、少なくとも彼の背にまたがった時には、ただ一つ、前へ、前へ、ひたすら前へ、それだけを思っただけで乗りました。もちろん、体力訓練なり、馴致なり、扶助の諒解なり(具体的に言うならば、まず頸の低伸を求め、ハミを噛ませた状態で運動させ、そこにおいて脚の扶助を教えるとも言ましようか)、また障碍飛越なり、他にやるべきことは山ほどあるように思われますしかし、前二つは別としても、頸の低伸を求め、ハミを噛ませることは、直接的にコブシで働きかけるのではなく、むしろ馬を前に出すことによって間接的に馬がコブシに依ってくるものであるし、また障碍飛越にしても、キャバレッティなり、飛び易い間隔に置いた踏み切りを自得させる為の連続障碍なり、具体的な練習方法はいろいろありますが、それには脚をつかわれたら前に出るといふ、人と馬との間の基本的な約束事を徹底させることが第一条件であると思うのです。初めは北燕が重いからという理由で、とにかく前に出すことを心がけようと思っただけですが、そのうち軽い馬も、いやむしろ軽い馬こそ脚で前に出さねばならないことに気がきました。北燕だけに乗っていると、騎手とは全く関係なしに馬の方がどんどん前に出てしまうので、いついそそれを忘れがちでしたが、北燕に乗ることによって私は馬というものはどうであれ脚で前に出さねばならないという、いわば馬術の原点を学んだような気がします。前にも書きましたが、夏以後北燕に騎乗する際拍車を捨てたのも、脚で前に出すための一つの手段であり、結局それは北燕に学んだことと言えます。

さて、以上のような考え方のもとで昨年一月から調教を始め、約半年が過ぎました。——その間に行った具体的な課業はあえて省

略することにします。その頃には低い障碍なら、ポコン・ポコンと御世辞にも迫力のある飛越とは言えませんが、とにかくあまり苦もなく飛べるようになっていたので、私も彼のデビュー戦を秘かに考え始めました。

ちやうど北日本遠征の際、北燕を除く全馬は中障なり、総合なりに出場すべく計画がたてられており、ツバメ一頭残しておくのも面倒だから……というわけで、なんとなく北日本学生馬術大会B障碍が彼のデビュー戦となった次第です。

さすがに緊張しました。全日学の時よりはるかに緊張しました。たとえB障碍(H一〇〇、W一三〇まで)であろうと、自分の調教した馬で自分が試合に出場する……馬乗りとしてこれ程うれしいことはないと思います。もちろん失権すれば、一挙に奈落の底に突き落とされるわけですが……。第一障碍でいきなり左へよれた時はあせりました。しかし何とか通過させ、第二・第三と飛ぶうちに驚くほど調子づいてきたのです。私自身乗っていてびっくりした位ですから、北燕の実態を知っているうちの部員たちはもっと驚いたことでしょう。空耳だったかもしれないが、障碍を一つ飛ぶたびに「おお／＼」という声が聞こえたような気がします。結果は一落で二位でした。その後、馴致のため帯広について行く北燕号を矢田君たちに任せ、私は北半と札幌に帰ったことは前に述べたとおりです。九月以降、私の希望としては十月の岩見沢馬術大会あたりで中障に出してみたかったのですが、なかば私の側の責任ゆえに、なかば九月に「彼」から「それ」になってしまった北燕の側の事情ゆえにそれはなりません。また十一月の全日学以後も暫くは乗るつもりでありましたが、遠征から帰ってくるとひどい鞍傷におかされ

ており当分乗れないとの事。残念でしたがこれはきつと「おまえは三年半の間、馬に狂って全く勉強しなかったのだから、最後の半年ぐらいはまじめにやれ／＼」という神のお告なのでは……と思うことにして、北燕と別れた次第です。

今、矢田君が北燕の新しいチーフとなり頑張っています。北燕もまだ若いし、君もまだあと二年ある。だから、あせらず、じっくり調教をはじめからやり直すつもりで乗ってください。健闘を祈ります。

北武号

駒 トロッター 鹿毛
昭和40年4月17日生
北海道河東郡音更町産
父 トロ ビージェー
母 中半 コナンブル
体重 478kg

半 浦 剛

昭和四十年四月十七日生まれですから、もう今年で明け十二才、人間で言うならば壮年期も半ばを過ぎたという所でそろそろ精力減退、といってもいい所ですが、北武にはその心配はいりません。何故なら騎馬ですから北武は。とにかくまだまだ元気一杯で、飛ん

だり跳ねたり、時には人や他の馬が被害を被り、その方が心配な
です。

さて御存じの通り北武は、名前を体に合わせたのか、はたまた体
を名前に合わせたのか、とにかく武という感じの馬なのです。但し
体格だけです。みんなからブーブーと呼ばれるから余計太るような
気もします。その、良く言えばがっちりした体格、悪く言えば軛馬
のような体格をブーに授けたのはどうやらお父さんのようです。

何故なら岩大にいる異母兄弟がブーに瓜二つなのです。父ビージェ
ーはアメリカから輸入された純血トロッター（こんな言葉があるの
かどうかわかりませんが）で、母コテンブルもトロ系の中半であり
ます。日本トロッター協会（もうこれは幽霊協会ではないですか）
発行の血統書もあり、どここの馬の骨とも判然せぬそこの馬とはわ
けが違います。

先程、「武」は体格だけと書きましたが、では他は何かと申しま
すと「柔」であります。いつも首をくやくにゃ、体をくやくに
ゃで、コンニャクのように柔かいのです。そんなわけですから、体
格が体格の割に、リッターワリ言う所のアクロバティックな飛越をし
て落下が少ないのであります。その代り時々、障碍を拒止します。
特に濠とか連続が苦手のようです。これもご愛嬌程度にしてくれれ
ばと思います。

北武号調教報告

桑 田 壮 平

一応題名はおこがましくも「調教報告」としましたが、実際は、
「騎乗報告」いや「北武に騎乗させてもらった事に関する独白」と
でもした方が当たっていると思います。とにかく以下北武に関して
一年間、僕なりに考え、行なってきた事を反省を含め述べてみます。

僕が北武号を当時四年目の吉野兄から引き継いだのは一昨年十二
月、北武が全日学の出場を終えて帰札してからであった。その時の
馬体状況は、全日学の中障第二走行出場後に起きた原因不明の跛行
は治っていたが遠征後の休養も兼ね帰札後一週間程馬休という状態
であった。その頃僕が北武について知っていたことはただ重い馬で
左右の回転が良いという事位であった。そこでこれからどういふ
うに騎乗していったらよいかについて、まず二年間北武号を調教し
てこられた吉野兄にいろいろお伺いすることにした。その主な点を
簡条書きにしてみると、

- ① 疲れやすい馬なので一日なり一週間なりの練習に波をつけて
激しい運動を続けないうちに。
- ② 主に常歩における全身運動を心掛けるように。
- ③ 障碍飛越に関してはトロッターであるために障碍前で間歩を
合わせにくくつまったり、また巾障碍、連続障碍が不得手なの
でキャバレッティ後の連続障碍、巾障碍の練習で間歩の安定を
はかる。また駈歩での通過も練習する。

④ 経路走行において障碍間における走行のペース配分を考え、特に障碍前では前進氣勢を一度馬体に蓄え込むように心掛け決して伸ばしきったまま障碍に向かわないこと。(馬体が沈下してしまい拒止の原因になる。)

⑤ 衝をかますことについて、北武は以前繋駕をしていたので顎を突張ったまま走る癖があるので輪乗り運動を中心に強力な脚柔軟な挙でもって落ち着いた動きの中で顎を譲らせる。逆鞭はその一つの補助手段である。

以上の様な事であった。そこで差し当たって冬場は外乗で雪の深い所を歩かせての体力養成、主に輪乗りで落ち着いた運動の中で扶助に対する敏捷性の養成。馬場外で雪の状態の良い時に走り回ることによる前進氣勢の養成、障碍に関してはキャバレッティ中心に踏み切りの安定、高さはせいぜい一mまでで巾障碍の練習を心掛けるようにした。

しかし実際騎乗してみると思うようには動かさず(特に歩度の伸縮において)それはただ自分の脚力の不足とばかり思っていたが、本当はそればかりでなく、拳が硬い為になかなか馬が前に出ようとしても口を邪魔してしまつたことにも原因があった。また単調な運動を長く続け過ぎた為に馬をだらけさせてしまつたことも考えられる。障碍練習に関しても踏み切り、間歩の安定という事で余りにもキャバレッティばかりに専念し過ぎて馬をやたらと疲れさせるだけであつたように思う。

やがて春になって雪が解け始め、馬場がガチガチでまともな運動ができなくなつたので毎日街乗に大半の時間を費やし、放棄手綱でのんびり歩かせることに心掛けた。それが結局良かったと思うが三

月下旬になって馬場の状態がある程度良くなつたので連続障碍をやり始めたが障碍前でつままることもなく大きな飛越をするようになった。

そして四月。いよいよシーズンの開幕だと意気込んだ矢先、非常に恥ずかしい事であるが管理の不行届きによる放馬で燕麦を食べ過ぎ疝痛を起こした。平野兄、横沢兄にも手伝ってもらい必死の看病でなんとか悪化を食い止めることができた。しかしその翌日、極端な跛行をきたし常歩もままならぬ状態に陥つた。獣医師の診断によると過食性蹄葉炎とのこと。その結果四月下旬まで馬休ということになってしまった。その為五月初旬の半沢杯出場は断念せざるを得ず、結局下旬に行なわれる対酪農定期戦がデビュー戦ということになった。

当日、複合競技に出場したが結果は障碍の部で何の変哲もない乾潦で三拒止失権という無残なものに終わってしまった。反省としてその最大の原因は馴致不足も大きかったがそれ以上に準備運動の段階で重いからといって無闇に拍車の威力を借りてスピードを出すことばかりに気を取られていたため、馬をあせらせる原因となり少しも手の内に入れることができなかったことによると思われる。

そこで今度は六月下旬に行なわれる道自馬の複合競技に向けて寮の馴致は勿論、準備運動として落ち着いた動きの中での歩度の伸縮(主に速歩、駈歩)を心掛けた。同時に障碍前で歩度がつまらないように追い込める脚(拍車)が使えるように練習した。

しかし結果は障碍の部で第五のダブルのa(単一横木 H二〇〇)で二拒止、続く第六の山形二段(H一一〇、W一五〇)で失権という無念なものに終わってしまった。その反省として障碍前で一回つ

めて飛越した後またつめるといふリズムがなく、ただ馬の出るスピードにまかせて一本調子になってしまった為結局は馬なりになってしまい苦手な巾障で拒止されてしまった。しかし根本的には酪農戦以来馬を手の内に入れるということに関して何の進歩も得られなかったことになり激しい自己反省を強いられざるを得なかった。

そしていよいよ今シーズン最大目標である北日本学生大会を目前に控え、課題として障前前で一回つめてから向かうという練習を繰り返した。また構内各地に作った野外障障を利用して耐久競技における障障馴致と騎手のスピード感覚の養成も心掛けた。そして八月初旬、北里大学の馬場に於いて僕にとって初めての大試合という極度の緊張感の中で幕は切って落とされた。しかし結果は調教審査において経路違反による場外失権という何の言訳も許されない恥ずかしいものになってしまった。

だが自己嫌悪に陥いるのも束の間、今シーズン最後の締め括りとも言うべき道大会が帯畜大の馬場で間もなく開催されようとしている。そこで自分も今シーズンの総括のつもりで総合競技に臨んだ。

第一日目午前中に行なわれた調教審査を何とか無難にまとも、午後の耐久競技は減点ゼロでゴールすることができた。しかし二日目の余力審査において第五障障ダブルのa(箱パー H一一〇)で二拒止、b(平行 H一一〇、W一五〇)で拒止失権という結果に終わってしまった。結局は道自馬と同じ失敗を繰り返したことになる。以上、北武号について今年度の経過を長々と駄文を続けてきましたが最後に北武に関するこれからの課題について、僕なりに考える事を幾つか挙げて筆を置きたいと思います。

まず馬側として第一に、トロッターであるため駈歩、特に短縮駈

歩の持続が不得手なので駈歩の歩度の伸縮運動の中でそれを練習し、障障飛越の際の後軀の踏み込みによる弾発力を増加させる。第二に間歩の安定という事でキャバレティ後の連続障障、それから発展して連続障障の駈歩通過。その際に不得手な巾障障を組み合わせてその飛越練習も同時に行なう。

次に騎手側として、これは一般的に言えることであるが特に必要なこととして第一に扶助に対する敏捷性の養成という面で、重いからといって無闇に拍車に頼らず拳の軟らかさでもって前に出ようとする力を静かに受ける。しかしある前進気勢のレベル(その日その日の運動量に合わせた)に達するまでは拍車、鞭といった強硬な手段を用いてもよい。しかしその時期をできるだけ短くするよう心掛ける。第二に、やはり初めに吉野兄からの助言の④で述べた所の障障前で一度つめてから向かうという呼吸の体得。第三に、決してある種の同じ運動(たとえば歩度の伸縮)を長時間繰り返さず、馬に無駄な疲労を負わさない。(北武は特に疲れやすく、飽きやすい)この一年間、一つも満足のいく成果を挙げられず、部全体の志気にも少なからず水を差してしまったことに非常に責任を感じますと共に、それにも拘らずいろいろと助言を授けてくださった吉野兄はじめ先輩諸兄の方々に厚く御礼を申し上げます。

北勇号

驕 中半血（トロッター） 鹿毛

昭和36年生

体重 454kg

石川 淳子

北勇と付き合い始めて半年。この馬、人見知りをするのか、それとも私が馬見知りをするのか。交際当初は、「勇スケ、そんなに冷たくしないで」と思う毎日。でも、北勇に甘えてほしいなどと思うのは、完全に私の勝手。北勇は、そんなに甘っこよくない。北勇の一人立つ姿は、ときにその名のとおり勇しく、暗闇しか見ない左目は、ときにさびしすぎる。耳を立てて、目をこらしているその表情には、思わず笑いかけたくなる。そんな北勇は、もう、おじいさん。私たちが教わるべきものを、ふんだんもっている。これからも、皆でかわいがって、クラブの力の一部にしてゆきましよう。

北勇と共に

柴沼 俊

昨年に引き続きこの北勇号という自分にとっては、馬とも思われ

ない程長いつき合いのやはり馬について報告します。二年目の馬匹からはほぼ三年になるつき合いに、馬から降りた現在でも、挨拶に行けば確実に覚えていてくれるということに喜びを感じています。しかし、今年度は、昨年度の様な成績を上げられず、自分の思いより未熟さを痛烈に感じていた次第です。

十一月の暖かい馬事公苑から帰ってくると札幌は、雪でした。冬場は、特別な課題や目新しいことはせず、というより余韻で、汽車を見に行くなど馴致に心掛けていました。外の歩き方、物に対する興味等は、素直に落ちついたものになっていて、乗り始めに較べると大きく変わっていました。しかし、この頃は、試合で追われた時期とは、全く状況も変わり、やることはたくさんあっても、新鮮さに欠けるということが、全てを覆い隠してしまい、二年目の欠点となりました。同時に、馬に対し、情はないつもりでも自分で気が付かないところにあらわれたり、逆にこの馬は、自分が乗ればどうにかならんという過信が、自分の慎重さを失なわせ、うまくいかないことを馬に押付けてしまうという最大の欠点となったことは、否めません。馬に対する感謝の欠如です。そんななかでも春までは、順調のように思われました。唯、非常に調子の良い時もそうでしたが、手綱だけで脚の使い方が弱い人が乗った時、左目が、みえないためか左に曲がろうとする時、右側にひっかけるように逃げる所がありました。左手前の駆足は、はみを受ければ、大分良くなってきたと思います。冬が明け、三月に三大戦があり、北勇は、他大学のAで、三人と我部の一人の計三人を乗せましたが、いずれも、ダブルのAで、三拒止してしまいました。自分が乗れば、行くので原因は、唯脚が弱いからだと思っていました。しかし、その頃からやはり、踏み切る前

に、はみを譲ってしまふ、つまり、障害前ではみはずす癖が、出はじめていたのかもしれない。とにかく、自分が、はみをうまく受けられない当時は、あてないようにある程度拳を固定し、それに追いつむように推進し飛越に入るまでは、絶対ひっぱらないのと同様に、外さないようにし、飛越してからは、ゆずってやるようにしていました。これが去年うまく行き、馬が、はみを持っていくのを押える程の良い前進氣勢を持っていました。

この前進氣勢の基に、障碍のたいたい三間歩前から強く推進すると非常によい飛越をしました。ところが、これが過信となり、三間歩を勝手に乗り手が決めてしまい、そこで必ず飛ぶものだとし、拍車を入れたり、先飛びをしたりしてしまいました。この先飛びは、障害前ではみをフツと外すことになり、はみに全幅の信頼を置いていたこの馬にとって非常な困乱であったに違いありません。これが、馬の前進氣勢を消失させる結果となり、悪循環となったのだと反省されます。

そんな光景に気が付いたのは、五月の半沢杯のバルクルの試合に於てでありました。

この試合は、無失点のタイム差で二位という客観的には、問題のないものでしたが、今までの試合では、一番後味の悪いものでした。しかし、完全に分析することは、その時は、できませんでした。

しかし、不整地走行に関しては、非常に積極的で、良い条件が得られるキャバレッティの後の障害は、見事に飛んでいました。低く幅のある障害を多くやり、体全体とくに首を使って飛ぶことに心掛けていました。馬場運動に関しても、客観的には、まだまだでしたが、自分とこの馬に限って言えば、進歩は、人が、落ち着いて力が

大分抜けて乗れ、それに対する馬の見返り分があったという具合に感じられました。騎座を確固とし、自信を持って扶助することが、馬に対する最高の思いやりと思われれます。

五月二十五日に対駱農戦があり、複合では、どうかゴールしましたが、中障害で失権してしまいました。原因は、前述のことだと思われれます。去年の中障で帰ってきた苦しみを時間とともに忘却してしまい、安易な気持で臨んだことは、全く自惚千万、馬乗りにあらざる行為だったと深く反省させられました。

その後、人馬とも精彩なく、唯、何とかしなければと気負う気持ちと現実の間で、暗闇を彷徨う日が続きました。ある程度まで上昇することは、易しい。しかし、それを維持することは、難しい。さらに、失ったものを回復することは、さらに困難であります。無に對する比較は、存在しないけれど、成功をさらに高いものにしていくのは、経験が逆に、失敗を何倍もの大きさにして、攻めたててくるのです。精神的困窮は、自分の存在をも失なわせ、自己からさえも孤立してしまふそんな世界でありました。そんな中から、対応策として、害があるかもしれないけれど、自分の方から、少し強くはみに働きかけること、外に迷がさないように、押え手綱を有効に使うこと等を八の字乗り等で実践し、特に接点ではみはずさないふられない、姿勢を変えることに注意し、拳の柔軟性に努めました。キャバレッティを使い速足飛越、ダブルにして飛越、溜めた歩度のつめ、まさに一喜一憂しながらやっていました。

回復の度合は、遅いながら、少しづつ進みましたが、北日本に於て完全に回復することはできませんでした。馬が、障碍自体を怖がるようにしてしまつたものを試合に合わせた日程で直せうとするこ

とは、全くの矛盾であったかもしれませんが、そんなことを言
ってはならない。言わずにできなければならぬのが、私の立場で
は当然のことと思います。騎手が持つべき支えをわざわざ、外すよ
うな行為をし、信頼を裏切ってしまった。人間の自信というものは
馬との契約の上に成立するものであり、その逆であるその場しのぎの
乗り方（これは、普段の練習中にも多く見られることでありますが）
は、全く馬に対して、一方的に契約を破棄するようなものだと思
います。馬自身が、素直で一途な所があっただけに、その分苦しめられ
ます。馬に乗るということのほんとうの難しさと己の空虚な自信とい
うものを何よりも効果のある沈黙という形で教えてくれました。
尚、昨年の部報とあわせ読んで頂ければ、この不鮮明な文章も少しは
よくなると思います。

言訳の山となってしまうましたが、最後に四年間の馬術部生活で一
番の思い出になったのは、北勇や疾風で全日学に行ったことではなく
三年目の盛岡での北日本学生大会に於ける北勇との健闘であるとい
うことを記し、北勇号と馬術部を去ります。さようなら。

北 秀 号

牝 中半血 栗毛

昭和40年6月2日生

北大馬術部産

父 北彗 中半血

母 北涼（グレース） 中半血

体重 508 Kg

竹 林 圭 介

いったい如何なる名文をどの位長く書きつらねれば彼女の馬匹紹
介なる文章ができるものやら。

愚考はいくらめぐらしたところで名文が書ける道理は無し、馬乗り
だけに限らず物書きまでも泣かすのです。まあ、とにかくスターの
ような華麗さも、単やはやてのような鋭さも天に昇る龍のような高
い目標も無いけれど、今に見ておれ、どっこい生きてる、亀の甲よ
り年の功てなもんで、おそらく誰もが一度はこんちくしょうと思っ
た彼女は、きっと誰もが一番に愛している馬でしょう。

そんな彼女も最近では、ちょっと前までガキだったドンやテンがなま
いきて住みづらいようです。

北秀号調教を振り返って

横 沢 敏 夫

四十九年末、添田前主将下の馬術部が新体制を整え五十年年度の活動を始めたとき、問題となっていたのが北秀でした。癖馬と呼ばれ離厩の話まで上がりましたが、しばらく様子を見ようと決まりました。私が調教責任者となった上は何としても離厩などさせずにおかねばなりません。

さて、北秀に跨がったことはそれまで一年の時から一年半の間、回数には記憶がありません。記憶しているのは、顎が堅く脚不足により口を引っ張ってばかりいたことと、部班中は落ち着いているが単騎では興奮しやすく、手の内から脱してばかりいたということです。一年目最初の径路回りで、口を引っ張ったまま走り回られた印象は強く残っています。又、癖馬と呼ばれるのも、試合中或いは練習中にも往々にして、まるで騎手の未熟さを指摘する様に障碍で拒止したり、左右に逃避したためです。悪い点ばかり掲げましたが、北秀は決して駄馬ではありません。北大馬術部で生まれて十年、往時には全日学に参加しており、又その十年間先輩諸兄の努力の積み重ねがあり、調教が非常に進んでいる点では部馬随一でした。馬場運動はピカイチですし、障碍飛越も巧みで、落下は決してしない馬です。こういって性格の北秀号を調教するため、その基本として私が考えていたことは唯一つでした。北秀号も絶対に馬以外の何物でも無いということです。馬であるからには人間が扶助を通じて命じたこ

とには従う様に必ずなるということを信じておりました。

反抗というものは、馬の恐怖心と人間の技術不足が重なって現われ更に反抗が度重なるうちに馬がずるくなり、人間の扶助を無視するようになってくる。手の内から逃げることを覚え、少しでも恐怖を覚える或いは苦しみを受けた時にはすぐ反抗となる。今の北秀についてもこのことが言える。いかなる恐怖を抱くかを見極め、取り除くことに努める一方扶助に従わせるべく、何らかの策を構じなければならぬ。恐怖を取り除くと言っても非常に難しいでしょう。しかし、あくまでも人間があせらずに寛大に馬を扱い、技術（強烈なばかりでは無い）により恐怖を克服させることが大切である。馬に接する時間をできるだけ多く持ち、騎乗中はもちろん、それ以外の時も注意深く接し、不従順や反抗を未然に防ぎ人馬の信頼感を作り上げること、つまり人間の命令に喜んで従う様にさせることも重要である。

北秀の場合、物件への恐怖もあるが、そう強くはない。障碍を飛越する事に恐怖を抱き、又、試合で競技場を走る毎に興奮するのが一番の問題である。踏歩が小さくなったり、扶助から脱して突っ走ったり、回転で逃げるなどするのである。障碍飛越に際して、間歩をはさんだり、突進して直前で拒止したり逃避する。騎手の技術不足と言えば、それはそうなのです。不用意な脚や拍車、堅い拳などの粗雑な扶助では興奮させてしまい、御しきれないのは当然でしょう。人間の技術向上が大切です、と同時に馬を従順にもさせなければならぬ。

わかり切ったことを基本に置きこの一年間調教を続けて来ました。岡田監督、小野氏、先輩諸兄、中でも水野兄らに騎手の指導を受け

私なりに考えて調教して来ました。この一年間を振り返っても、記録にありません様に幾度も試合で失権を重ねるといふ無残な結果を残しました。

最初の頃は、蹄跡に沿って常歩中心に歩度伸縮、回転運動を繰り返して行いました。その後、速歩での輪乗り、蹄跡運動などと、助言や文献をもとにして、口向きの改善を求めました。その目安として顎を譲らせることを狙いました。しかし、推進不足（私の騎座の不安定さ）で、手綱を引いてしまい、更に始終脚で圧迫する事が馬体を抱く結果となり、とても満足が行くものではありませんでした。馬の方にしてみれば、口を引かれ、馬体を刺激されるばかりで、どう動いても許されること無く、全く虐待と変わらなかつたでしょう。人間がせり、不注意を反省すること無く、無益なことを行っていたのでした。はずかしい限りです。時間はかかろうとも、馬にも人間にも困難や無理の無い作業で、凝固させることなく騎乗することを第一とし、少しでも良い所は逐めてやり、又いけないことは、はっきりいけなさと教え、段階的に向上させて行くのでした。人馬の信頼感が足りず、騎手に喜んで従うどころか、強制されて渋々やるという感じでした。

障碍飛越の調教も、できるだけ興奮させること無く、ゆっくりした歩度で低障碍を飛ばせるうちは、歩度の調節、停止も順調でしたが、いざ歩度を伸ばしてとなると再び顎を突き出す始末でした。

一年間の後半になり、それまでの調教に疑問を持ちましたが、自信の無さから改めることに踏み切れず、それまで同様、口を引いたままに終わりました。

今後も部馬として活躍して欲しい。それには先に述べた様に、あ

せらず、寛大にそしていていねいに再調教を引き継ぐことが大切です。北秀が癖馬であると言われていました。しかし、どの馬についても悪癖（未調教のものとは違う）が程度の差こそあれ現われるものです。その様な時にも、あせらず寛大に注意深くそして力強く対処して行かねばならない。

私が一年間騎って来てはたしてどう良くなったものやらわかりません。しかし、今後も活躍して行くことに間違いはありません。

スターライト号

牝 ア・ア 栗毛

昭和41年生

沙流郡門別町産

父 トモスベビー

母 銘乾

体重 460 Kg

長 屋 清 隆

スターライト号は小さな馬である。体重・体高共に一五〇㎝そこそこであり、体重も部馬の中で常に最下位である。

軽度の（？）中年性肥満症を呈される方が来部され、スターライトに御騎乗いただいたことがあったが、騎乗される時、彼女はフワッというウナリ声ともタメイキともつかぬものを発した。その表情

にやり所のなさといったものを見た時思わず失笑してしまったものだ。

彼女の四肢は可憐な少女の細く白い指を思わせる。少しでも無理な運動をすれば、故障を起こすどころかたちまちボッキリいつてしまいうのである。

添田さんは彼女の四肢を「ガラスの肢」と称した。まさにその一言に尽きるのである（現在、左前肢内側と左後肢外側に骨瘤がある）また添田さんの口癖はいつも「スターライトは根性がある。」であった。

生来の悍の強さからか、折合いの良い馬を持たない。ケンカをして負けた相手にはあまり近づかないだけで服従はしない。騎乗していて彼女といったらケンカしてしまいうとうどうしようもない。エサをやっても歯をくいしばって食べようとしない。練習が終われば早くおろるとばかり鼻息を荒くする。更に鞍をおろせと、いら立って全身をゆする。まるでヒステリーを起こした女性そっくりである。彼女の感情が人間並みなのか、それとも一般女性が……なのかは知らない。

一見そっけなく、遠慮のないところから、多くの部員はそれほど彼女を可愛いがらないようであるが、感情に富み、単なる「馬」以上のものを感じさせる彼女につき合ってもらえる者としてはまんだらでもないのである。

スターライト号調教報告

添田 昌一

スターライトは、僕が乗り始めた当時、ヒザが悪いのと骨瘤とで足に不安があったのですが、今では両方固まったと同時に二才年をとって十一才になりました。特に言えることは悍が強く、神経質だが、素直で勇敢だということです。

馬は年をとるとずるいことを覚えてくるものだということを聞いたことがあるが、僕が乗っている間は、そういったことは感じられませんでした。もうすでに一頭の仔がいるはずなのに若々しいばかりで、走りたくてしょうがなく、反面、歩様は小さく、せわしくなりがちだということが言えます。

体こそ一五五cmと小柄ですが、最も頼しい馬です。全身のバランスも良く、筋肉も良く発達していて、足に不安があることだけが難点でしょう。特に注意したことは、ゆっくりした歩様で、一定のテンポで、輪乗りをすることでした。この時、特に拳に注意して、一歩一歩確実に脚を使うことを心掛けており、運動が単調に過ぎぬ様に気を付け総合の調教審査程度でもと思っていたのですが、思っていた程の効果はありませんでした。一番問題となったのは、ゆっくりした駈歩を続けることでした。これは騎手のバランスが悪いことが原因したと思われる。

そんな訳で、駈歩は発進をていねいにくり返すことに終始したのです。

スピードに関しては、初めの頃に、充分慣れていたのか恐さはなく、障碍前でも落ち着いてアブローチでできる様にはなっていました。毎日の運動では必ず一度は波を作り、緊張させて障碍をくり返しました。ゆっくりした速度から徐々にスピードを加え、不斉地、キャバレッティ（速歩）、小さな障碍をくり返すという形が一番多かった。パターンで、これが後での試合の準備運動のヒントとなり有効でした。障碍は極力同じもの避けて、少しでも変化のある障碍を飛ぶ様に心掛けて野外での運動なども非常に有効なものでした。（普段の曳き馬の時の馬の反応を見ておくことが有効）軽卒に向けてつまつたり、落下したこともあったのですが、注意深くやり直すことで切り抜けてきました。

一番気を使ったことは、常に信頼し、信頼される様、ていねいに乗ってゆかねばならないということで、試合の時に飛んでくれる様にといつも考え気持ちの良い時にやめることを心掛けました。

毎日、良い所で運動をやめることは難かしいことで、なかなかこれで良いと思うことができず、続かずぎて、あきらめたことも、ままありました。それは、ライトの気持ちを感じようとするということで、気持ち良くやめるといふ風に解決してきました。

一日単位の他、一週間、試合前の数週間の波を思い描いて、それに基づいて、その日その日の練習を決めて乗ってきました。

これから乗る人、管理・手入れする人に望むことは、他の馬についても言えることでしょうが、特にライトは悍が強い面があるのでぶつかり合うことなく、うまくコントロールしなくてはならぬという事です。基本的に忠実に、愛と誠実さをもっていていねいに扱って貰って下さる。

天龍山号

駒 サラ 黒鹿毛

昭和43年3月6日生

浦河郡浦河町産

父 サラ ネヴアービート

母 サラ カンキヒメ

体重 507kg

水 井 とく子

天ちゃん、まさに神秘の黒馬という印象が強い。人なつこい方ではなく、すべてに超然とした風である。しかし生来の防衛本能が強いというのか、つまらないことに驚いて、突然暴れることがある。それも表情だけ変えず、むしろ凄味さえ増して、ある人曰く、「冗談のかけらもない。」表情なのである。

練習中動かないことでも天下一品。舌鼓なんて勿論「馬の耳に念物」。拍車なんてあってなきが如き。これにはみんな悩まされているのです。さる人物の評に曰く、「まるで石うすみみたいな奴だ。」馬場に放すと、親分格となり、自分の飼付けを食べ終わると、平然と他馬の分を横取りしてしまいます。これには何度北勇が泣かされたことか。

こう書いてくると、まるで可愛気がなくなってしまうのですが、

本当は、字には託せぬ不思議な魅力を持っています。ただ悍が非常に強いというだけで、性格もおとなしく素直ですし、その冗談のなさに一種の愛嬌さえ感じられます。

天ちゃん、今年はより速くより高く飛翔せんことを！

天龍山に騎乗して

阿部 一哉

私が天龍山に乗ることになったのは、二月中半であった。それまで一年間に渡って同輩水野が親身になって調教・世話に当たっていた。一月にハイエムという怪物が入り、彼はハイエムに乗ることになった。そのあとを、未熟児の私が乗ることになったのである。北大に入って三年余り、天龍山は前肢の故障に大いに泣かされていた。そして三年目、水野が慎重に努力を重ね、故障さえ出なければ、全日学へ出れるだけのコンスタントな力量と体力を身に付けていた。そういう状態で引き継いだ私にとって、故障を出さずに全日学に行くことが至上命令となったのである。それまで、一頭に乗り続けたことのない身としては大いに不安であった。雪どけで馬場が悪いこと、前膝が不安だったこともあり、当初の目標であった四月までには、馬によく慣れ、動かせるところまで行くということがかなえられずにどんどん日々が過ぎていった。つぼにはまったときの軽快さとは逆に、ふだんのぎこちなさ。わき腹の毛が薄くなっているのを見るにつけ苦痛であった。練習後、ほとんど毎日自分の力量のなさにがっかりしていた。四年目であったが、学校は卒業する気がな

かったので今思えば、それでもいらぬことを考えずにクラブのみの生活をしていたのが、なんとかみな足を引っぱらずにやれたと思っ
ている。上昇ムードの部と天龍山に泥をぬることはできないと心中ひそかに思っていた。五月になるころによりやくはつきり天龍山というものがつかめた気になった。左からさざること。停止で四肢がそろわないこと。障碍によって得意不得意があること。外に出ての馬の心理。半沢杯争奪戦、対酪農戦、道自馬大会によって、そんなものが何にもなっていないことがはつきりした。障碍に近づくにつれて減速し、「ヨインヨ」と飛ぶ、それがトレッドマークになったのである。それを直さないかぎりは当然ある程度以上の高さのものは飛べない。北日本予選の日が近づいて来る。毎日のように、北日本までの期間を考え、この期間前からそれまでにどれだけ変ったかを考えてはあせりを感じた。まわりの馬が大きく見えてしやうがなかった。そうしたとき受けるアドバイス。私はこれを非常にたいせつにした。もやもやしているときに、まさに小耳にはさむという感じ。小耳にはさむというのは、つまり、期待（無意識に）していた情報を与えられたときの感激であった。岡田監督、小野さん、OB、そして同輩からのアドバイスがそれが一言であっても、へやを満たす香水のように満ちてくるものがあったのである。「出番の前の準備運動は天龍山の場合……。」「よれること、さざること、気にするより……。」「障害前でリズムを崩している、同じ……。」など、降りているときにわかっていても乗っているときに自覚できないことを「これだ！」とわかるとき、一つ賢くなったと思った。

はつきりとした自信などないまま、十和田市の北里大学へ北日本予選のため向ったのは七月下旬。青森と言え内陸部のため、日中

しん坊めと思ってポケット一杯の燕麦をやりました。毎日が楽しい遊びでした。

半沢杯―酪農戦―道自馬

こうした遊びのなかで春を向えました。三月既に腹に子を宿していた訳ですが知る由もなく、ただ他の馬が発情している頃に彼女は何の変化もなかったのを：：：こういう馬なのだろうと済まして居たのは迂闊でした。五月半沢杯を向かえる頃には、彼女は自由飛越馬としての迷声を獲得していました。それがそのまま騎乗しての状態には繁らないにしても、飛越に対する信頼感だけは完全でした。回転中の肩からの逃避は決して手綱を引かない、回転の誘導は開き手綱でという妥協点で解決していました。経路走行はかなり突駆け気味ですが、興奮迄には至らない。こうした状態の中で半沢杯に於てバルクールに出ましたが、突駆けて走るのだし、障碍は決してきる事がないから落とさなければ先づ優勝と秘かに思っていました。結果は意外に一落下にて優勝、満点馬がいたのですが、突駆けるといふ欠点が功を奏した訳です。半沢杯から酪農戦迄は、複合を目ざし馬場の練習をしました。伸長速歩の安定、回転の正確さ、駆歩発進の安定等。アビュイエは天から受付けず、僕の技術からいってあきらめざるを得ませんでした。障碍では速歩飛越でもって突駆けの矯正に努めました。試合は成績は三位入賞でしたが、内容は不満でした。一夜づけの馬場はとも角として、障碍での―反抗―拒止に於る反抗の方は、回転が急であつた為口を引いた事からの肩からの逃避、僕の失敗で馬の欠点を出してしまつたといふことでした。

一方、拒止の方は、それ以前に第一第二障碍で躊躇しながらやつと

通過したという状態があり、外での試合では、臆病という欠点を考慮しなければならぬことを痛感しました。

次第に夕方一緒に遊ぶことをしてくれなくなりました。以前なら馬場に放しておいて夕方僕が近づくとうりから飛んできたのが、この頃では、餌を見せてようやく誘い出す、しかも障碍を飛ぶとそのまま見むきもせずに厩舎に帰るといふことが多くなりました。しかも喜んで飛ぶという事もなく、拒止癖をつけるようなものだと考えて以後はこの遊びもやめになります。何か以前の信頼の絆がたち切れたやうでした。しかし考えてみれば、既に母親として遊んでなどいられなかつたのでしよう。

道自馬では始めての中障にゴールをきり、第一障碍での乗手のミスからの拒止の他はまづまづと思つておりました。

墜落

ところが、それから北日学迄は一途に下降を辿り、落胆の日々が続きます。徴候としてはすでに、体重が毎月確実に増し、かつては拍車をつけては下級生の部班が出来なかつた程軽快であつたが、この頃では拍車をつけても思うやうに出ない位に鈍重になってきました。歩度が短節になり、障碍では踏切りがつかまるやうになりました。しかし殊更それには目をつむり、むしろ良きに解釈することさえしていました。この頃は随分と「落着いてきた。」練習は今省ると怖しくなる事を馬に課しました。速歩の伸暢と遠くからの踏切りがその課題でした。かつての軽快さと飛越の伸びやかさを力で要求しました。それがうまうまいった日には、僕は、満足しました。試合を控えて課題を第一に考え、馬の気持を推察することを余り考えていま

せんでした。

北日本学生は当初総合を目標としていました。野外障碍の馴致の為よく外に出て走り回りましたが、興奮気味の事が多く、そんな中で恵迪裏の障碍を飛んでいた時、遂に頓挫を来しました。一つの礙を拒止し向け直しても全くの拒絶反応を示しました。喧嘩をした末横木をはづしてその時は通過させたのですが、以後、その方に向う事さえ嫌うようになり、外での興奮は一層増した様でした。既に貨車積迄二・三週間を残すのみ、総合に対する希望は全く失なっていました。馬場での障碍は、速歩では踏切りを近くする丈と思ひ駆歩での飛越を中心にしましたが、かなり追込むと、馬鹿飛び―軽快さには欠く―をよくし、うまくゆけば中障はと考えむしろ目標を試合の直前になってその方に変え、総合は放棄と思っていました。

貨車積み七月二十五日和田着。貨車にはまいった様子で落ちアリナミンを射った程ですが、厩舎に入って見る限り心配するほどの事はなさそう。翌朝より少しづつ運動を始めましたが、馬場の傍の山羊の馴致には最後まで泣かされました。興奮が、努めて落ちてせきパレットを充分すると共に、踏切り巾を助長する駆走での飛越を行ないました。興奮したせい、馬鹿飛びをよくしました。

七月三十一日中障第一走行。準備運動の完全な失敗。馬がいらつき、短節な速歩。それを伸ばそうと焦るほど馬が逆上した。衝にねばってもはや手に負えない。馬場入場、拒止。入っても前に出ず。時間ぎりぎりです。前に出ず。第一第二山羊に向う。第一通過、第二拒止。第二第三通過、第四拒止。第四通過、第五拒止。

八月三日、総合馬場。入場拒止。失権だけは免れたものの点数に

ならず。

八月四日、耐久。後が無く、無念。中障の反省として準備運動は放棄し、常歩で落着かせ、落着いた時に駆歩で突出す。馬場入場、スタートと共に、躊躇の余裕を与えず死にもの狂いで前に出す。途中二反抗で前半を越え、あとは惰性のみ。馬の行くに任せるのみ。残り二つとなつての急回転、人は気づかず、馬は曲りきれず。角の立木に人が激突、落馬、放馬。夢の彷徨。ヨコ、どこまでゆくんだよ。

八月五日、余力。跛行がみ、獣医を無理押しして出場。前に出ずのみ。突駈ける。第五水潦の後、急回転に過ぎて人馬転。あとは次々に落下してゴール。

結果は最下位でしたが、ゴール馬が少なく全日学の権利を得られました。道大は中障に失権。

知 ら せ

九月の声を聞き、妊娠七カ月という事が知らされた時、ああやっばりと思いました。その頃はそれ位に外見的に頭かになっていました。全日本が駄目になった事はむしろ救いでした。それ位に、練習が苦痛でした。たえず馬を苦しめている。そんな気がしていました。春からの経過を思い返してみても怖い程の気がします。数々の無理に堪えて良い思い出を作ってくれた羊蹄に感謝とお詫びがしたい気持ちです。

新 生

二月二十三日、早朝、男児出産。

誰にも知られずひとりで産みました。
現在母子共に健康な経過を辿っております。

心配下さった獣医先生方にはいろいろと有難うございました。

羊蹄号出産報告

北驢号誕生の記

山川 恵

北驢号 昭和51年2月23日生 牡 鹿毛

父 ドン・ホッパー
母 羊蹄

二月二十三日、当番が馬房の通路の真中に北驢号なる馬の姿を発見。ついに第二のデコ、純北大産の馬が誕生したのである。

羊蹄が太ってきたと言いだしたのは去年の八月末、九月になってますますひどく、これは異常ではないかと思い始め、半ば冗談のよう獣医に連れて行って診断をお願いしたところ、なんと妊娠七ヶ月という。これは冗談どころの騒ぎではない。部員の誰もが一度もこんな場面にあつたことがないのである。それから半年、にわか仕立ての知識をつめこんで様子をみていたが、羊蹄は我々を欺いて誰も知らないうちにひとり産んでしまった。というのも、一般的に出産前の徴候を示さなかつたので、というより私達が不慣れたため

にわからなかつただけかもしれないが、とにかく前日には明朝生まれるなど思いもよらなかつたのである。しかし難産でなくて本当によかつた。親仔ともども健康である。仔馬のほうは最初見たところ肢と頭ばかりしかなくようにみえる。何だか触れたら一瞬のうちに壊れてしまふのではないかと思われるような頼りない感じだ。まだ乾ききらない身体をふいてやり、親のそばに運ぶ。頼りない感じがとはウラハラになかなか重い。何回か失敗した後で、若干人力も手伝ってどうやら立ち上がる。そのうち肢をもつれさせながらもグラグラ、ヨロヨロ動き出した。(まだとても「歩いた」とは言えない)このあとは母親に任すほかない。といっても、これまでだって私達がやったことといつたらごくわずかで、大部分はオロオロしていただけなのだ。

六週間たった現在、仔馬は見違えるようにたくましくなり、同時に腕白小僧に成長した。馬場の中を小犬のように駆けまわり、旺盛な好奇心で色々なところに鼻をつっこみ、人間を遊び仲間とみなしてけしかけるのだ。服にかじりついたら離さないし、髪はひっぱる。果ては後肢で立ち上がって束りかかってくる。

まるで父親の昔の姿とソックリだ。これが今だからまだいいが、もう少し大きくなったらどうなることかと思いやられる。彼の歴史はまだ六週間であり、さして書くこともないが、三年、四年後は我部のホープとして期待されることは間違いない。今は唯、素直に大きく成長してほしいと思っている。

※ 北驢号(ほくすい)なる名は昨日の部員総会によって決定したものです。

疾風号

駒 ア・ア 栗毛

昭和45年5月31日生

沙流郡門別町美原産

父 ア オーバーマイン

母 ア・ア ミストビハヤ

体重 503 Kg

笠間淳子

疾風。憎めない馬である。人の顔を見ては首を振り振り近づいてきて、手あたりしだいなめまわす。愛情のしるしなのか、それとも燕麦ほしさなのか……

彼は馬に徹している。人間を知りはしないが、ただすなおに受け入れてくれる。もしかしたら人を人ともみていないのかもしれない。人間と一体になれる馬である。

しかし、これもつき合うだけならいいが、いざ乗ると、それこそ人間を理解してくれない。鈍感のかたまり。彼にはわかっていないのだ。なぜ人間が自分の腹を蹴り、拍車でこづくのか。なぜ痛い思いをしなければならないのか。きっと彼は、毎日毎日、この問いをぼんやりと考えながら走っているのだろう。答えはただ前に出ることだけなの……それをわかってほしいばかりに、今日もみんな

が彼を蹴り続ける。

それでも彼は、人間を憎まない。彼はいつも親愛なる瞳でみつめてくれる。黒い小さな瞳だけれど、精一杯見開いたその目は、ありのまま美しい。そこには純粹な、寛容な、彼の世界がある。

「目の位置が少々上過ぎるけれど」

柴 沼 俊

入部したてのまだどの馬も同じに見え区別もつかなかったころ、練習中に厩舎の裏でけたたましい音がして、僕は、非常に驚いたことがあったことを印象的に覚えている。さらに驚いたことは、馬場にいる上級生が誰も驚ろかなかったことであるが、その首の主こそまだ、クラブに來たてで、去勢もしていなかった頃の疾風であった。幼稚園以來の馬は「ヒヒーン」と鳴くという誤った知識を見事にくつ返してくれたその馬に乗ることになったのも奇妙なことである。ここで、幼児教育について一言述べるのではなく、クラブの馬というものは、そういうもので、必らず基礎を作った人がいて、表面的に華々しい人もいるということに言及したい訳なのである。疾風の場合は、堤さんから始まり、特に西村さんの努力には、今でこそわかる多大なものがあったと思われ、また阪上や荒井らの努力も忘れてはならないであろう。

僕が、乗り始めたのは、六月の中頃からで北勇にも乗っていたので、夕方の手入れ等は、一緒に乗っていた佐野君に任せていた。この馬は、部馬の中では、体高もあり、若く（六歳）、力もあった。

しかし、体力や傷に対する回復力などは弱い方であると思われる。普段は、少々なことでは動揺せず好意的に書くには、ちょっと憚られる程ボケーとしている。その度合は、暇な連中が、この馬の鼻をおもちゃにして暇を潰すという表現が、適切に物語ってくれるが、この点は、この馬の大きな長所でもある。しかし、野外での馴致はまだまだ不足で、馬の本性である驚くことが多く、さらに甘えた所があり、その点はよくない点であった。

実際上の特徴としては、速足は、非常に大きい歩幅と躍るような動きで素晴らしいが、それについて行ける騎座の安定性がないと全くだめになってしまう。その点下級生泣かせの馬である。はみに対しては、うるさくはなく、表現的に誤解を招きやすいが、言わゆるにぶいのである。にぶいということは、どういふことかと言うと、少々はみをきつくしてもそれについてくるということ、はみに敏感と言われる馬よりもずっと扱いにくい。すなわち、騎手が、気が付かないうちに強くしすぎてしまうことがあるから、余計に気を使わなければならないというのである。実際、強くしすぎてしまえば狂奔するのではないが、ひっかけるし、うまくかませられなければ全然出ない。はみの強弱というより、硬軟であるが、これが、この馬を生かすことにも殺すことにもなり、自分の失敗も成功もすべてこのことに起因している。さらに、速足の時びっこをひく、右手前の駆足がでにくい等と言われていた問題も、このはみ受けの方法により解決することが、できた。

はみは、弱めにし首がちらこまってしまうようにし、抱かないようにするということを当初の目標とし、さらに北勇での失敗を繰り返すまいと、先飛びしないことを特に心掛けた。はみさえ受か

っていけば、よく前にも出るし、障碍もきれいに飛越するが、逆にはずれてしまうと全く逆になるといふ長所にも短所にもなる点、この点が、この馬は徹底していたので、余計気を使った。七月には、構内にステイブルコースを作り、その練習をしたことは、非常によい馴致になり、人の勉強にもなった。このことは、今年度の我部の試合に於ける成功の大きな基盤になったと確信できる。疾風は、馴致さえすれば結構ひよいひよいと行く方で、特別いやがるものもなかった。しかし、初めて見るもの、特に自然の形を成していないものは、嫌った。が、多くの馴致を繰り返すうち、どんどん馴れていった。

北日本では、総合に出場した。馬場は、馬が予想以上にびくついた、最初の入り方が悪かった等から、思うように出来なかったが、一応の課題は、こなすことができた。野外走行は、人馬共初わたの経験なので、とにかく最初に頑張って馬をはやく調子に乗せれば、後はどうにかなるとの確信のもとスタートしたが、全くその通りで第四・第五障害一回づつ止ってしまったが、後は全く順調であった。ここで、障害の大小は、馬にとって関係なく、もう馴れだけであるという感を深くした。余力は、2落もしてしまっただが、元来この馬は、落下を非常にしにくいので、全く推進の問題で、満点でゴールを切る難しさ、気力の必要性をあらためて知らされた思いだったそんなことから、B障で佐野君が満点でゴールを切ってくれ優勝してくれたことは、優勝ということより、満点ゴールということが、嬉しかった。

以後、道大に於て、野外走行、第二障害で失権した。この失権ははみの柔軟性に欠け、ひっかけられたこと(狂奔でなく)と水に対

する馴致不足の2点で、以後全日学まで、ほとんど毎日構内の水場を求め馴致した。また、はみの掛け引きも、ひっかけようとしたら少しゆるめて、その分、脚で追い込むという具合に馬にそのすきを与えずかつ前進させるようにし、この二点の克服が、全日学の野外満点につながったことは、自負したい。また、はみをはずさないことを重点とした為、よく遅れてしまったが、これは、自分としては仕方がないことであつた。しかし、人が、疲れていないと推進するときに騎座が深くなるという、三点の長所、馬が逃げられない、遅れても十分ついて行ける、そして何よりも騎座が安定する、を持た推進が、できることもあつた。

とにかく、この馬は、重いので、前に出すことを第一目標に頑張ってきたが、非常に扶助に対し素直であるという最大の長所を生かして、甘えさせないよう、また、体力についての十分の配慮が、なされれば、総合馬として学生馬として、素晴らしい馬になることは、間違いないであらう。

疾風号調教報告

佐野淳之

疾風と北隼に関しては思い出す事に限りがない。はつきり言つて（これはこのたび卒業された本村兄の口癖であつた）、僕が馬術部に入部して以来サブチーフ及びチーフはこの二頭の馬を行つたり来たりしていたようなものだった。

調教報告と言っても調教らしい調教は一緒に乗ってもらつていた柴沼兄にまかせればなしたつたので本来の調教報告はそちらを見て頂くこととして僕なりに得た疾風感について書いてみたい。

そもその馴初めは、疾風の担当が現役部員ではなく当時五年目の西村兄であつた入部当初にさかのぼる。何故か彼らとウマが合つて最も多く接していた。西村兄が乗っている姿で覚えているのは障得を越える時に、飛越というにはあまりに不格好な、人間でいえばまるで立ち幅飛びをするかのようにびよこんと飛んでいたことである。そのため、乾草をゆわく紐で折り返し手綱のよなものを作つて矯正していたが、それが現在の彼の首付きの基であると思う。しかし最も主眼を置いていたことは現在でも重要な課題として残っている「前へ出す」ことであつたようである。誠に疾風は一年生泣かせの馬であつた。しかし僕が拍車を初わてつけたのもトキに乗つた時だつたし、軽速歩がうまくとれたのもトキが最初である。このころはボケとかバカとかいう巷の噂に彼の評価を見誤り過少評価していた嫌があつた。

やがて、今は函館に在る阪上兄の時代となる。彼の疾風にかける並々ならぬ愛情と、あの巨体での脚力でか一昨年の北日本大会での劇的B障優勝を克ち取つた印象は記憶に旧くない。

僕が乗り始めたのは去年の春からである。その頃は北勇の調子がよくなかつたので頼みの柴沼兄に見てもらう機会は少なかつた。しかし暗中模索していると添田・本村・水野兄らが見ちゃおれんという感じでいろいろアドバイスしてくれるのは乗っていく指針となつた。さて疾風との初めての試合が五月二十五日の対酪農大學戦である。前日に三時間歩いて酪農大へ行った。翌朝、曳馬すると馴致不

足で興奮しているのかはっているのか、いきなり走り出すことし
ばしばで腿に蹴りを一発入れられてしまった。「小障のトキ」と言
われていたくらいで小障くらいなら馬の方に弱点はないのだが問題
は自分がいかにおせるかということとよりまく随伴できるかというこ
とである。疾風は練習中に於ていくら脚を使っても全然歩度が伸び
なくなることもある。これは疾風に乗る人は誰でも突きあたる壁だ
と思う。考えられることは脚に対する従順の未完成、拳の動揺によ
るハミ受けへの反発及び人間総体への不信によるものである。以後
も乗っていく上でこの三点を常に念頭に置いた。さていよいよ試合
が始まると過度の興奮も伴って思うように動かすことが出来た。と
ころが途中で落下したことに見られるように恐らく飛越中にハミを
引っぱっていたらしく最終の前のダブルでつまってしまいAをやっ
と飛んでBで止まってしまった。むけ直して結局一拒止一落でゴー
ルし三位となったものの自分の弱点がさらけ出され何とも後味が悪
かった。試合が終わってその日に再び三時間かかって札幌に着いた。
トキは汗びっしょりだった。速乗会の疲れもあったのかも知れな
いが、しばらくたって高い発熱から大病の疑いをかけられ、大学祭
の陽気な雰囲気と離れて、水野兄と河田先生の研究室で検査の結果
を待つ悲愴感と祈るような気持ちには忘れることが出来ない。もちろ
ん疑いは耐れ元氣になりました。

そのころの課題は前記の三点の他に飛越時の随伴に慣れることで
あった。僕の少ない乗馬歴ではあるが疾風はその点では最も難しい
馬であるような気がする。少しでも先飛びをすればハミがはずれ障
碍前で一步はいってしまふ。その為、体が残りハミをあてる結果を
生み、経路走行中であれば歩度が保てなくなり、ますますびよこん

と飛ぶようになって首に乗ってしまふという悲劇をも引きおこすこ
とになってしまふ。また逆にそれをしまいと最後までふんばること
はハミを不信し障碍を嫌うようになるという決定的なリスクをはら
んでいる。他の事に関しては比較的許容力のある疾風に対してもち
の点には神経をとがらせた。人間の学習と共に馬の側として、キャ
パレッティ及び障碍前にある程度速くに横木をおいて踏み切りを安
定させることに努めた。また低い連続障碍によって、特についてい
くということに於て学ぶことが多かったように思う。

青森県の北里大学で催された北日本では、柴沼兄が総合に僕がB
障碍に出た。体が弱って体温が上り数日前まで家畜病院でお世話に
なりビタミン注射をしてまでの出場であったが試合になるとそんな
ことはみじんも感じさせなかった。この時ほどトキが頼もしく思え
た時はない。また第一障碍から第二へ向うときに少し歩度が落ちて
よれたもののそれ以後は次第に調子上りになって最後まで飛んでく
れたということが酪農戦の失敗を経験しているだけに何よりもうれ
しかった。もちろんこれはこの大会で全日本への出場権を得た柴沼
兄に負うところであって、同時に、俊、疾、淳三人のわんぱくの世
話を焼いてくれた笠間姉にはお礼の言いようがない。

さて全くの裏目に出たのが畜大での北海道大会である。こんどは
柴沼兄が総合、僕が中障に出た。総合の時は補助審判員をやらされ
ていたので見ることが出来なかったが、結局両者共疾風にゴールを
切らせられなかった。しかし準備運動の時点では止まられようとは
決して思わない程よく伸びた。これは後になって思うと試合場の興
奮による馬の変化に騎手が頼りすぎていたという感覚の未熟さにつ
ながっているのである。疾風の馬房に於る精神状態の改善に努める

ことを怠ったことと共に。

然し中障失権の原因は何はともあれ一番気をつけねばいけないことであつた随伴の失敗である。第一でほんのわずかハミをはずしてしまつたが為の後の障障で疾風本来の大きい飛びをさせることが困難になつてしまつた。ダブルのAで止まられ、二回目は障障をぶちこわすところまでおした結局三回共飛ばせることが出来なかつた。終わつてみると、それまでのことは別としてもその時に何故もつと拍車なり鞭なりを死にもぐるいになつて使えなかつたかと後悔することしきりである。どしゃぶりの雨の中で見上げる最終障障の何と大きく見えたことか。しかし、この時以来、試合となつたら何が何でも飛ばせなくてはならぬと身をもつて感じたことがこの試合での最大の収穫であつたと自分では思っている。

以上試合の事が中心になつてしまつたが、疾風から得たものは数多く大きい。その中で少なくとも馬上にいる時は甘えを排斥せねばならぬということも学んだ。特に疾風はあんな馬である。人間が馬のペースに妥協していたら進歩は止まる。昨年は大事はなかつたが元来足（身体もだが）の弱い馬なので、体力をつけるといふことは最低条件として余計な運動量を使わず、騎手が主としての権威をもつて計画された課題をてきぱき行つていくことが大きな壁を乗り越える鍵となる。

疾風は未だ未知の部分が多いとは言え、次第に頭角を現わして来つつある。

短所を補つて余りある彼の長所を失わずに欠点を一つ一つ克服して最高状態が来る日はそれ程遠いことではないように思えてならない。さあ、本城君、今度は君の手で彼を栄光のステージへ上げてや

つてくれ。

ハイエイム号

牝 ハンター 栗毛

昭和41年生

オーストラリア産

体重 568 Kg

ハイ・エムンコ

私の生まれ故郷は日本ではありません。はるかに遠いオーストラリア。広々とした野に生まれ、たくさん仲間と山を駆けまわって育ちました。あの頃はとっても楽しかつたのに、それがいつか船に乗せられて長い旅に出ました。やっと着いた所は、この狭々とした日本という国。この馬達は環境のせいかしら、みんな私より小さかつたり細かつたり。自分が急に大きくなつたみたいな気がします。日本での最初の落ち着き場所は、大阪の服部乗馬センター。吉岡さんという方を乗せるようになりました。何年間かここで走り回ったり、障障を跳んだりしてすごしました。去年の一月に、北海道からひよろつとした男の人がやってきて、私を観察したり、乗つてみたり。その人はやたらと私の世話をしてくれて、とうとう北海道まで私を連れていくというではありませんか。なんだからちよつと不安だつたけど、とにかくこんな風にして今は北大に落ち着いています。

こっちに來たら、割と広々としてて、昔みたいなのんびりしていません。気持ちの良い午後なんか、外にいと、居眠りしちゃってころんだりすることがよくあります。こちらでは、色んな人を乗せるようになつたのですが、下級生が私に乗って障碍を跳ぶと、よく落ちるんです。北海道の冬は寒いけど、今年は二度目だから少しは慣れました。夏になつたら、又去年みたいに帯広とか東京にも行くんでしょよね。障碍を跳ぶのはなんでもないんだけど、一つ目っていうのはちょっとためらってしまふんです。でも、とにかく、みんなが私に期待しているみたいだからがんばらなくちゃ。

ハイエイム号調教報告

水野 豊 香

大阪服部乗馬センター吉岡氏の寄贈により昨年一月に入厩時のことは昨年の部報で紹介しているのでその後のことを簡単に報告することにする。

三月まで一応様子を見ていた状態であつたができれば競技に使いたいという結論に達し中旬から本格的に騎乗をはじめた。はじめの冬ということで体調に非常に気をくばっていたが馬体はさほど変化なくかえて体重が増加していた。雪どけに伴なり馴致を主に馬場ではすでに落ちついているので野外騎乗にかなりの時間をとった。

四月、馬場の状態も徐々によくなり散歩での大きな運動が可能となつた。しかしまだ障碍をおり込んでの練習はできない、というよ

り自分自身制御しずらく力で勝負ということになつてしまふので、まだまだ乗せられているという感が強かつた。

自分が能動的に課せられる運動の最も高いもので馬とのやりとりをすることをころがけていた。つまり障碍馬としてかなりのことをすてに消化してきている馬であるし、こちらにスキがあるとそこからどんどん自由を求めはみ出してしまふ点が気にかかつていたからである。例をあげると、これは最後まで調教の基礎になつたものであるが、輪乗りの輪線上での種々の運動、とくに散歩でのそれ、あるいは、キャバレッティーの使用これは障碍を通過すること必要条件として最終の障碍を越えてから、出発点に戻る間が問題となる。

つまり経路を仮想して、障碍間の誘導のとき、どこまでこちらの扶助を受け入れる余地があるかを感じながらやらねばならない。当然キャバレッティーからの連続障碍の難度が高くなればなるほど通過後はみ出る部分が大きくなるし、アプローチにおいてもつっ込んでしまふ。

五月、他馬が何度も経路走行を消化している頃なのに我々は中旬になつてやっと小障碍程度をこなせることしかできなかった。元來中障までやっていた馬なので経路を無難に廻れる状態になればその程度は問題なしと思つていたがやはりあせつていたようである。それに加え外傷が続き満足な練習ができなかったのも管理上悔いが残っている。しかし、半沢杯には出場しなかったものの競技の早朝、試しに経路走行をやつて見た。成功だった。この時点で次の酪農戦での出場を決意した。酪農戦では、はじめて他の馬場ということでも不安があつたが、馬は全く問題にしていなかった。デビュー戦でもあるし、期待と不安でビビつていたのは小生だけのようであつた。

六月、北海道自馬大会を指示してわき目もふらずだったが、駈歩での連続飛越がそれほど興奮を伴わずに可能になったので何回か経路走行をくり返したが、どうもこちらの体力不足を感じてならぬ。練習後朝めしを食べるともう一日が終わったようなものであつた。明日にそなえひたすら眠っていたことを覚えてゐる。馬の方は青草をどんどん食べている為か元気があまつていた。かなりの障碍を消化していたが、後半になるとどうしても興奮してしまい飛ぶには飛ぶが落下してしまふし、連続障碍になるとまず結果は目に見えてゐる。障碍前でのスピードのコントロールをやるうと思えば思ひど興奮度が増し手におえなくなること何度か味わつた。踏み切りが不安定で速すぎることがしばしばで、連続の場合最後までこちらの前傾は維持できない。つめなければという気持と、もっと楽にという気持の迷いの中で道自馬に出た。このときはじめてこの馬の本質が現われたというか、感いと驚きと二度惚れとやはりだめかという落胆となにかもひっくり返るめて終わってしまった。確かにすばらしい飛越能力を持っている。しかし今もって理解できないが、何でもない障碍特に第四あたりまでのものに飛ぶ気をなくしてしまふ。この答があつてどうかかわからないが、恐らく走られては困るといふ潜在意識が弱気な扶助しかできなかつたことが最大の理由だろう。それにしてもあれだけの行く気があるのなら、飛んでくれたつていいじゃないかと言いたくなる程である。練習中には全くできてこないことなので、北日本の本番を前に大変ありがたい発見であつたと思ふ希望をつないだ。

七月、ここまできたらもうあとには引けないので、中障と総合に出場だが、中障だけにしぼつた。キャバレッティの基礎的な運

動は続けていたが、課題は連続障碍と、第一障碍をどうこなすか。連続障碍についてはキャバレッティからの延長上でできたが、第一障碍云々については、いかに入場後の一分間をつかつて、これから飛びはじめるといふ気分をなくすか、何度も何度も単騎で外乗から帰ってきてそのまま馬場に入り一分間をつかつて運動し第一障碍にぶつた。すでに走らないでといふ気分は完全に脱けていたように思う。それからがんばつて二年目のつくつてくれた野外コースも試合場での興奮状態に慣れるために非常に有効であつた。

八月、やつと十和田まで来た。いつもどこかに外傷をもちながら乗ってきたが、今度だけは大丈夫である。練習はそれほど大差なかつたが、駈歩の運動になると内側にどんどん入つてくるので、馬場がすべりやすくこれだけは気を付けないと、と思つていたが、競技になれば無我夢中でやはりやつてしまった。第一走行とにかく第一障碍それだけというところで、どんどん前に出してやつたのがよかつた。まるで止まる気がしなかつて、ただただその飛びに我れを忘れて最後には恐怖に変わったみたいだ。しかしもっと冷静に馬を進めて行かねば勝つことはできない。肩の荷だけはおりが半年もの長い間何をやってきたのか実際寂しくなつてきた。第二走行も大丈夫と思ふ一個一個着実にと思ひやつたところが、止まらされた。止まらさずか止まらないかその接点を見つけることが自分にはできなかった。総合はステイブルで第一障碍を越えた後、二回目の馬転をやってしまった。すぐに立つたが跛行が見られたので、すぐに棄権した。大したことはないと思つていたが左後肢膝関節内側に幼児頭大の血腫をつくつていた。結局これが原因で帯広での北海道大会も出場不可能となつた。全日本学生の権利がとれたというだけで全くくみじめ

なシーズンとなってしまう。でもあの馬転は内側にささってくるまともな回転ができなかったところに原因があるのでそれをさせることができなかつた自分に責任がある。完治するために九月いっぱい休んだ。

十月十和田・帯広と続いた遠征も終わり、馬も人もほけてたのが九月、自分はしばし学校にもどつた。例の血腫もあつたが、乗りはじめたのはこの月になってからで、この間のブランクがあとから考えてみれば悔の残るところである。全日本に向けてと思つても、夏遠征前の状態にはなかなかもどらなかつた。体調のことばかり気にかかり実践的な練習はあまりできなかった。というよりむしろ、あれだけ飛ぶんだからという甘さがあつたのかも知れない。経路走行を二回ほどやり、三重に出發した。試合の結果は言うまでもないことだが、やはり馬が変わつてしまつていた。自分の制御しうるところからはみ出してゐた。学生の競技の前に全日本のそれを見てゐるためか、あまりにも強烈に今までの僕の信仰をくつがえされてしまつた。馬の運動の中にもどこまで人の手を入れられるのだらうか、ハイエームの場合完全にその点で失敗であつた。

以上の如く、一年間彼女とつきあつてきたわけだが、まとめとして反省していることを少々加えることにする。

① 腰を運動の中心として支配できるようにならねばいけない。馬が大きいということもあるが、あまりにも口、頸の運動と調和していないというかバラバラである。そのためには、もっとささいなところで正確な運動を要求し、腰の動きをとらえるだけの感覚を養なわなといけな。そのためには、常に前傾姿勢だけでの騎乗ではだめだと思ふ。

② スピード感覚が不足してゐた。正念場になつて、もつて行かれないか、今推進されて前に出ているか否かという簡単なことをどうしてもそのスピードのために忘れてしまつてゐた。興奮によつて我れを忘れることがしばしばで、確実に騎座を保ち得なかつたことが最大の原因だらう。

③ そういふ足さばきは無器用であるため、外傷が多い。管理という面でこちらがもっと注意していれば防がれることがほとんどであつた。

④ 競技に際しては、出場することを決めた以上、馬上でできうる限りのことをやらねばならない、鞭の使用も、マルタンの使用も急場しのぎならやらないほうがよい。裏がえせば、日頃からそのようなことを練習しておく必要がある。

最後にたくさんの問題があつたけど、あんなにすばらしい飛越をしてくれる馬に乗れたことは四年間の部員生活の中で最高の幸せだと思ふ反面、その能力をすべて出し切れなかつたことが残念である。結局へたくそだつたのだらう。

ドン・ホッパー号

驕 中半血 黒鹿毛

昭和46年6月30日生

父 サラ オーシヤ

母 トロ ハゴロモ

体重 472 Kg

馬 麻 呂

ドンって本当に鈍なのです。以前は噛んだり跳ねたり、それは手に負えないきかん坊でしたが、昨年の五月に去勢してからは本当に鈍になってしまいました。

長い足・狭い肩巾・短い胴、どこをとってみてもまだまだ大人になりきっていないという感じのドンですが、二月の末には父親になるようです。ドンにとっては最初で最後の子供になるヨードンは今からその活躍が期待されています。

人はドンのことを「ボケ、ボケ」などと言いますが、あれはボケているのではなく、おっとりしているのです。そのためか、馬場では一番弱く、おじいさんの北勇にまで虐められています。

ドンよ！もっと逞しくなってください。せめて北勇には勝ってほしいのです。

ドン・ホッパーのことから

よこ道にそれて

若 松 光子

ドンが、知る人ぞ知るあの不祥事件をおこしてから数ヶ月たった一九七五年の或る春浅き日、小野さんから我が部にくださるという話があった。やんちゃ坊主とはいえ、やるだけのことはちゃんと言っている、そこいらにゴマンといふ（私も含めて）ノラクラ学生にヒズメのあかでものませてやりたいほどの名馬である。学生サンの特権をふりまわし、小野さんの御好意に甘え、ありがたくもらいうけた。五月になってようやく騎馬となり、丁嬢が、体力回復のため背草求めて毎日構内をひっぱり歩く（ひっぱりられて、が正しい）ようになってからボンボン遠出をはじめた。時は六月―

結局のところ、六月から八月中旬までの自分のとりくみ方を思うに、すべて受身だったのである。小野さんから教えられる、添田兄はじめ四年目諸兄から注意される、そして岡田監督から、おそらく監督御自身うんざりされたであろう程、同じ注意を何度もうけて、そうして北日本の準備馬場、待機馬場、競技場に、ドンの背中にのせられて出ていったのである。結果はいうまでもない事……

当然の如く、次の総合競技で、添田兄が全日本の権利を得、その全日本では桑田兄が見事大役を果たして下さり、そのことについては深々と頭を下げ、深く感謝する次第である。

号令をかけていたらな、否、かけようとしていたらな、と思う。技術的にはたいへん欠けていた、精神的にはもっと欠けていた、それでも、日々の練習で自分に対しても下級生に対しても、号令だけはかけられたはずである。それがなんとか出来るようになったのは四年目の夏、それも道大の直前である。そして、それらのことに気づいたのは、ようやく今—五年目の春—になってである。

受身じゃないけない(アタリマエダ)。三年目四年目になって、技術不足が理由で部班に入って号令をかけられたり、又単独に教えられたりしても決して自分のものにはならない。能動的に積極的に、はじめはわからなくても、それでも馬の今の動きがどうであるのかわかるうとしながら、教えずなくちや。

女の身分で騎上の人となるにはいろんな意味でむづかしい。チャンチャラおかしいという人もあり、又それが真理かもしれぬ。それでも上級生になった以上はのってゆかねばならないし、教えねばならぬ。J嬢は、遅くはないのです。J嬢・M嬢・T嬢は、もっと遅くないのです、N嬢・Y嬢は、もっともっと遅くないのです。女子相手にでもいいから、部班の号令を大きな声でかけてみてください。出来ない自分がわかります。何もわかってないなと思うでしょうけれど、それでもそれを続けてください。

かくいう私はそれができなくて……恥かしいと思います、申しわけないと思っています。だから、あなた達には、それが出来るようになってから、下の女の子達を十分指導してから卒部してほしいのです。それが出来る頃には、もうちゃんと馬にのれるようになっていると信じます。

小栗先輩、諸先輩、いろいろ御指導下さったこと、卒部した今になってやっとわかるようになりました。今になって、馬術部に入っ
てよかった、やめないで続けてよかったと思います。ほんとうに
ありがとうございます。それから、四年間一緒だった五人のナイト
さん、重ねてどうもありがとうございます。

淳子ちゃん、ちゃんと下のジャジャ馬を教育してから卒部するの
ですよ。

桑田兄、ドンのことよろしくお願いします。

(イショミタイ デシタ)

ダイパレード号

牡 サラ 栗毛

昭和39年4月16日生

父 ダイハード

母 ミレッタ

体重 480 Kg

同好会より

市川瑞彦

日頃馬術部の皆さんには同好会に対して多大な御協力と御支援をいただきありがとうございます。

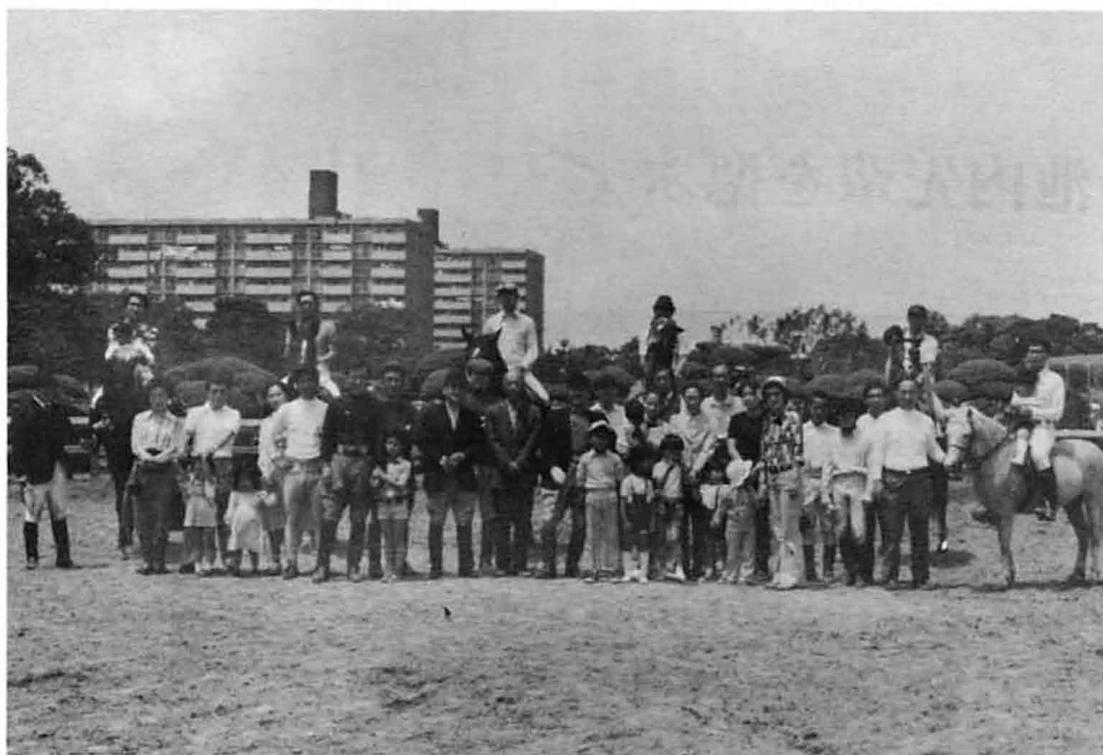
今年同好会にとって特筆すべきことの一つに大学本部よりの同好会への援助の備品に鞍が認められたことをあげることができると思います。従来同好会では毎年希望順位の一位にあげ要望してきたのですが、何しろ年間援助額の2、3倍にもなるため他のサークルとのバランスの問題もあってか、認められなかったわけです。同好会としては実質的にまとまった形で馬術部への援助をすることができ大変よろこんでいるわけです。しかしこのためあと一、二年は少額の援助で我慢しなければならぬ事態も予想されますが……。

日常的な活動の面では昨年の部報に「部員諸君よ、同好会に来たれ」と題して現在の同好会の「構造的危機(?)」を訴えましたが、その状況から脱皮できず低調の感はまぬがれないと思われまします。しかし昨年のアピールが効き目があったわけでもないでしょうが、大学院へ進学する部員諸君も出てくるなど前途に希望はもてる状況になってきたと思えます。

ここ十年間ぐらいで同好会と馬術部の関係は疎遠になってきてしまった実態を反映してか部員諸君は同好会についてよく知らない人もいるようですので、ちょっとこの欄をお借りして同好会のPRをしておきたいと思えます。北大乗馬同好会は北大の教職員によるリ

クリエーション団体の一つです。他には登山・茶道など各種スポーツ、文化サークルがあります。学生諸君でいえば体育会と文連が一絡になったものともいえるでしょう。学生のサークルに關係するのは学生部ですが、同好会は本部になります。大学からみれば教職員の福利厚生のため学内の諸施設を利用することになり、学外者や個人が施設を利用するのはこの点で本質的に異なります。馬術部で昭和二十九年の国体の後、自馬をもつ際に、当時の学長は学生のためだけでは認めず、教職員の利用もということで認めたと伝え聞いています。従って各種サークルの会員は原則として北大の教職員に限られています。同好会では会員の指導には学内の人だけでは不十分なため若干の学外のOBの方などに講師ということで会員になっていただいております。

ともかく、学内には馬にのりたいたいという初心者がかなりおり、同好会の幹事としては上にのべた意味からも要望に応える努力をしなければなりません。同時に馬術部にとっても無理のない、一致点を見出す努力もしなければと思っておりますのでなんとか「共存共栄」の道をさぐっていかうと思えます。今後ともよろしくお願いいたします。



乗馬会は5月18日に故池内さんのお世話で馬事公苑にて行なわれました。
参加者は、写真左より、近藤 八木沢 原 黒沢 阿部 森本 志水 池内 堀川 田
中 中野 本田 小嶋 岡本 高林 平井 千田 小林 玉沢 池田 諸氏の他、千葉さ
んなど御家族を含めて38名でした。

北大馬術部OB会

後輩の全国制覇祝う

古い伝統をもつ北大馬術部の東京在住OBの懇親会が三月七日、クラーク記念室で開かれた。本来ならもっと早く開くはずだったがタイミングがずれてしまい、三月という忙しい時期にぶつかったため例年より少なく七十二歳の中野友次郎氏(昭四・農)はじめワイガキと勇名(?)をはせた岩垣映夫氏(昭六・農)ら二十人が参加した。

馬術部OBは全国に約二百人おり、全員の名簿も完備して、後輩への援助激励を通じて団結を固めている。

なにしろ現役部員が昨年の七帝大戦で優勝して菊の御紋のついた昔からのカップを手中にしたうえ、秋には全日本学生馬術選手権大会で見事優勝したばかりとあって、集まる先輩たちのハナも自ずと高まろうというもの。

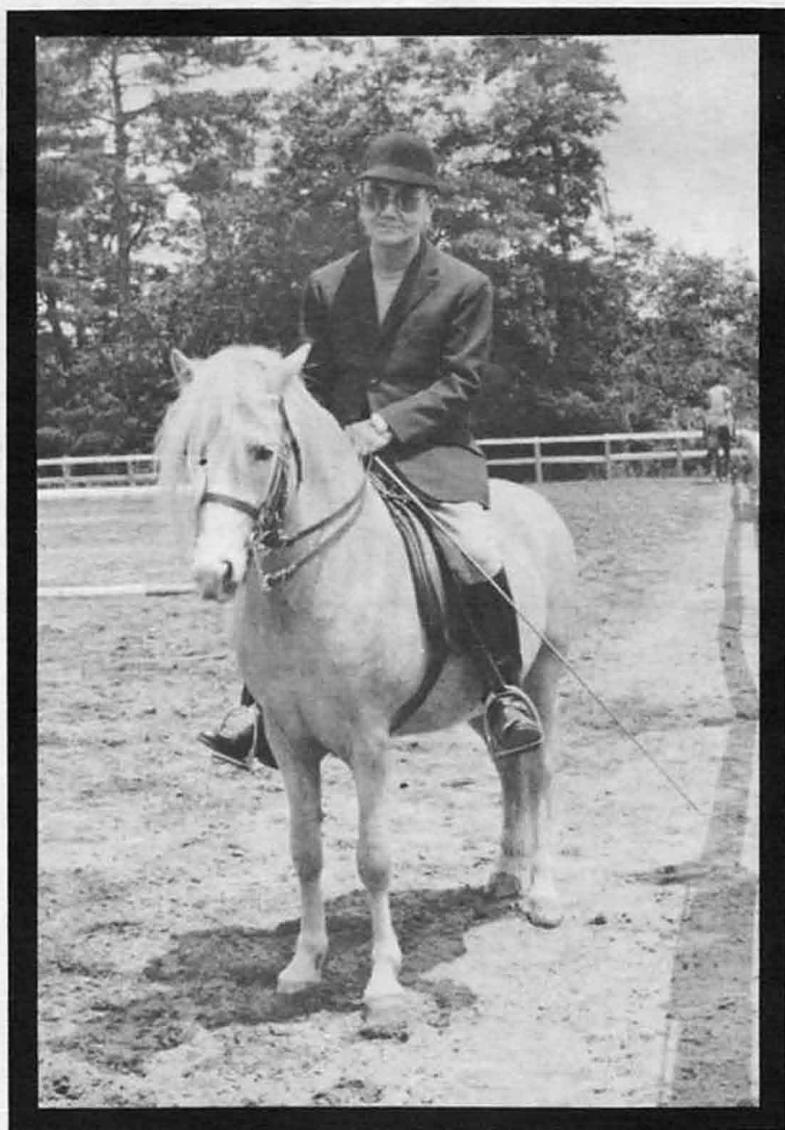
全国制覇のお祝いにと寄附を募って、スクールカラーの緑あざやかな新馬術部旗をプレゼントしたが、同日のコンバのためにはわざわざ札幌からこの新部旗を借りて会場にデンと飾りつけた。部章の西洋騎士像を白く染め出したデザインは三十年ほど前制定されたもので、ほとんどのOBには懐しい存在。

幹事から、現役の昨年の各選手権の戦績、昔の陸上トラック北方のきゅう舎で部員が十二頭の馬を飼育しているなどの現況報告があり、今後ともご後援をたまわりたいと報告すると盛大な拍手がまきおこった。クラーク記念室に初めて訪れたOBも「これはいい場所が出来たものだ」とほめ、来年も同記念室で開くことを決め、杯を重ねた。

49年度年次会出席者

中野 岩垣 武田 東園 本田 大迫 滋賀 松本 黒沢
小林 岡本 加藤 千葉 樋口 宮崎 原 志水 八木沢
入江 池田 (敬称略 年代次)

池内先輩を偲ぶ



在りし日の池内先輩
(馬事公苑にて)

池内武夫君の思い出

半沢道郎

昨年七月二十九日酪農大学の山下正亮君から池内君の急逝の報告を受けたが、全く信じ切れない様な気持ちで、早速札幌競馬場の池本場長宅に電話をして、なお詳しくお聴きするような始末であった。

一昨年の暮近く故人となられた兄さんの奥さまのお葬式に來札され、帰京されてから過労からか心臓の発作で中央競馬会の本部で倒れられ、危ないところを処置がよかった為に九死に一生を得られ、暫らく入院療養をされた後、自宅療養をされて居られたが、常任理事の任期半ばに中央競馬会を辞され、財団法人競走馬理化学研究所の理事長に就任された。昨年二月初旬に私が上京の折中央競馬会の本部に池内君を訪ねた時に偶然に退職の辞令を取りに来たところだと云われて十分位お話をした。段々良くなって来たのでまた一緒に乗れるようになるだろうとの事で一先づ安心をしてお別れした。その後、六月末頃にお家の財産の事で來札され、市役所に岡田光夫君を訪ねられた由であったが、私はお会いしなかった。その時も岡田君に大分良くなったように話して行かれたそうで、まさか一ヶ月後に急逝されるとは信じられなかったのである。

八月十二日に競走馬理化学研究所、日本中央競馬会、地方競馬全国協会にて告別式が馬事公苑で催されることとなり、私も参列した。最後に池内君の愛馬であった馬事公苑のトキヒメ号（日高産芦毛）

と並んで、遺骨をお見送りして心から冥福を祈った。この告別式には部の大先輩の中野友二郎兄や大迫君、その他数名の部の先輩も参列された。告別式の式辞や弔辞のなかに池内君がわが国の競馬会、馬術界、軽種馬の生産、等馬事に関して尽くされた功績の数々が述べられ、これから競走馬の育成、保健、競走等に関する理化学的研究の分野で一層の活躍が期待され乍ら彼の死は実に多くの人々から惜しまれ、悲しまれた。かなり悪性の癌だったようで、日本中央競馬会で最も風当りの強い役職の激務、心労が病の進行を早めた結果ではなかったかと思われる。

池内君は私が学部を卒業した年の昭和八年に^予理科に入られ、手稲の山口村のあたりから通学され、昭和十四年畜産学科第二部を卒業された。馬術部には多分昭和八年入学して直ぐに入部されて居たと思う（昭和八年度インターハイ出場記録が馬術部十年誌にあるので、誤りでなければ^予科一年で既に選手として出場）、その後病気をされたのか、二、三年競技会には余り出られなかったが、昭和十二年には対東北大学定期戦北海道騎乗大会、十三年には七帝戦、対東北大定期戦などの諸大会に選手として出場され優秀な戦績を収められた。昭和十三年度には、部の主任として部を統括され、翌十四年三月卒業まで部員として活躍された。私はその頃、理学部の化学

教室に大学院学生および、副手として在籍していたので、部の練習例会、競技会等と一緒に過ごす機会に恵まれた。池内君は卒業後農林省に入られ、馬政、種馬育成、競馬関係の仕事をされ、後に日本中央競馬会に移られ、多くの立派な業績を遺された。

私は農林省時代の彼には殆んど接触が無かったが、競馬会に移られてから、部の繁養馬の事や、七帝戦を馬事公苑で開催して頂く事などでお訪ねして、お願いする事が多くなった。東京OB会や馬事公苑での競技会で一緒にいたり、馬事公苑で一緒に馬に乗る機会にも恵まれた。農大で木材学会が開かれた年に、余りに馬事公苑が近いので、学会を抜け出して馬事公苑に行き、小雨が降っていたので覆馬場で池内君が乗るといので、前に記した彼の愛馬にも乗せて頂いた。また馬事公苑の帰り途に世田谷の一茶庵や、渋谷の謀所、東京OB会の解散後に新橋の彼の馴染の店で遅くまでお付合を頂いて楽しい時を過ごしたり、来札された時に競馬場で一緒に乗馬を楽しみ、夜は薄野に出かけて西村場長、熊沢、山下、岡田諸兄と共に歓談することも三・四回あった。池内君は酒は嫌いな方ではなく、相当強かった。

また私が退官してから、友人と育成中の仔馬や繁殖牝馬、更に種牡馬の健康管理を血液検査を手始めとして始め、北大の獣医学部の応援を得て、行く行くは軽種馬育成研究所を作る構想で何度か中央競馬会の本部に池内君を訪ねた、常任理事になられてからの彼は非常に多忙で大抵、訪ねて行くと会議中や来客中であつたが、何とか時間を裂いて会って呉れて、遠慮のない貴重な意見を述べて下さった。競走馬理化学研究所の理事長になられたので、これからその方面で一層指導や援助を仰ぐことができると頼りにし、アテにしていたこ

とも霧消してしまつた。

池内君は、非常に厳格で、近付き難い感じを受けましたが、よく人の世話をし面倒を見てこられたようで、競馬会の方々から、叱られたとか、非常にお世話になつたとかのお話しをうかがいますが、北大馬術部のことも何時も心配して呉れて、競走に出られなくなつた馬を何度か斡旋して下さいました。今居る天龍山も彼の世話で貰つた馬である。

池内君が競馬会を辞められてから、馬事公苑の近くに新しい家を建てて居られたのが、亡くなられて約二ヶ月後の十月早々に完成され、ご遺族が引越された由で、手伝に行かれた部の先輩の千田君に奥様が「一ヶ月でも二ヶ月でも此の家に住んで欲しかった」と述べられたそうですが誠に残念至極です。然しご遺族はお元氣でお過ごしのご様子とのことで幾分気の安まる思ひです。

何時も乍ら締切りが過ぎてしまつて充分準備をして書く暇が無くなつてしまつて乱雑な拙文を綴つてしまつて、ご覧頂いて誠に恐縮です。お許し願ひ上げます。

池内君を悼む

東京OB会会長 東園基文
(昭和九年卒)

池内武夫君がこの世を去ってもう九ヶ月にもなるというのに、今でも馬事公苑に行けば、馬上豊かな池内君に会えるような気がしてならない。

北大馬術部としても、東京OB会としても、同君のご好意に与ったことを数えあげれば限りがない。池内君は部員時代から面倒見のよい人だったという。われわれ戦前派には今も懐しい月寒の歩兵第二十五聯隊での練習の帰りなど、よく後輩にアイスクリームを買ってくれたものだとも聞いている。たのまれればいやとはいえないたちだった。それをよいことにしてという訳でもないが、実に度々ご面倒をお願ひした。部では馬をお世話頂いたことも一度ならずあったと記憶するし、馬具などもご寄贈下さったと思う。OB会では中山競馬(場長時代?)を見せて頂いたこともあったし、馬事公苑での乗馬会は年中行事のようにさえなっていた。また現役の選手諸君が馬事公苑で行われる競技に遠征して来ると、苑内の部屋を貸して下さって慰労会とか、祝勝会をやらして頂いたものだ。その時にはいつもビールとかウイスキーのご寄贈に与った。本当によくやって下さった。北大馬術部にとっても、東京OB会にとっても比類なき恩人であるといつて憚らない。

池内君の死を悼むのはそうした故のみではない。彼の人柄と馬に

ついでに識見は農林省時代から高く買われていたし、戦中中国營の競馬界に入り、今の日本中央競馬会になってからも引続き多年理事を勤められ、後には常務理事としてわが国の競馬界に尽された功績は洵に偉大である。今日のわが国における競馬の隆盛をもたらしたのも、池内君に負うところが大きいということだ。

池内君を北大馬術部のOBに持つことは、われわれの大きな誇りである。しかし今は既に物故者の中にその名を連れねばならないとは、なんとも淋しい。しかし池内君の在天の靈は今もなお北大馬術部のこと、東京OB会のことを見守って下さっていることだろう。皆さんと共に改めて感謝の誠を捧げ、心から同君のご冥福を祈りたす。

池内さんを偲んで

池内さんが亡くなった。何度自分に云い聞かせても未だ現実のものとして考えられません。今日にでもあのにこやかな笑をたゞえながら何気なく私の職場を尋ねられる様な気がしてなりません。と申しますのも昨年七月上旬、私の関係の事ではありませんが、少し調べてほしいものがあるからと役所に見えました。そして「八月にはまた札幌に来るからそれまででいいよ」と申され、以前狭心症の発作を起され苦しまれた時のが話題となり、私も丁度三年前に同じ病気になった事がありましたのですっかり話しが長くなり、御別れした時は一時間半以上も経って居りました。又の御来札を楽しみにして居りました私に、まさか月末に臥報、しかも心臓以外の御病気でとは夢にも思って居りませんでした。数多くの部員の中で私程池内さんに御世話になったものはいないと自負して居りましただけに正に痛恨の極みでございます。私が予科の一年の時、池内さんは学部の二年目でした。そして予科一年の八月旭川の騎七での合宿の時予科生として唯一人参加した私の為にわざわざ残って御指導下さった池内さんの御厚意が、私にいつまでも部を忘れさせない強い絆になった事となつかしく思い出されます。又インターハイに優勝し唯一人優勝を持って七戸の農林省の収場に池内さんを御訪ねし、試合の報告に一夜飲み明した思い出、又入営中東京の板橋のお宅に外

出の折御伺いしてコタンに入りながら御馳走になつた思い出など、本当に池内さんには馬に乗る事ばかりでなく、酒の飲み方まで教えていただいたわけに思い出は数限りありません。池内さんは形骸はなくなりましたが私の心の中には今も猶生きつづけて居られます。失礼な申し方ではありますが兄を失った様な私の心境です。

岡 田 光 夫

(昭和17年卒 現監督)



乗馬発展への願

間 克 市

(昭和6年卒)

今から二年ほど前、日高に新らしく軽種馬共同育成センターが設置されることになったので、私に是非経営を引受けてほしいとの地の依頼もだしがたく、場長として再び日高入りをする事になりました。

幸にもセンターの経営は順調に進んでおり、最初の育成馬である当場第一期生が今年明け四歳となって、ダービーその他でめざましい活躍を示し、育成の成果があらわれてきたので、今では予託育成を希望するものが殺到している有様です。

場所は新冠町節婦の国道に沿った海の見える高台にあるので風光明媚、今では日高の名所の一つとして春から秋にかけて馬関係者は勿論一般観光客も押しかけている。場内には観光用のポニーのほか業務用の乗馬もおいているので、本州方面の青少年の団体旅行客にはとき折乗馬を楽しませてやり、乗馬思想の普及にも一役かかっております。

私は以前日本馬事協会におりましたとき、戦後の日本の馬産は費用馬に代って、これからは乗用馬に力を入れるべきであると、事ある毎に主張してきましたが、日本の特殊事情から仲々進展がみられないのであります。勿論日本人は農耕民族であり騎馬民族である欧米人の様に古くから乗馬に親しむ習慣がありませんが、乗馬は大衆

の娯楽として、またスポーツとして最も快適で健全なものであり、老若男女をとわず誰でもが楽しむことの出来る健康なスポーツであるのが、欧米なみにはゆかないまでも、日本ももっと乗馬を盛んにすべきであると思います。

日本の乗馬の普及を妨げているものに乗馬クラブ等の経営の困難があげられます。乗馬を楽しむみたい男女は幾らもあるのですが、乗馬施設がない、乗馬料金が高い、ウイークデーに利用できない、その上に馬の飼養費が嵩む等で特定のものだけのスポーツとなって、大衆の娯楽にまでは浸透しないのであります。

どんな子供でも皆乗馬には興味をもっているもので、子供の情操教育としても優れた効果をもっているのです、ポニーリンク等の馬と遊べるような施設をつくって子供と馬との接触の機会を与えてやることも大切です。

しかしこれ等、乗馬の施設や維持管理には相当の経費がかかるので、競馬益金から思いきった助成を行ない乗馬の普及進展をはかるべきであると思います。

競馬と乗馬との関連について、競馬懇談会でも指摘しているように、競馬をファンにとって単なるギャンブルではなく、健全なスポーツであるとの理解を高め、馬を通して競馬を楽しむようにするた

めには、乗馬を盛んにし広く大衆の間に普及させることが最も大切なことのように思われます。

今日の日本の馬術の中心をなしているものは学生乗馬であります。この学生乗馬も馬の維持管理に困難をきたしているようであるし、また折角学生時代に乗馬に熱を入れた学生も、卒業して社会人になるとびったり乗馬を止めてしまうものが多いようである。社会人になっても進んで乗馬をつづけていって貰いたいのであります。

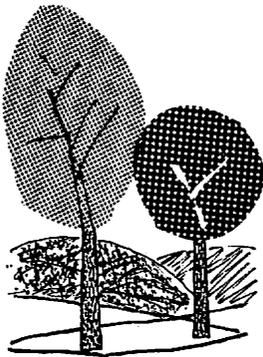
北大馬術部も歴史は古く、最近はめざましい活躍をしていることはまことに喜ばしいことではあります。馬産地北海道をバックにした大学としては本州のそれにおくれをとらないだけの立派な活躍と発展とを上げて貰いたいものと念願し、部員諸君の今後の健闘を心から祈ってやみません。

昭和五十年十一月

昭和六年畜2卒 間 克 市

(現日高軽種馬共同育成公社

取締役場長)



O B 諸兄への手紙

近藤 喜十郎

(昭和42年卒)

O Bの皆様お変わりありませんか。私は四十二年に馬術部を卒業して、五年程のブランクはありましたが、現在、三重県の北部にあるクラブに所属して毎休日には騎乗を楽しんでおります。私の住んでいる名古屋から馬場まで車で約一時間かかりますが、周囲は山あり、川ありで、環境はすこぶるよく、日頃のストレスも解消出来ます。婦人、青少年を対象とした学校（我々は楽交と呼んでいます）を同志のクラブ員と作り、もっぱら生意気にも教官役です。現役時代に努力した割には下手だった私ですから、指導にあたってわからない事が多く、生徒に教えられる事しばしばです。昨年は国体が当地三重で行なわれ、馬術に対する関心も高まり、又指導者、馬も県馬連を中心に集まりましたので、我々のレベルアップには又とない機会でした。国体後、秋十一月には県より正式にスポーツ少年団の認可を受ける事が出来ました。いよいよ今年からは特徴のある「スポーツ少年団」にしようと考えています。クラブの周囲の環境を利用して野外での騎乗と団体行動に力を入れてゆこうと考えています。現在午前中は馬場内で運動し、午後は野外での運動を行なっていますが、生徒が野外に出ると馬にたより、又馬も人間にたより、馬と人間との心のふれ合いのよりなものが出て来ます。都会の子供にとっては動く物をブラモデルと混同しているのが多いのですが、

そのような考えが変化してゆくのが、よく分かります。所が外で乗るといふ事は多くの危険が伴いますので、責任者にとっては大変です。戦前の陸軍の教範等を参考に行動していますが、先輩諸兄で外乗について何でもけっこうですからお教えいただければ幸いです。初心者の指導方法としては、まず円形馬場で調馬索によるパランスの養成、次に部班運動での三種の歩様、そして各個騎乗と低障害飛越、という三段階に分けて行なっています。大体八〇鞍ぐらいで馬場内で安心して乗せておけるようになります。野外騎乗は引綱をつけて責任者が馬は一人ずつく方式で、初心者にも味わせるようにしています。野外騎乗の楽しさが忘れられなくて、多くの人間が馬のとりこになっています。一昨年には一人平均六〇ぐらいで交代して約三〇〇kmの行程を行軍しました。今年には四〇〇km程度の行軍を春と秋と二回行なり予定です。将来は一泊旅行も計画しています。馬の購入については基本的には「丈夫で長持ちして大人しい」ものを選ぶようにしています。岡田先輩の云われている「無事は名馬」を心しています。毎日騎乗出来るという、環境や経済的な境遇にありませんので、やはり鋭敏な馬やくせのある馬は入手しないようにしています。幸い昨春秋、国体の折に半沢先生のお世話で帯畜大の「キングカール」号を手する事が出来ました。私が学生時代に父

のセイホウや母の神風を知っておりましたので、さぞよく飛ぶ馬だろうと思っておりましたら期待に違わず、勇敢で、丈夫で、大人しい馬でした。障害はどんな物でも喜んで飛越し、野山を走り、川の中へも平気で入ってゆきます。現在では子供達が一番の人気馬です。以上が私の活動報告ですが、昨年に現役諸氏に全日学で会う事が出来たので、その感想をのべてさせていただきます。北大は私達の現役時代には較べる事の出来ない程、又他の馬術部と較べてみても馬を手に入れる事や経済的な事、施設もすばらしいものです。

馬の乗り方も長い間の暗中模索から抜け出たような気がします。むろんここまでになるには岡田先輩を始めとして在札OBの並々ならぬ努力がある事を現役諸氏は忘れてはならないと思います。馬をあまりいじくらないで馬の力と意志を尊重するという考えが定着したものと感じました。只、私の乗馬の方式から云えば若干腰の張りが少なく、脚の軽打のみに頼っているようです。これからも人間中心の馬配や新馬を無理に上級生の特権とやらで大会に出してこわさなければ全国大会で常時、ある程度の成績はあがる事が出来ると思います。

もうひとつこれは私の誤解かも知れませんが、現役とOBとの関係が少しよそよそしくなりつつあるのではないかという事です。馬術部という学生の団体で仲よくやってゆけばそれでよい、という意識が強くなってきて、現役員だけの固まりでの楽しみの追求に走っているのではないのでしょうか。団体や全日学では各地の優秀な馬乗りや学校が集まるのですから、その機会を逃さずに積極的に話を聞き、自分の乗馬技術、調教程度を見てもらう事も必要ではないでしょうか。

最後にこれは提案ですが、OB諸兄で現在各地で騎乗し、指導にあたられている方々が相当おられると思います。私の様な技術的に未熟なものにはわからない事が多くて困っております。いろいろな疑問の解消や交流の上でも年に一度ぐらいOBの騎乗研究会を開催したらいかがでしょうか。そのような活動が日本の乗馬技術の向上の一助になれば望外の幸せです。又この部報のOBの頁を各地の活動報告などに利用したらいかがでしょうか。先輩諸兄の御意見はいかがでしょうか。

皆様方と現役諸氏の今年の活躍をお祈りして乱文ながらお手紙を終りたいと思います。さようなら。

春夏秋冬

1 (2011a) × 9

雑感

佐野淳之

ギンギンギン。フー。

ザワザワ。ブーン。

ドンドンドンドン。バカバカ。

ドシン。テクテクテク。ムシャムシャ。

シン。カリカリカリカリ。ヨイショ。

ガンガンガンガン。シン。

厳密な意味で言えば今の僕にとって雑感なぞというものを書く余裕などありません。

四年間の馬術部生活を全うした瞬間にこそ溢き出づるものであるよ
うな気がしています。

いやそれとも、ただ充実と後悔の涙、涙でついに人に伝えずじまい
で終ってしまうものなのかも知れません。恵迪を去る今、大学へ入
学して以来初めて感じる気持ちです。

まことに簡単ではありませんが、これをもって私の雑感にかえるこ

といたします。

貨車積のうた

岩田正勝

闇を抜けてゆく

貨車にゆられて

草をはむおまえが

うすぼけた懐中電燈の光の中で

愛しく見えたのは

夜のせいだろうか

見も知らぬ駅に

真夜中の停車

おまえは肢をふんばって

眠っていた

夢を見ていたのだろうか

絹糸のような雨が降り出した……

操車場の夜。

霧のような雨が降り

水銀燈の眼を射る光の中で

貨車も黒くうるおい

草をはむ音が吸いこまれてく

ぼくらは夢の中……

夜明けの砂浜

白い朝に

海もないで

風が貨車の中にはいり込んできて

いつしか空をとんでいるような

ああ、いい気分

おまえも笑っているようだ……

雑感

中 島 孝 幸

言ってみれば、出口の知れぬ薄暗い洞窟の中をさまよい歩いてた浪人中の入試も真近の頃、一条の光明の如く、僕の目に入ったのは、テレビに映った北大馬術部員の颯爽たる姿でありました。僕の馬術部入りは、その時に決まったようなもので、入学した日、馬術部女子部員の真っ黒にして、はつらつたる顔を眺め見て、もう馬術部以外のクラブは眼中から消えうせたのでありました。さて、憧れ

の馬術部員として暮らしてきて一周年を迎える今、馬術部員たる条件、あるいは証しが、馬に乗っている事のみならずという事が、分かりかけてきたところでもあります。鞍数が多いという事は重要な事には違いありませんが、「お前は馬術部員か」ときかれた時、物を言うのは、如何に多くの回数装鞍したかであり、如何に多く、馬房から馬を外に出して馬繋台につないだかであり、如何にポロ出しや草刈りがうまいかであると思うのであります。そこで、二年目になった暁には、ポロ出しのエキスパートたるべく、迅速にして正確なるポロと寝わらの分離の方法について研究を重ねて行きたいと思っている今日此の頃であります。

「ちかれたびー」

蛭 子 雄 次

明日は原稿の締め切り日。明日まであと約一時間三十分だと言うのに原稿用紙はまだ白紙。しかたがないので目をつぶってみる。しかし験にうかぶのは、炎天下の草刈り、道管競馬のバイト、寒い朝のポロ出しなど考えただけでも疲れるようなことばかり。今日は、きつと頭まで疲れているのだろう。温かい布団にくるまって頭の疲れをいやすしよう。

↑
くだらんで没してください。

雑感

飯島 茂

新芽も姿を現わし、風は冬のそれではない。そして何よりも希望に胸ふくらませ構内をあららこららぶらついている新入生の顔がある。なつかしい講習会。

桜舞う、盤溪の小径を疾風の背にまたがり進んだ遠乗会。春は楽しきうちにすぎぬ。

朝日輝く時、馬場を離れ原始林をぬう。こだまする鳥の声。夏の日のこと。

僕はエンバクをポケットに馬場へ入った。そしたら君が僕によってきた。僕たちは夕陽をおいかけて歩いたね。

今は冬、冬がすぎれば二年目。今まで無意識に乗ることが多かった僕だがそれは甘い考えだとわかった。人と馬とのつき合にはいろいろあるが、大学のクラブとしては言うまでもなく乗ること、練習である。考えて、乗って、考えていこうと思う。

じょうだん

あぐねすびゆうち

北海道は寒いところである

冬は寒いから冬という

北海道の冬は寒い、寒い

北海道で冬の日の夜明け前に

何故に起き出す人がいるのか？

ちっほけな感傷

山口 百太郎

まだぬぐいきれない闇の中を一心に無燈火の自転車馬場へ急いだ春。

すがすがしい空気で胸をいっぱいにしてアカシアの香りを楽しんだ初夏。

日高合宿、遠征、帰省、また遠征で、いつが夏だったのかよくわからなかった夏。

日一日と朝の闇が深くなって、一人心細い思いをした秋。

真暗な中で街路灯に輝く雪の中を、たまに後ろから近づく車にびくびくしながら急ぎ足で通った冬。

そして寒さの中でも、「春だよ／＼春だよ／＼」とささやきながらまたやってきた春。これがこの一年。

毎朝、人の気持ちなどおかまひなしに確実に登る太陽。時には柔らかない、時には刺すような光を放つ太陽。ある時は、世界が黒から紺、紫、オレンジと変わり、またある時は黒から灰色で落ちついてしまう。

喧噪の一時が過ぎると、お休みの時間、すべてが子守り歌。夢の中へ、ひたすら夢の中へ。

そして夕方、黄昏、風響樹に淡い光を残し、やがて地面からはい上がってきた闇で包まれてゆく。二つの黒い影は、とぼとぼと帰ってゆく。これが一日。残ったものは黒い山と風にそよぐ葉のしわぶき。「イチバンポーション ミーツケタ。」

束の間の出来事

木村 憲子

原稿を書こうと、今までの部生活を顧みると、入部してすぐのうれしい楽しいつらぁーい日高合宿、そして十和田・帯広への遠征。そうしているうちに、一カ月半という初めての長い夏休みをあとと

いう間に過ごし、えっと思ったら、試験という石ころにつまづきそうになり、平衡感覚を失ないつつもどうか通り返り抜け、ホッと思ったら合宿。つまりクラブ生活の中に大学の行事があるようなものです。

授業中でも、練習のことなど考えているうちに、トロトロ、ウツラウツラ、スヤスヤ、ZZZZZ……。ハッと目が醒めると、皆はそろそろ帰り始めているのです。ああ、又やってしまった。

こんなふうにして一日が過ぎ、一年が経ってしまふのだろうか。実感と若干の恐怖心が交錯しているのです。私の大切な一生の刹那を充実させているのだろうかと考えると、窮地に陥ってしまふのでつとめて触れないようにしています。

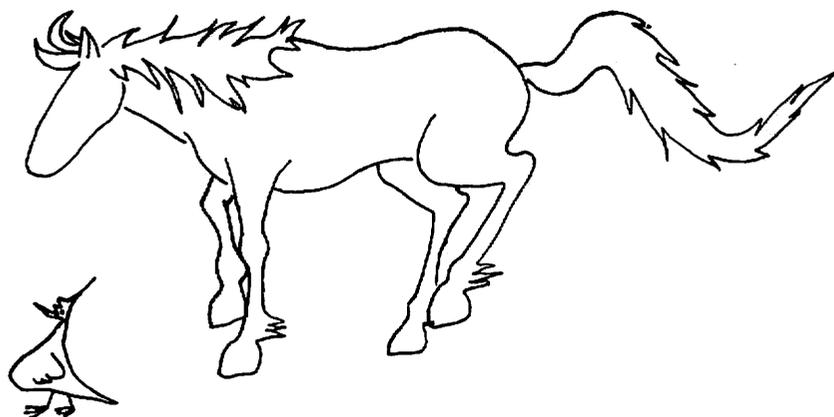
部生活と私生活をはっきりと分けられたらと思うが、十馬十色のおもしろい馬がいて、十人十色の味がある人間がいて、早朝に練習がある限り、そして私が意志を持たない限り、この問題は解決出来そうにもないのです。

ナンジャクツ子

浪内 陽子

天性の運動神経のニブサにいつもメゲきっています私、これでも将来がニマタ(馬に乗っているとガニマタに成るとみんなが言うの

です。の看護婦をめざしています。ところが、御存知の通り、クラブでも病院でもドジばかりで……。これからどうなるのでしょうか、本人も全くわかりません。がもう少し頑張ってみようと思っています。御迷惑ばかりおかけしますが、みな様よろしくお願ひ致します。



自己紹介。他己紹介

卒部生の部

晴れて卒部ニ卒業された方。

どうも御苦勞様でした。そして卒部ニ卒業の方、苦勞が絶えませんネエノ

添田昌一兄

農学部畜産学科

今まさに、四年間が終ろうとしている。入部当時や、一年生の時
のことが思い出される。

一年生の時に皆で作った部報を読むと、今はもうあの気持ちは持ち
得ないのだなあと痛感する。当時恥ずかしかった自分の文章も自分
のものとは思えぬ。ここにも時の波が押し寄せていたのだ。

彼は人間です。しかしとても人間とは思えない事ができる人です。
いや、人間の根性が人間わざとも思えない事を可能にするという
ことを見せてくれた人というべきです。そなた彼をして馬に乗るこ
とは難しいといわせるのです。馬に乗ることに關して、彼はそれ以
外の生活とは完全にけじめをつけていたようです。とかく乱れた服

装が横行している中でピリッとした馬装を保ちつづけた数少ない一
人です。馬から遠ざかった今、その貴公子を思わせる上品な装いに
彼の乗馬姿を思い出すのは私だけででしょうか。
最後に彼はうちのおばあちゃんと同じく、人生劇場が好きです。

。品名 添田昌一

。製造年月日 昭和二十七年一月十二日

。定価 叩き売り専用につき不定〔注、売却済〕

。製造者 親会社

。販売者 北海道大学馬術部廃品処理課

。成分 合成好色料九〇% 灰分八% 空白二%

。有効期限 開封後四〇年程ですが、性能の低下が激しいので

お早めに御使い下さい。

。使用上の注意

使い方によっては、長持ちしますので、常に手入
れと鍛練をお忘れなく。尚、「物理」と言う言葉
は禁句になっていますので、この点特に御注意下
さい。

。用途

生活上の雑役なら全てに使えます。但し、計算問
題等高等なことを課しますと、故障の原因となり
ます。

。保存上の注意

腐りやすいので、時々外気にあて、アルコールに
つけることを御薦め致します。

本村洋文兄

農学部農業経済学科

ダンディな本村兄が、同じくダンディな燕にまたがると、本村兄の情熱が伝わって、燕は一生懸命走ります。

教養部の校舎内で会った時みせる気まずそうな顔とうらはらに、全日学で、ボウズにまたがり、二落で帰って来た時の、無邪気にはころんだ笑顔は、まだ目に焼きついています。

ボウズの三代目チャンとして二年連続で全日学へ出場し、本人曰く「だてや酔狂で二年間も北陣に乗っていたのではない」という結果を昨年はまさまじと皆の前に見せてくれました。そんな兄も最近若返って卒論片手に教養にかよっているようです。そして自動車学校にまで通っているとか。老いてますますさかん（失礼！）のようです。それでも春には、背広とネクタイのよく似合う社会人となつて、きつと後輩達が上京する毎に、よく面倒を見てくれることでしょう。よろしくお願いします。

柴沼俊兄

理学部化学第2学科

自己紹介等という喜劇を綴るのは、生涯に於てこれが最後であろうし、ましてや自分の書いたものが、活字にされる等という傲慢さをそのまま残せる機会に至っては、生まれ姿っても、もうないであ

ろう。この最大の恥辱の場面をそれこそ涙を誘う告白調にしようかはたまた、虚飾でちりばめた黄金調にしようか。そんな時、時としてその当人でさえも見分けがつかなくなる程、常に自己を一枚の安いペールで包んできた者が今更何をと囁く声。そんな声は、大音声のもとに掻消してやろうか。いや、それは、惨めさを倍増するだけだよと変に慰めて沈黙に至らせる。そう、迷惑拡散機能を必要以上で発揮して生きのびた己が、ここで見栄を張ったところで、唯、冷やかな視線を全身に浴びるだけ。

そうだ、これで自己紹介にしてしまおう。己の賢明さに新たに感心。と、一言多いのが、傷だらけの玉の光沢。

さらば、若人よ！！

柴沼兄の御紹介をさせて戴く私、この上ない幸福感に浸り、原稿を書くペンも夢うつつ気味で、寝ボケたことを書くのではないかと心配しております。それほど偉大な方なのです。

今年、めでたく学部・馬術部共に御勇退なさる兄ですが、四年間では得られなかったロマンを求めて札幌に残るそうです。

しかし、全日学の試合前の緊張度といったら人並み以上で、周囲のものもコチンコチンになるほどです。のんびりおっとりしたトキとは絶好のコンビだったかもしれません。

そうした緊張の渦中でも、総合の余力では、思いもつかない（他人はもちろんのこと、本人も）演出をやったのける、サービスピ精神満点の兄なのです。

秋の一・三年目の合宿明けのコンバの時、ココア、ガリックとうがらし、クリーブのポップ・コーンをつくってきてくださるや

さしい兄なのです。

これからは、ガックリせず静かな余生を送ってくださいませ。

四年目にしてようやくコンピュータ付三輪車から脱脚し、コンピュータ付オートバイになる。ちょうど彼の愛車も90ccから本格派二五〇ccになる。最近なんとなく大人の雰囲気か漂うようになる。常に客観を帯びた、ユニークな視点の持ち主であるところは、いつも部報の他己紹介の的であるコンピュータに喻えられる。しかし冷たくはない。さらに現代にふさわしいコンバクトである。

最近、電気の替わりにある特殊な液体をエネルギーとして使うことを覚え、トランジスターを自ら破壊することを楽しむようになる。一度こうなると彼のことばとは思えないような理にかなわないようなことを言いだす。しかし、正常になった時は、さすが彼の記憶回路は、立派で、ちゃんと覚えている。

実に人間味あふれる機械である。
彼の特技 舌鼓

水野豊香兄

獣医学部獣医学科

十二月以後全く馬のそばにいられなくなつた今、学部の窓からそっと雪の中の二つの影を見る毎日が続いている。入部以来ずっとふりむけば隣にいた奴が今では臭いすらなくなつてしまつたようだ。

やはり淋しい。

馬に乗るより何よりもみんなでガヤガヤ酒を飲むことが好きだった。よく死なずに四年間続けられたとも思う。誰に聞かれても学生時代は馬に乗ってましたとでっかい声で答えられることが唯一の誇りである。

滋賀県彦根市出身 一七七㎝ 六八kg O脚
ハイエイム よろしく頼む。

S五十一年三月 競馬会 みずの

馬というものは乗り手に似てくるのでしょうか。兄の騎乗していたハイエイムをみると、そのまま兄という人がわかりそうです。爽快さと凄味でうっていた兄も、四年目となって若干静かになりました。鬼から仏への変身？でもやはり、鞭をもって下からみているあの姿。馬でなくても恐いのです。最近卒業間近で多忙らしく馬場でみかけることもなくなりましたが、とうとう馬とは縁が切れず、中央競馬会に就職するとか……。お祝いをいう前に、国家試験に無事合格しますようにお祈り致します。

兄は正に天才です。何故って、馬術部員で獣医へかくもたやすく行くには、君。天才バカボンを見よ、もちろん、確かに秀才ではないようです。

兄は正に男です。何故って、細かい事にいらいかまわっていられるか、酒さえあれば。かの足を見よ。もちろん、女の子にもてるかは別問題です。

兄は正に行動家です。何故って、獣医は行動家でなくちゃ、研究

者なんて……。ブルースリーを見よ。もちろん、かといって考えのない行動など起こしません。

そんな兄です水野兄は。

若松光子姉

農学部畜産学科

一年生の頃、捨ててあった茶色の仔犬を、部室で飼うんだと、一生懸命世話していたのに、二度目に二階の畳の上でフンをした時、N兄に、絶対的権力でもって「捨ててこい」とどなられて、シクシク泣いたものでした。

O氏に「自分でかせぐようになってから飼うものです」と悟されて……。今にみておれ、ほくだって、第二のちよんすけをかうんだからね。

黙って、よくぞ耐えました。

男の役目を果たしてくれました。

天ちゃんも、よくそれに答えてくれたものです。

もう、何もいうことはありません。

ごくろう様でした。

眼鏡のむこうの大きな瞳は、やさしさと繊細さに輝いているのですが、その生活力たるや、迅速な頭脳の回転といい、時を移さぬ行動力といい、まったく感服させられてしまうのです。大きな農家に生まれて、のんびり育ったお坊っちゃんとは、とても信じられぬたくましさです。春からは学生であり、かつサラリーマンであるような生活に入るとか。兄の社会を見つめる目と、行動力と、ブラスアルファの繊細さは、将来きつと何かをやらかすと信じて疑いません。

部生活における四年間、鞍数でも同じ四年目の男子に引けも劣らず、また女子部員のまとも役として本当によく頑張られました。それにしても彼女ほど見事な女性への変身(?)を成し遂げられた人はいないのでしょうか。はて、その秘訣は？知る人ぞ知る。わかるかね？明知君。

「馬術部で一番女らしい人は？」と問うと、誰もが答える、「ワッカマツサアーン」。クラブの女子の間では、ポストワカマツをめぐって壮絶な戦いが、暗然と始まっているのです。

料理、裁縫が得意かと思うと、草刈は両腕でこなすという器用というかたくましい方です。

一般人と若干異なる歩様も姉の女らしさをひき立てているのではないかと。

大東 美奈子 姉

藤女子短期大学

「身体ばかり大きくても、中身はまだまだ子供で……。」これが母の口癖である。

これが成人した娘に対する言葉であろうか？と不満を感じ、未だに赤いホッペを脹らませる。やはり、主観的にみてもまだまだ子供なのだ。そんな私にも、短大二年間の馬術部生活を終え、新しい未知の世界へと旅立たねばならぬ時期が来ている。しかし、今の私には馬よりも魅力のあるものを捜すのは容易ではないようだ。

婦人馬術界のホープとなるべく生まれてきた姉が、本年度をもって我が北大馬術部を去って行かれる事は、誠に残念至極、ショックは甚大なるものがあります。かねて「藤」の学園より我が部に押しかけられてより、馬の背にまたがること他のいかなる二年目諸姉諸兄をも凌ぐ多きに至り、あの豊満なる肉体（特に姉の一大特徴を成すあの尻）を基礎とする優美さと根性とは他に比類をみないものでありました。何はともあれ、私に出来ます事は、姉の今後の御健康、御活躍をお祈り申し上げるのみであります。

「ねえーおおひがしーん。」と慕われる由縁はやはりあのデコと一勝負しそうな大地に根を張ったような豊かな御体のせいでございます。日々刻々変わるその御尊顔を押し、生きがいとされております人が居てもおかしくはございません。馬上での歯を喰いしばった姉の迫力は鞍はおろか、馬さえもつぶさずにはいない勢いでございます。先日、OLとなられたお姿を拝した時、小生は我と我目を

疑いました。何としたことでしょう。二年間もの長い間、このように美しい珠がボロにまみれて誰一人気付かなかったとは。しかし、しかしです。姉はOLとなられた今、逆に、美しい女性の中でボロをかくしていかなければいけないのです。がんばれ豊満なる肉体を持った変化の女性よ。

森 巖 兄

水産学部水産増殖学科

岡山弁で皆の心をなごませてくれた兄も、昨年の秋皆のひきとめるのもふりきって、男として立たん（？）と函館へ去りました。

あの体のどこから出てくるのか、意外なほどのバイタリティーの持主。でれでれしていると「あほなことゆうとらんと……。」とけしかけられました。きつと函館でも作業に張り切っているでしょう。水産支部を背負う兄 頑張れ！

お元気ですか？そして今でも……。遠い函館の空の下あなたは どうしてらっしゃるのでしょうか。ほんのほんの短い間でした。そして今、数少ない森兄の思い出をたどれば……。やはり一番鮮明に思い出されるのは、何といても追いつけない森兄のお姿。とっても似合っていましたよ。意志悪な居残り部員のプレゼンにも、ニコッと微笑むだけ……。みんなに飲まされてつぶれてしまつて……。かわいそうな森兄。でもちつとも札幌に來ないのです。た

まには顔を見せて下さい。馬に忘れられますよ！



現役部員の部

平野 雅 裕 兄

三年目

ほらほら みなさん

静かに 静かに・・・

ネッ

心臓がことごといたたでしょ

お腹がぐうっていったでしょう

これが ぼく なのです。

主将でありながら、当番に遅れて来ても、ゴメンゴメンと笑って済ませてしまう悪い人です。法学部で鍛えた論理性に富む頭で、理論的な面で、先頭に立って引っぱっていかけてくれますが、下手をすると屁理屈にまるめ込まれるので注意が必要です。何はともあれ、程よくいい加減さがあるというのは、部員にとって、気づまりがなくていいものです。

昼、何気なく、厩舎を訪れると、部室はふとんのかたまりで満員のようす。その下にうずもれて、昼の仮眠を楽しむのが、彼の特技であるらしい。喫茶店でも、いびきをかいて眠るといふのだから、その技は、たいしたものである。彼は、馬術部においては、貫るくたっぶりの主将であり、クラブ運営についてよく考えてくれる。き

っと、彼の頭は、睡眠中でも、何かしらの思考が可能であるような構造なのだろう。と思うことにしよう。

桑田 壮平 兄

三年目

一年目の時はこの欄に「うどの大木のようになろう。」と書きました。二年目の時は「前進あるのみ。」と書きました。何か自己紹介にして自己紹介ならぬ事ばかりで恐縮しておりますが、三年目もこのままで突っ張りたいと思います。（私についてのことは他己紹介の欄を御覧下さい。）では一発、

札幌に来てはや三年なんて月並みなことは申しません。残されたあと一年の部生活にことん自分を追及してみようつもりです。

Oh My God!

兄は、鞍数で断然トップを走る実力者として、また衛生工学のエキスパートとして、しかもいまの三年目でまともに卒業できそうな唯一者として、真にクラブの鑑であり、また多く軟化する部員の中で剛を貫く雄者であり、なにより、コスモスの喪失を笑い白けた世相を嘲る良き関西人であります。

鬼柔両刀使い故、外見の笑みに惑わされ接すると気まずい思いをすることもあるが、心から話を持ちかけると相応の助言を与えてくれる兄である。

石川 淳子 姉

静岡から津軽海峡を渡って、はや……。と、今さら、出身を語るのもおかしいような三年目。も、時間的には、おわりに近づいてしまっている。何かしなくちゃ、と焦る反面、相かわらずのんきな私である。でも、私だっていつかは……と、考える図々しいところも大いにある。

以前ほどの明るい笑い声やおしゃべりがやや聞かれなくなった。最上級生の中で自分の立場を自分なりにわきまえているらしい。ふだんのコンバの席ではたいして飲まないけれど、実は……なのです。

恵迪でのお返しコンバでやらかしたことは有名（なのかな）。

岩崎宏美地方版。明るくて、幼さとたくましさが同居する姉です。から、失敗もありました。しかし、「北勇」号のチーフとして、馬生に疲れ、弱気の出た来たミスターニュークンを励まして、（他の馬にとられるものともせず）常に新しいバスタオルで彼を綺麗にし

ようとしている姿。この姿は貴重なものです。そして、本当の姉の姿なのです。

横 沢 敏 夫 兄

このウツウツとした気分をどうしたものか。食欲だけがある。人間にも会いたくなく、外にも出たくない。

原因さえわかれば、解決できるはずだが。この原稿も出せば少しは楽になれるだろう。

我部では少ない道内出身者の一人。いつもシッコと手を動かすことの好きな兄である。最近では昨年入院された時の経験を生かしてか、以前の兄からは想像もつかないような身形をしておられることが多くなった。

コンパではよく透るノドで兄独特の前口上がよく受ける。でも夢の中でレスリングをするのはやめましょうね。

不覚にも愛馬デコの下敷きに……。折も折、それは二十二才の誕生日。そして二十二才の汚れなき(?)身体を、北大病院第一外科の看護婦さんに曝してしまつたのです。あーそれはあまりにもショック……。救急車で運ばれた時は、死にそーな声。しかし何とか無事(?)でした。これからは御心配下さるな。現在兄は、天龍

山。デコのお尻ほど重くはありません。そして今、兄は思っているでしょう。

忘れたいけど多すぎるのよ あの日思い出がー。

佐 野 淳 之 兄

三年目

あなたには遠い昔から胸に溢き出づるような理想があったはずで。何物にも拘束されず自らの信じた道を歩んできたはずではなかったのですか、少なくとも二十数年前までは。

それが今では、君を最も束縛しているものは自身の肉体であり己の精神生活なり理念ではなからうか。

自分の信念を変えぬという自分の信念の為に、他と相入れず進歩できぬということがこの世にあっていいものだろうか。恵迪での三年の生が終つた今、あなたの無力と惰性で生きてきた証拠が、世界の複雑さと共に露見してしまいました。墮落です。墮落です。信条も持ち得なくなつたあなたの顔などもう見たくもありません。

いけねえ 自己紹介だったんだっけ。いやだねえ全く。とまあ、こんな具合に僕の脳細胞に巣くっている手に負えないデーモンと語り合いながら苦しく悲しい日常から一条の光を頼りに楽しく生きている今日この頃です。

彼の風貌を見ればその内心には測り知れないものがあるように思

える。彼にはどちらかと言えば不言実行型が似合うのだがもう一つ実行が伴わない所が彼の弱味でもあり、また人間味なのであろう。でも最近三年目としての自覚に燃え、近い将来必ずや事を成し立てられるであらう。

正直言ってあまりなじみがないというか、何をどう考えているのかはつきりしないというが、いつも宇宙をさまよえる男と言っておこう。これは俺の認識不足なのかもしれぬが、俺の前に正体を現わしてはくれなかった。残念である。

だからこれからの評が的中しているか否かは非常に疑わしいところであって話し半分で聞いてほしい。

哲人的ムードをもち、さほど感情の起伏が表にでてこない。だから競技で冷静のように見えるが、ここ一発のパンチに欠ける。裏返して見れば頼りないのである。ただ頼ってみてその結果をみていないので、今年あたりは非常に面白いのではないか、完全に予想をひっくりかえしてしまうのではないかと、いう変な魅力を兼ね備えているのでまたわけがわからなくなる。もっとも長くつきあってみて、かみしめてみればよいのだが、それもできず、ただ、がんばってやってくれることを祈るだけのだが、何が我々の持っていない物を深く大切に持っている彼である。要するに宇宙人とも言うておくのが無難であらう。

未知の世界の人だけに何がとび出すやら、その辺に期待したい。

純粹・素朴・誠実・激を望めど、単純さえなれず。残るのは、気まずさとしらけ。現実には、現実からぬけ出そうとして現実へ引き戻され、現実を拒否しながら現実を強いられ、そして現実に酔い、ああ、これが現実か。馬鹿みたい。ほんま。二年目の半浦です。

都会のアンチャンと田舎のアンチャンを混ぜたような人。話をすると話題が豊富。馬術はもちろん、競馬・登山・自動車・フアッション・音楽・味覚・etc、そして室に行くと「メンズクラブ」なんて本がベットの下の下にころがっていたりして……

工学部土木工学科に移行されて、電卓をカチャカチャやりながらレポートを必死になって書く反面、クラブにビックリ箱を持ってきた皆を驚かせては喜ぶという、カワユイ一面も持っている兄です。

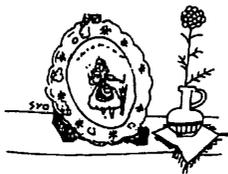
裏切らないでくれよ。僕は君こそ馬術部一の所謂文化人だと信じているんだから。ともすれば軟弱になりそうだった君。最近はお酒にも強くなったようだね。後を見ず、更なる理念の堅固さを揚げ、豊かなる部生活、人生を送ってくれたまえ。

あなたが考えているよりも、ずっとすばらしい人間であることは、間違いの無いことなのですがねえ。

二年目でもあい変わらず少ない鞍数であるが、なぜか、一種独特のうまさがある。それもあの抜群の観察力とユニークな思考力のためだろうか。それとも動物的な感なのか……。生来そなわっている素質である。この能力は、騎上でのみならず、コンパ・部生活・役職などあらゆる場面でいかになく発輝されている。

今までくすぶりつつけてきた彼も、最近、彼なりの理想に向かって燃えだしたようです。今後の活躍を期待しましょう。

矢田明君、確かに君はしばしば人から曲解されてはいる。君の昔の野や川が、今の繊細さを生み出したとしても。それをあたえ自ら標榜してはなるまい。怠慢や気まぐれは悪となり己の心、接する者の心をむしばむ危惧を妊む。而して私は、君の素直さ、偉大さの君の心から失なわれんことを望む。



一年の空白の何と大きいことか。ボケた頭にムチ打って机に向かう。

4 + α年間の青春(?)の全てを馬と再試に賭ける……………。
ふと何かを忘れてしまいそうな……………。

昨年の彼の行動は前部報にあるとおり。最近はず出度くも学部移行し、やや学生らしくなって来たモヨウ。馬場の中では三年目としての買ロクが、恐い存在となりつつある、作業班長としても、女房の尻の下から飛び出し、鬼と化しつつある。スターライトも元気健闘を祈る。

早や彼も三年目です。入部当時を思い出すとうそのようです。今や生きることの厳しさを感じていることでしょう。

彼の部屋のものでございこと、最近は何見していいのですが、何故か気になるのです。入ったら動けないのです。一見、繊細、実はズボラ、たよりなさそうですが、あれでけっこう頼もしいの……です。昔日の思い出の「ボク、ナガヤデース」から、少しだけ前進したもようの彼です。

馬術部生活をはじめてはや二年。少しは強くなったかと思っても、やはり変わってはいないので気づく。もっと考えなくてはならない。でも、とにかくやらなくてはしょうがない。そして結局、なにでもできない自分をみては、嫌悪感を覚えるこのごろです。

彼女は作業という役職につかれまして、みなさんから国際婦人年の象徴のように言われておりますが、やさしい女らしい方なのです。

『ずんぐりむっくり、ずんぐりむっくり。』と言え

『添田さん、変なこと言わないで下さい。』と見る見る頬をふくませて怒ります。

また、卑猥なことを言って揶揄すれば、『阿部さんったら、ほんとうにいやらしいんだから。』と本気になって蔑視するのです。

これが、はにかみ屋さんでかつ、可愛い冒険屋さんでもある笠間さんの一般的姿です。

一方、部活動に於ては、前代未聞の女性作業部長として君臨し、免許もと「ねえ、どうしよう課」の長屋事故課長を補佐に飛びまわっています。しかし、何と言っても全部員にとつての朗報は、はち巻きにサングラスを掛け、さらしを巻いた出立の彼女が、四トン車のハンドル片手に煙草をふかしながら乾草を運ぶ勇姿が、もうじきみられるということです。

頑張れ、美貌の笠間淳子、君は若いのだ!!

大阪府立高津高校卒、北大入学後という訳か馬術部に入り、日々を淡々と過すこと二年、ようやく念願の獣医学部へ移行できホッとしたのもつかの間、今はやらねばならぬことが次々と出てきて追いかけられる毎日。

本当にこんな生活をしていいのでしょうか。

彼はすごく本城です。

あの努力、あの気迫、頑張

り、偉大なる ジョーズ

兄は根性の人だ。そのペールに秘められた生活の一部をあげよう。兄の根性の源はお茶漬、朝にも食べるお茶漬である。そのせいか、常にスマートなボディを保っておられ、当部きつてのベストドレッサーである。その兄が当時ジョジョンコと呼ばれていたのが、最近ジョーズというネームを得られて名実ともにスマートになられました。だが、その名のおこりは、兄がある日、目だけでなく口をもあけて眠っておられた夜。以来ジョーズあるいはホンジョーズと呼ばれるに到った次第であります。

山本裕介 兄

二年目

趣味

理知的思考不可能なためかひたすら官能的感觉的世界へ

二年目 休養部

昭和三十年十一月三日生

出產地 広島県呉市 父 福井県人 母 広島県人 子中半血人

育成地 和歌山県田辺市 二年

北海道小樽市 三年

山口県徳山市 四年

和歌山県田辺市 四年 野球にかけた少年時代

富山県高岡市 四年 柔道にかけた思春期

富山県立高岡高等学校卒

現在の帰省先 北海道根室市

現在水野兄・岩田兄と同じ屋根の下に果食う

身長 一六五cm 体重 六三kg

野球名セカンド 柔道 得意技大内返し

一〇〇m 十二秒フラット

広島弁和歌山弁富山弁標準語の使い分け可能

性質

いっさいの哲学的政治的社会的経済的論理的数学的思考
言動を行ないたがらずいゆるバカとの評判であるが、
本当はそのとおりである。単純短絡的思考形態を有す。
当然のことながら繊細さはない。

本来無口であるが無理して愚言ばかり呈する。
酒嗜好癖、狂暴性なし穏健派

ひきずりこまれ音楽に耳を傾け陶酔する。
一杯やりながらのモーツァルトは最高である。

悪魔の仮面が笑うのか 少女の心が嘆くのか
豪言 豪飲 ふてぶてしさ
モーツァルトの旋律はどこへいったの？
少女の心の奥底へ。

部内で一番シビアな方です。また女性と男性に対する態度の違い
が一番著しい方でもあります。

山川 恵姉

二年目

単純なる日々を送り、単純なる思考をくり返し、何かをしなけれ
ばと焦り、何もせずにまごまごし、そこでまたこれではいけないと
あわてたり。奮い立っていきがって、そしてガックリ打ちのめされ
て滅入ったり。二〇才の女心とは日々貌変し、己がどこにあるのか
見当もつきません。

拝啓 恵様
雪がとけはじめ、あと少しで若葉の緑色とタンポポの黄色のコン
トラストの見事な春になりますが、ついにお別れの時がきました。

十一月三重では自分でもわけのわからないほど集中力に欠け四年間の競技生活で最悪の場となってしまいあなたにもハイエームにも頭のがらぬ思いでいっぱいです。ただただ苦笑のみが残っているだけで何も言えません。

今年になってから顔を見る毎に、羊蹄は元気？からガキどうしている？の会話におりましたが、生みの親より育ての親といえます。よき母親がわりになってやってください。

もう少し何かを書かねば紹介になりませんので、眼をとじて思い浮べてみると練習時の姿しかでてこないのが残念ですが、確実に上に立った独特の白い大きな拳が見えます。それから騎乗後、酒気を帯びた如くに上気した健康そうな顔が出てきます。音まで聞こえてきました。非常に低音の声です。

女性が馬術部で四年間活動するということは、ほんとうに大変なことだと思えますが、あなたなら頼もしいところがあります。若松を追い越すことと獣医学部に移行できることを祈って筆を置くことにします。がんばって下さい。

あの手、あの足、そしてあの声、既に皆さん御存じのはずである。しかし、彼女に骨瘤があるのを知っている人は少ない。親指の付け根にあるその骨瘤は寒さが厳しくなると痛むらしい。馬の気持がわかると彼女は言う。外見の逞しさに隠されたあの何とも言えない優しさは忘れてはいけない。何かを頼みたい時は彼女に頼んでみよう。きっと快く引き受けてくれるだろう。とにかく、ファイトのある元気な女の子である。

これからも、あの五月の空のような清々しい笑顔を絶やさないで

ほしいと思うのである。

水 井 とく子 姉

二年目

身の丈低からず高からず、容貌は魁偉にあらず。要するに極く普通の女の子なのです。

これといって運動神経も平衡感覚もいいという訳でもなく、身体も柔軟でもないのに、何故か馬術部にいるのです。本当に何かと皆様には御迷惑をおかけしております。この機会をお借りしてお礼申し上げます。

君が馬術部にいるということは、自分にとって一つの大きな冒険に違いない。単に汚い格好をしてどっかりと馬に跨ることが不相応という意味だけでなく……。なにはともあれ君は、接する者に北海道の初夏の宵空のような明るさを与えてくれる。

僕は思うんだが、君の精神と言動との均衡には極めて繊細な調整が必要とされているのではなからうか。

姉の辞書には、憂とか、沈とか、そういったたぐいの言葉はないようです。いつもにこにこしてよくしゃべり、全くくっつくがないのです。ですから、一所に居る人は退くつしなないですむようです。女だてらに（失礼）地球物理学科に在籍していて、大変な才女

のはずなのですが、その片りんを見せることは、まれにしかないようです。奥床しいのかなあ。(ウソつけ)

が……。

浪内陽子姉

一年目

人に自分を紹介する時は、自慢できる事を書きたいものです。いつか自慢のできる私に成ったらばー。イヤイヤそれは一生無理。愚しさもりっぱに自慢できるくらいの度胸と道化ができる様になったらばー。書いてみたいと思います。

姉は看護婦の卵でありまして、看護学校の早和寮から毎朝ほおを赤くそめて、はっはっ走ってきては「学校がすぐあるの。」とかけて行きます。女らしくてお握りがとてもうまいのですが、言うことが憎たらしくて、酒を飲むのです。ただし馬にかける情熱はすごく、ゆくゆくはいいオス馬をお世話しよう。これは冗談です。とにかくその小さな体に、大胆さとデリカシーと根性と女らしさとそして存在価値を秘めた人です。

女は女たるべきところで女を伸ばしさえすればよい。君にはそれができなきゃあならぬ。

ただそれが女の幸福でもあり不幸でもあることに変わりはあるまい

滝華聡之兄

一年目

親許を離れて遠くへ行ってみたい。どこか広いところへ行ってみたい。太陽のさんと降り注ぐ下、走り回りながら自分を考えてみたいなど思っているうちに北大へきてしまった。そして、それらのイメージが、以前からの趣味によって色づけされると、自然と馬術部に入っていた。あれからもう一年になろうとしている。この一年間何をやったか。軟弱な意志と貧弱な肉体の為に、クラブをやる勇氣すら持ち得なかったということだけ。今の唯一つの望みは来年の部報にも自己紹介を書ける身分であり続けたい、あわよくばもっともっと充実した気持で、ということ。

一言でいって、不思議な人物、訳のわからぬ人物です。

競馬狂いで馬術部に入り、この殺ばつたる馬術部に親しめないままボーッとしているのかと思うと、グッとときわどいことをたまく。彼の口調も又独特で、一度聞いたらわすられぬ……ユニークなです。

ホラホラみんなボーッしていると彼においていかれますよ

彼の第一印象は、誰しもその独特なる音声ではあるまいか。入部したての頃、彼が馬場を出る時、あるいは馬場に入ってきた時、その声によって一瞬練習中の緊張感がふっとなごむのである。彼は馬術部に入部した理由として、昔は実用的な交通手段であった馬術というものから、昔を偲ぶと言っていた。彼の考え方は一種独特で、いわゆる個性派タイプ。彼の心の中に秘めた考えをのぞくことができたら、きっと思いもかけぬ彼を発見するだろう。

中島 孝 幸 兄

一年目

別に運命論者という訳ではないのですが、ここ数年来の自分を顧みると、なるがままに任せてきたという感じはします。特に馬術部に入ってから、その傾向が強くなり、何事に対しても、あつげらんとしていられる点は良しとして、こと留年の意義ということについては、真剣に考えようと、このごろ思っています。

名寄の極寒地に生い育った割には、すくすくと良く伸びている若者、寒地に育った人間共通の生真目さから、誰かと兄弟と呼ばれる。当初は南西のカナタから、近頃も協和荘よりの早期ランニングをかかさず、真赤な顔で部屋に走り込んで来る。長距離走者の特技を良く生かしている。

入部早々、その風貌・態度・口ぶりのぎこちなさから、横沢兄と並んで横沢兄弟といわれた。体に比して大きな顔して恥しそうに物を言われると妙チクリンな気がしたのだが、今はもうギクシヤクしたところも少なくなり、又、兄貴の得意のする奇行もち合わせていない。それでもなんとなく腹ちがいの弟ほどの血のつながりがありそうだ。

一見落ちついていそうで、どっこいあっちこちいろいろヌケた所をお持ちのようだ。

木村 憲 子 姉

一年目

自己紹介とはとかく嘘を書きたがるもの。
嘘をつける年齢になってから、たつぷりと書かせていただきます。
では失礼。

長い足と大きな目が何よりも羨ましい女の子です。男子部員の中には貴方に近よらないように努めている人もいるとか。

真面目な中にも吹き出したくなるような面白さを持った貴方ですが時には臨機応変になることも必要ですよ。……でも、その何とも言葉に表わすことのできない緩慢な動きが貴方の魅力の一つかも知れませんか。

本当によく働く貴方、その真面目さ、馬への愛情はいつまでも忘

れないでほしいのです。

初めて接した頃、何故かまともに目を合わせるのが恐しかった。

それは、あの大きな澄んだ瞳に覗き込まれると、お互いの目を媒介として、秘かに自分の心の奥で嘗んできた汚れちまった世界に気が付かれてしまいそうな気がしたからである。

君はいつまでも君の心の素直さといっしょに暮らしなさい。それが君の人生の最も良き友である。

三 好 功 悦 兄

一年目

今をさかのぼること十八年前、北海道は帯広の大平原でとれた道産子二世。流れ流れて上州は高崎宿から、北海道に舞い戻って来ました。受験旅行の帰りに見た、雪原で遊ぶ馬の姿がなぜか忘れられなくて、馬に乗り始めました。現在、理想と現実の間で煩悶しつつも、生きながらえている私です。そんな中で今思うことは、一おれは生きるんだ！

十八才（この本がでるころは十九才ークラブで一番若いのです）独身

兄は繊細な神経の持ち主で、一見柔らかな外貌とは裏腹に、芯の強いがんばり屋である。と見たが、真実は如何。一年目の中でも学

力優秀とか、どうかそのままエリートコース（？）をあゆんで欲しい。

群馬県は高崎高校の出で、カラッ風にきたえられてきたのが早朝の雪の中を寒さにもめげず東のはてから練習に出てきます。

彼はなかなかのスタイリストで、彼の着こなしの良さには見るべきものがあります。それに彼こそは、あの恐しい部報委員長なのであります。それだけで彼の人間性がわかります。

今年の彼の活躍に注目しましょう。

岩 田 正 勝 兄

一年目

生き馬の目を抜くと言うより生き馬の鼻毛を凍らせるような冬の朝の銜乗中、体をこわばらせ、馬上の置物となった自分は、ただただ馬の毛皮にあこがれ、いつしか牝牡の区別なくその優しく暖かな首に手を回し、ああ、これが人馬一体か、などと凍った口で風の如き「ぶやき」をもらし、いつしか眠りにおちいろうとする自分を、ねてはいけない、凍死するぞと励まし、ようやく馬場の入口にたどりつき「とっかせ、あいらります。」と四苦八苦のいで叫び、その恥しい姿を衆前にさらすのである。何のこっちらわからない事を書いたが、要するに、自分は軟弱にして一特に寒さに対して「アホ」であり、何人の足跡もない銀雪の静かなる風景画の一点に馬と自分

を主人公に入れる事もできず、青葉の並木を抜けてゆく透き通った風にあたてがみをくすぐられて気持ちよさそうな馬の上で無神経にどたばたして、果ては酒に感って君のね込みを襲ったこともあったよね、ユウクン。

本当の自己紹介はここから…

身長・体重 不定

尊敬する人 こまわり君

尊敬する馬 ポーズ

志、霧の如くありて、胸中にどろどろと渦巻くものなくして、霧の集まる核を模索中の小生です。最後にジジイ・オジンと呼んでごめんなさい。ユウクンにイイジマくん。

顔は小さく、足は長く、歩く姿は、どことなくソフトである。がそれに似合わず、ハードなハートも持ち合わせているらしい。しきりに何かをやりたがっているようにもみえる。コンパでは、その酒豪ぶりを、大いに発揮し、お酒の許容量には、際限がないとか…。今後の彼の活躍が、楽しみである。

ホットケーキを焼くのが上手で、ジャムサンドビスケットとダーリングが大好きで、男のくせにこまめで、時々スタ袋を下げて某ブラザまで買い出しに…。でも水が冷たいから、洗い物をするのが大嫌い。酒癖が悪いんです。お気を付け下さい。馬みたい。暴れるし噛みつくし…。素直すぎるんです。時々ついつい余計な事まで言ってしまうって諸兄の気分を害する事があるかも知れませんが、決して悪気がある訳ではないのです。気はやさしくて、力もち(？)用

を頼んでも決してイヤとは言いません。馬に恋してます。溺愛してらんです。女性には目もくれず…。(？)早く上手になりたいな…。そう思ってます。

飯島茂 兄

一年目

上州生れの上州育ち。幼い頃固定忠次の話を聞かされ、弱きを助け強きを挫くよう教わったものですが、この世の中なんと強き人の多いこと。私ほど弱い人間は見あたりません。こんな私ですからコーヒーよりはココアが好きなのです。

愛があるなら年の差なんて人はおっしゃいますが、一年以上の一年年下という不思議な関係があると、なんとなく近つき難いものです。その上、いつもエヘラエヘラしているものだから、何を考えているのかよく解らないのですが、かく言う私も昔、このように書かれましたから、きっと何かあるのでしょう。でも、いつもエヘラエヘラしていると女の人にもてないようです。

君は先ず、蛙の卵を包むような被害者意識から脱皮せねばならぬ。次に頑な程にまで自主性を培わねばならぬ。最後に(これが一番大事なのだが)君は、常に崇高さを求めねばならぬ。さて三つの壁を

突き破った時に接するのは飯島茂という変貌した一人の男であろう。それが出来るのは今しかない、と僕は信じて止まぬ。がんばれ。

蛭子雄次兄

一年目

昭和三十一年十月二十七日生。北九州市小倉区産。玄海育ちの九州男子。特技なし。趣味 センチュリーへ行くこと。これが僕の全てです。

この春は、二年生になります。下級生ができます。わたしは、コンバで彼の姿しか印象がありません。それがまたゆかいなんです。同期のたきはなくんを相手に、ほほえましい姿をみせています。それでいいから、そのまますくすく育て下さい。この馬術部で、きっと考えるところは考えているんでしようし、やるところはやるでしょうから。がんばっていい上級生になれるように。

僕は君みたいな大学生は知りません。君はまるで小学生のように心がすぐ表に出る人ですね。なる程、君はストリップが見たいだのタバコがうまいだの大人びたことを言いますが、僕から見たらうらやましい程子供です。入学したての頃はトキにゾコンだったようですが近頃はどうか。



北海道大学馬術部名簿

歴代部長

氏名		住 所	郵便番号	電 話	勤 務 先	電 話
永井 一夫	初代部長	札幌市南2条西12丁目	060	011 211-2435	北大名誉教授	
高松 正信	第二代部長	物故				
黒沢 亮助	第三代部長	物故				
太泰 康光	第四代部長	札幌市南1条西21丁目	060	011 621-0781		
松本 久善	第五代部長	物故				
半沢 道郎	第六代部長	札幌市北6条西12丁目	060	011 221-2286	北大農学部名誉教授	
河田啓一郎	現部長	〃 北区北24西13	065	011 711-7470	北大獣医学部教授	内5232

特別後援会員

氏名		住 所	郵便番号	電 話	勤 務 先	電 話
野間口英喜		東京都杉並区永福2-36-19	166	03 321-7617	太田区羽田空港2の8の1東京 航屑食品(株) 日航ホテル社長 川崎日航ホテル社長	571-4911
滝沢 政雄		東京都目黒区目黒1-1目黒台マンションA-501	153		国策観光開発(株)取締役社長	24-5431
原島 つる		札幌市北2条西27丁目	063	011 621-1451	原島洋装院院長	
庄内 貞夫		〃 白石中央53の3	062	011 861-2504	歯科医	

武田 忠幸	札幌市南6条西20丁目	063	011 561-3286	北都ハイヤー、北都バス社長	711-7214
小野 忠	" 北18条西5丁目	065	011 721-1526	北大モータース社長	
片寄 謙	" 北18条西6丁目 静山庄	065		北大農学部大学院	
佐合 義弘	" 西区手稲西野410番地	063		札幌市民生協協同組合理事	
加藤 和男	東京都太田区南馬込6丁目29番-1号	143	03 751-4601	フジマン株式会社	
田中 昭志	札幌市琴似4条5丁目国鉄宿舍7号	063	011 731-8489	札幌鉄道管理局	
岡沢 尹大	(在カナダ)				
柴田 好	札幌市北区北15条西3丁目 中村A P		011 742-3776	北大医学部学生	
大東美奈子	" 西区八軒東5丁目1		011 711-5262		

後援会員(卒業生)

氏名	卒業年度	住 所	郵便番号	電 話	勤 務 先	電 話
中野友二郎	昭4 農農	東京都多摩市桜ヶ丘3丁目33の4	192-02		日本私学教育研究事務局	
平山 常介	4 工機	横浜市鶴見区獅子ヶ谷町1222の19	230	045 572-4208	日本海事業興業	
中谷 勝紀	5 工機	杉並区桃井1-15-23	167	370-3450	ヤンマー船舶機器(株)	542-0211
間 克市	6 農畜	新冠郡新冠町節婦	059-24		地方競馬全国協会参与	
岩垣 駛夫	6 農農	神奈川県川崎市多摩区生田6983-173	214	044 96-0297	本州製紙KK 囀託	
河崎 秋三	6 農畜	八王子市高倉町1552	192		千葉県小林牧場	
藤居金太郎	7 農化	(在ブラジル・サンパウロ)			漁業	
永松 四郎	7 農畜	太田区北千束1-58-9	144	03 717-3484	永松商事	

氏名	卒業年度	住 所	郵便番号	電 話	勤 務 先	電 話
半沢 道郎	8 理化	札幌市北6条西12丁目	060	011 221-2286	北大農学部名誉教授	
武田 朝男	8 農畜	品川区旗ノ台6-1-2	142	03 781-1097	日本製酪協同組合副理事長	264-8421 ~4
東園 基文 (7 主)	9 農農	目黒区五本木3-30-1	153	711-8877	宮内庁侍従職参事	400-0451
田畑 武夫	10 医	札幌市南5条西2丁目	060	511-3733	田畑産婦人科医院院長	
植村 勘一	10 農畜	東京都世田ヶ谷区等々カ2丁目13-11	156	03 701-4826	北東興業KK取締役会長	
本田 桓康	10 工機	// 港区六本木7-2-2-402	106	405-6867	プレス工業KK専務取締役	044 266-2581
久葉 昇	10 農畜	岐阜県各務原市那加織田町148	504	0583 82-5632	名古屋保健衛生大学衛生学部教授	
加藤 英夫	11 医	清水市有東坂554-19	424	0543 45-6329	千代田区丸ノ内三菱ビルデング 三菱モンサント化成工業KK社長	212-1570
脇田代子郎	11 農化	神奈川県藤沢市辻堂西海岸6366	251		大迫技術士事務所	480-9717
大道 明德	11 理化	東京都狛江市覚東320-6	182	428-4817		
高杉 直幹 (9 主)	11 理化	札幌市北7条西13丁目	060	251-3720	北星大教授	
吉見 一郎	11 農経	東京都狛江市小足立620	182	489-0491	雪印乳業KK常務取締役	357-3111
渋谷 周平	11 農畜	// 渋谷区代々木1-22-10	151		東京飲用牛乳協会	
森山 武雄	12 医	青森県南津軽郡浪岡町国立岩木療養所	038-13		国立岩木療養所所長	
滋賀 秀明 (11 主)	12 医	港区白金台5-3-20	108	441-7844	大同製鋼KK東京診療所所長	901-4169
小村 達夫	13 農生	岡山市足守861	701-04		岡山大理学部教授	
山下 正亮 (12 主)	13 農畜	札幌市白石区本通818の135	062	861-5667	酪農学園大教授	
石井 昌長	13 農化	千葉県船橋市夏見台町夏見台団地14-105	273	0433 62-9785	アルコール海運倉庫KK	
小笠原義頭	13 工電	川崎市多摩区宿河原2223	214	044 822-3609	旭電気工業KK 取締役社長	

樋本 勝登	13	農経	東京都杉並区西荻北2の27の8ライオン ズマンション西荻第2D-608	164	395-3548	中央技能検定協会監事	
松平 悌	13	農農	神奈川県秦野市鶴巻963-18	257	0463 77-2116	成城グリーン・プラザ取締役	484-6781
黒沢 良雄	13	農経	茅ヶ崎市浜竹4-6-30	253	0467 70-8676	日動水災海上保険KK顧問	
小田 昇	14	農畜	東京都目黒区上目黒3-44-19-205	153	424-8666	実業(香澄旅館)	
池内 武夫	14	農畜	物 故				
中尾 敦司	15	工鉱	船橋市西習志野2丁目23-10	274		カミタルクKK石巻港工場 取締役工場長	
西村 雅吉 (4主)	15	理化	函館市松陰町1-3	040	0138 51-1624	北大水産学部教授 (水産化学科)函館市港町	41-0131
木谷清喜貞	16	農実	金沢市片町2-2 20号木谷ビル	920	0762 21-5041	瓦土建(自営)	
石井 和彦 (15主)	16	農畜	鳥取市湖山町1960-158 合同宿舎ROKI -201	680		鳥取大農学部教授	
河原 清作	16	工土	物 故				
熊沢 洸	16	農実	札幌市北区北13条西3丁目 公園北13 条アパート701	065	742-0392	小柳商事(株)	
関 義人	16	医	秋田県湯沢市御囲地町4-18	012		関内科小児科医院	
高木 史朗	16	工鉱	茨城県東茨城郡茨城町大字駒渡1244	311-31		波崎高等学校校長	
林 健爾	16	農実	札幌市手稲福井49-13	063	661-9707	札幌三光印刷(株)	
半沢 宏	16	工機	" 北6条西12丁目	060	261-7455	北大工学部教授	内2191
伊関 悦郎	16	工鉱	函館市宮前町27-15	040		函館水産高校	
門池 正夫	16	農実	名古屋市千種区丸山町3-24	464		協和工業(株)社長	
福光 幸彦	17	医	札幌市豊平区平岸3の14	062	511-1843	福光延寿堂院小児科	
岡田 光夫 (16主)	17	工土	" 南7条西22丁目	064	562-2223	札幌市役所水道局局長	011 211-3000
石川 恒	17	農畜	" 北24条西16丁目	065	721-0052	北大獣医学部教授	内5231

氏名	卒業年度	住 所	郵便番号	電 話	勤 務 先	電 話
白取 善三	17 農実	弘前市大字薬師堂熊本9の2	038-03		津軽平川土地改良区理事長	
小林 五郎	17 工電	神奈川県中郡大磯町東町2の64	255		沖電気工業KK特殊機器開発部次長	
山根 乙彦	17 農畜	鳥取市湯所町2の422	680		鳥取大農学部教授	
前田 正義	18 農実				雪印乳業名古屋マーガリン工場長	
大戸 進	18 農林	名古屋市南区加福町3-7	457		三井木材KK酒志野工場長	
小池 栄一	18 工土	札幌市南区南36条西10丁目	064	581-2290	㈱日特建設 札幌支店長	
平井 宏和	18 工電	東京都町田市玉川学園8-18-9	194	0427 26-6231	日本電気衛生通信開発室常務取締役	044 41-1111
安部 孝	19 工電	" 小金井市貫井北町3-19-5	184	0423 81-4100	高見沢電気製作所取締役 通信機営業部長	
坂井 弘	19 農化	埼玉県鴻巣市東4丁目51-41	365	0485 42-6533	農業試験場環境部長	
田口 暢茂	19 医	札幌市北22条東18丁目	065	781-3621	道立千歳病院	
稲葉 忠一	19 農化	大阪府高槻市天神町2の16の15	569	0726 5-2759	日本油脂KK取締役油化事業部長	
福岡 邦泰	19 農農	夕張郡長沼町錦町公宅	069-13	0126 2-0124	道立中央農試副場長	
大手 英夫	19 理化	東京都新宿区西大久保2-219	160	365-4523	東邦シートフレームKK	272-2811
岸田幸三郎	20 農化	大阪市東淀川区山口町145-1	533	322-6783	白 營	
富塚 治郎	20 農畜	東京都福生市能川福生住宅537	197	0425 57-7107	東京都畜産試験場長	0428 31-2171
羽島 栄治	20 工土	横浜市港南区上永谷町4058~20	233	052 771-3513	西武建設常務取締役	052 211-1451
小林 正英	20 農畜	東京都杉並区阿佐ヶ谷北3-26-10	166	337-3196	東京都経済局農林部畜産課長	212-5111 内2883
木全 幹雄	21 農化	東京都杉並区稻水1の6-8	167	03 398-0417	防衛庁武器補給廠副廠長	
山崎 治雄	21 工治	東大阪市西堤623狩勝工業KK	577		狩勝工業KK 大阪市城東区放出町2179	

宇津見千之助	21	農畜	栃木県小山市中央町2-6-1	323			印刷業	
上野 新次	22	農農	新潟県関屋金鉢山町53-1集合公舎24号	951			新潟県教育委員会指導課	
和田 晴	22	農畜	札幌市南区真駒内曙町4丁目道公宅4161	061-21	467-2815		北海道競馬事務所長	
宮崎 利昭	22	工機	東京都港区高輪1-5-3パークマンション312	108			三井物産 KK開発本部海外建設部(在ペルー)	
武田 祐幸	22	理地	横浜市磯子区洋光台1-28-6	235	045 773-1581		国際航業KK地質部長	262-6221
田之上家久	26	農水	大阪府枚方市招提194の1 牧野ハイム125号	573			日本放射線同位元素協会大阪事務所	
後藤 義英	28	農獣	札幌市円山西町2097	064	621-0962		札幌市環境衛生事業所長	
斉藤 善一	28	農畜	弘前市若党町79	036			弘前大農学部教授	
鈴木 敏夫	28	農畜	虻田郡洞爺村字洞爺町四町内公住	049-58			洞爺高校	
渡植貞一郎	28	農畜	名古屋市昭和区川名山町128公務員林中住宅3-43	466			名古屋大農学部助教授	
鹿野 保	28	農畜	札幌市豊平区羊ヶ丘北農試宿舎G-5	061-01			北海道農業試験場草地開発部第5研究室長	851-9141
永井 重翁	28	農獣	花巻市石神町77の3	025	23-4017		雪印乳業KK花巻工場原料課長	
梶谷 晴男	28	農水産	大阪府生野区新今里町4-4-13	544	06 753-0387		三菱商事(囑託)	0798 33-5008
吉本 正	28	農畜	千葉市松戸市松戸646千葉大松戸宿舎103	271	0473 63-1221		千葉大園芸学部助教授	
古谷 昌司 (26.27主)	28	農畜	浦和市別所3-38-10	336	0488 61-5073		古谷製菓KK技術部	0488 31-6873
下飯坂 隆	28	農畜	東京都杉並区成田西3-7-12	166	385-3269		日本軽種馬登録協会	429-5101
佐藤 巖	28	農畜	川崎市多摩区岡上510-28	215			雪印乳業KK東京本社技術部	268-3111 内588
福島 務	29	医	福島市三河南町7-17	960	0245 34-7223		福島医大産婦人科教授	0245-23- 1111内360
阿部晃一郎	30	工鉦	新居浜市星城町13-18	792-01	6897 34-2879		住友金属鉦山(株)別子事業所調査室長	
鎌田 正人 (28.29主)	30	農畜獣	浦河郡浦河町西幌別446	057	01462 3-284		KK鎌田牧場	

氏名	卒業年度	住 所	郵便番号	電 話	勤 務 先	電 話
田中 浩	30 工治	大阪府東区北浜3 大阪神鋼ビル内 神戸製鋼溶接棒技術サービス課	5 4 1		神戸製鋼KK	
正富 宏之	30 理動	美唄市東5条南7丁目	0 7 2		専修大学美唄農工短大	
斉藤 成俊	31 農経		0 6 3	621-4770	北海道信用農協連電算室長代理	
佐伯 和夫 (旧石塚)	31 獣	白老郡白老町萩野23	059-08		昭和工業KK	
大久保利彦 (30主)	31 獣	札幌市東区本町1条2丁目4-9	0 6 5		雪印乳業KK北海道支社酪農課 札幌市苗穂町6丁目36-108	741-1111
加藤昌太郎	31 理物	国分寺西町けやき台32-103	1 8 5	0423 741-1111	(財団法人)日本総合研究所科 学部次長 千代田区平河町2-16-15	03-265- 2371内356 344-3536
加藤 元	31 獣	東京都杉並区久我山3-7-27	1 6 7	334-3536	(北野ビル)ガタクリ動物病院 久我山センター病院長	
千田 哲生	31 獣	// 世田谷区弦巻5-26-3-302	1 5 4	425-3462	中央競馬会競走馬保健研究所研 究 二課長	429-2311
岡本 洸	31 農生	草加市松原4丁目D58-204	3 4 0	0489 23-9907	十条製紙KK東京事業所	
荒川 清	32 経	札幌市中央区界川町495			札幌トヨタ北区支店	711-7191
榎本 幸人	32 理植	兵庫県津久郡淡路町岩屋神戸大学理学部 岩屋臨海実験所	656-23		神戸大理学部岩屋臨海実験所	
岡部 満雄	32 農畜	札幌市西区琴似八軒5条東5丁目道宅206	0 6 3		北海道総務部審議室	231-4111
斉藤 実	32 経		9 3 0		不二越鋼材工業KK	
宮沢 寛	32 農林産	逗子市山の根3丁目12-10	2 4 9	0468 71-2487	日本揮発油KK 保全部	045 731-1261
伊藤 亮	33 獣	河東郡音更町中音更 同場公宅			農林省十勝種畜牧場経営指導課長	
池田 璦	33 医薬	札幌市中央区大通西23丁目円山ビル601	0 6 3	621-4251 円山ハウス		
乾 直道	33 理動	藤沢市辻堂新町2丁目4-12	2 5 1	0466 36-9162	癌研究所病理部	418-0111 内472
栗原 康	33 工鉱	東久留米市大門町2-3-6-403	180-03	0424 72-9064	通産省貿易振興局経済協力部技 術協力課	511-1511
渡辺 俊弘	33 工応化	上尾市大字上字堤下359上尾シラコバト 公団アパート17-401	3 6 2		北炭化成工業KK	

柴田 久男	34	工電	札幌市手稲町西野937	063	661-8709	北海道電力部火力計画課長	
今田 哲	34	農化	西宮市苦楽園4番町18の16	662		武田薬品KK研究所	
生田 勝一 (33主)	34	経	習志野市袖ヶ浦3-4-5-202	275	0474 74-5206	読売新聞社千葉支局	
菅原 照雄	34	文哲				毎日新聞社北海道支社	
七井 敦	34	農畜	札幌市西区手稲前田368の30	061-24		ホクレン本所生乳共販課長	251-1905 261-8525
山本 智	34	水	斜里郡小清水町7	099-36	0152 62-2573	小清水高校	
栗津健太郎	34	水	札幌市西区発寒834	063	661-1092	銀座屋(製パン業)	
村山 哲	34	経	神奈川県鎌倉市梶原1471 グリーンハイツF3-201			本田技研工業	
樋口 正明 (32主)	34	法法	東京都世田谷上馬5-23-8	154	424-9496	東京都衛生局医務部	212-5111 内2582~4
千葉 幹夫	34	獣	// 世田谷区弦巻5-26-4-206	154	426-1858	中央競馬会馬事公苑普及課長	429-5101
中村 美幸	34	経経	// 中野区鷺宮6-31-9	165	999-2443		
佐伯 雄二	35	農畜	群馬県館林市大字成島2544 森永住宅31	374		森永乳業KK館林工場	
本橋 幹久	35	農畜	(在サンパウロ)				
奥野 静子 (旧片山)	35	文英	札幌市北2条西23丁目	063	611-8414		
小長谷善高	35	水	川崎市中原区丸子天神町73NHK寮	211	0424 93-0791	NHK	
田中 紀介	35	農林産	静岡県沼水市宮代町6	424		富士合板KK研究所	沼水 34-1271
長谷川邦夫	35	法法	立川市栄町5-28-1 公社250	190	0425 35-7461	岩崎通信機KK経理部	
門奈 駿	35	医	茅ヶ崎市旭ヶ丘13-4	253	0467 82-5744	国際興業航空サービス部	281-2341
森本 悌次 (34主)	35	農林産	埼玉県北葛飾郡吉川町加茂694	342	0489 95-0951	自営	600-5330
稲垣 修一	36	理化	愛知県知多郡阿久比町白沢みのかけ10の10	470-22		大同製鋼KK	

氏名	来業年度	住 所	郵便番号	電 話	勤 務 先	電 話	
佐藤 典子 (旧佐藤)	36	医	(在アメリカ)			北大病院第2内科	
高林 嬉子代 (旧高階)	36	医	横浜市磯子区岡村町238	235	045 751-4431	虎ノ門病院	583-6871
河原 紀夫	36	理地	西宮市天道町20-16-302	663		アジア航測KK	429-2151
湯浅 正之	36	農畜	船橋市坪井町600-59	274	0474 65-3742	伊藤忠商事KK畜産課	662-5111
吉田 亨	36	工衛	八王子市打越町715-203	192		高砂熱学工業KK技術企画部課長	251-7121
千葉 祐記 (36主)	37	農畜	小平市喜平町860-1 小平団地2-4-409	187		雪印乳業KK販売促進部調査課	357-3111
広岡 暢夫	37	農畜	沖縄県那覇市字楚辺54 みはらしマンション4011	902		全販連	279-0411
森 弘津	37	工精	名古屋市北区辻町2の36 大隅鉄工所第一寮	462		大隅鉄工製造部生産技術課	
四柳 智久	37	医薬	(米国留学中)			東京大大学院(薬学部)	
木塚 信次	37	農畜	横浜市戸塚区名瀬町784-10	244	045 811-8417	横浜市神奈川保健所食品衛生係	045 891-1921
伊藤 公一	37	医	虻田郡倶知安町北4条東1丁目 倶知安厚生病院	044		倶知安厚生病院	
大場 善明 (35主)	37	文史	東京都足立区栗原2-6-14-104	123	883-8245	読売新聞広告部	242-1111 内4134
鶴見 好博	37	理化	東京都葛飾区金町5-19-3	125	600-2186	三菱瓦斯化学KK	600-2131
小島 杏介	37	水	横浜市神奈川区菅田町2872	221		淀橋保健所	368-6186
小山 毅	37	教	世田谷区南鳥山2-6-8-106	157	300-4775	専修大文学部	044 95-71
市川 瑞彦 (37主)	38	理物	札幌市西区八軒95 公務員宿舎612-51	065	642-9491	北大教養部物理学教室助手	内2691 5427
小出 秀達	38	医	大阪市阿倍野区美章園1-8-24	545			
宮崎 健	38	文露		222	044 63-2501	夕刊フジ	
玉沢 一晴	38	医薬	埼玉県南埼玉郡白岡町大字上野田1013の2	349-02	0488 82-3436	山之内製薬KK中央研究所	460-2171

岡田 征至	38	法	札幌市豊平区西岡 138-35 シーアイタウン			北海道拓殖銀行事務部 札幌市南 8 条西 8 丁目	521-4111
志水 一允	38	農林産	横浜市港南区日野町 5791 藤ヶ沢住宅 6-408	222	045 841-5479	農林省林業試験場	711-5171
沼水 洋	38	農畜	// 港南区日野町藤ヶ沢 5791 藤ヶ沢住宅 7-105			農林省畜産局家畜生産専門指導官 東京都千代田区霞ヶ関 201	在オキナフ
原 重一	38	農農	北区赤羽台 4-17-18-1103	228	908-0503	交通公社調査部	内 3575 211-3211
堀川 芳男	38	農畜	東京都中野区上高田 2-16-9	164	385-8685	KK ソニーオーディオビデオ取締役	
実吉 峯郎	38	医薬	(在カナダ)	150	461-5550	国立ガンセンター研究所	
新原 輝久	39	理地	東京都北多摩郡狗江町泉 1284	182		国際航業KK	
中村セツ子 (旧田中)	38	農工	// 世田谷区奥沢 6-24-14	158	702-1365	高千穂交易(株)東京支店	
恩田 正臣	39	農畜	群馬県勢多郡富士見村小暮 2425 群馬県畜産試験場	371-01	027288 -2222	群馬県農政部畜産課	027288 7又12
横沢喜美子 (旧入江)	39	業					
小林 則子 (旧寺江)	39	農畜	札幌市北 36 条東 6 丁目	065		天使短期大学講師	
高木 佑太	39	農畜	横浜市港区南綱島町 10-22	223		台糖ファイザーKK	
小島 武	39	医薬	神戸市兵庫区山田町上谷上字上の開地 42の30	651-12		鐘ヶ淵化学KK	
荒木 伸也	39	水	鎌倉市十二所 98 十二所アパート	248		自家営業	
三浦滯一郎	39	教	埼玉県草加市旭町 2 丁目 1 番 37 号 1-406	340		東京都台東区上野公園 12-43 国立社会教育研修所	03 823-0241
田村 雅英	39	工合	立川市柏町 4-51-1 柏町団地 9-306	190	0425 35-1670	小西六写真工業KK日野工場管材課	0425 83-1521
八木 正己 (38 主)	40	理生	札幌市豊平区里塚 95 番地 12 美里団地	061-01	881-4961	札幌市役所公園課	211-2532
野田 行文	40	獣	多摩市諏訪 2-1-5-803	192-02		中外製薬総合研究所	987-7111
大木 誠示	40	理数	埼玉県入間郡富士見町大字鶴馬 2824	354		ユニックKK	
吉田 賢一 (旧御坊田)	40	工治	横浜市港区南大久保町 559-2	233		日本揮発油KK横浜営業所	

氏名	卒業年度	住 所	郵便番号	電 話	勤 務 先	電 話
守屋 正	40 工精	相模原市上溝4800 三菱アパート3604	229		三菱重工KK相模原製作所	
萩原 雅典	40 経		192	0426 42-9974	日立製作所中央研究所	0423 23-1111
滝沢南海雄 (39主)	40 理植	旭川市川端町11丁目美園マンション305	070			
松永 武彦	40 工電子	東京都小平市学園西町1211日立一ツ橋住宅 N-23	184		日立製作半導体事業部IC開発部技術	
水野 佑亮	40 理化	北区北23条西13丁目南新川公務員宿舍10-301		711-7568	北大結核研究所助手	内5536
横田 肇	40 農化	小平市大沼町1丁目181	187		明治乳業KK生産部技術課	
菅野 弘	40 農畜	江別市南樹町道職員アパート1-408	069-01		北海道農務部酪農草地課	
大沢 竜子 (旧牧)	40 薬業		951			
植木 迪子 (旧滝沢)	40 文独文	豊平区北野374の14			北大文学部助手	
松尾 英彦	41 水産	広島県佐伯郡五日市町楽々園5-11日魯社宅	738	0829 22-7919	日魯漁業	0822 92-5322
八木多賀子 (旧八木)	41 文哲	札幌市豊平区里塚95番地12	061-01	881-4961		
桜田 葺子 (旧大堀)	41 法法			062	北大法学部助手 退会	
黒沢 道雄	41 工機	千葉県八千代市八千代台東1の20の2 藤倉電線八代台アパート402号	276		藤倉電線KK施設本部設備課	
高野 文彰	42 農農	千葉県松戸市松戸1155コマツマンション201		0473 65-8281	高野ランドスケープ プラニング(株) 代表取締役	03 208-7405
小栗 紀彦 (40主)	42 農畜	札幌市北21条西13丁目合同宿舍新川住 宅518-23	063	741-7335	北大農学部助手	内2576
近藤喜十郎	42 文史	名古屋市中区大須3丁目31-23	460	052 241-1181	みよしや酒店	
高橋 昭夫	42 獣	野付郡別海町西春別駅前西町	088-25		別海農共中西別家畜診療所	
八木沢守正	42 理生	(在アメリカ)			ウイスコンシン大学	
山村 勝	42 農林	山形市緑町4-9-5	990		山形県農林部林務課	

加藤 正昭 (41主)	42	工衛	帯広市大通り8丁目10	080		加藤家具店専務	
田中 倬	44	医	浦和市北浦和3-20-14 県公社		682-0567		
阿部 勝彦	43	農林	足立区千住東町2-21千住東団住宅 1-1205			大昭和製紙㈱	
五十嵐 章 (42主)	43	法	新潟市寺尾956-1			モービル石油	
池田 統洋	43	工機	埼玉県上尾市原市965	362	0487 74-2051	東京芝浦電気KK原子力技術部プ ラント技術第一課東京都千代田 区霞が関3-2-5 霞が関ビル4階	581-7311
入江 圭	43	工衛	東京都調布市布田4-31-13 美和荘		416-7531	都清掃局工事管理部公害対策課	212-5111 内 4722
高倉 宏輔	43	獣	八尾市八尾木22 八尾合同宿舍342	581	0992 54-1380	農林省動物検疫所 神戸支所大阪出張所	
降旗 正忠	43	工電子	船橋市山手2-3-36 菱電アパート2-405	273	0474 31-5320	三菱電機KK 宇宙開発担当	
狩野 和子 (旧仙波)	43	教	小樽市桂岡町274	047-02			
山本 絃明	43	経	大阪府交野市大字私部2206-63	576	0720 91-6711	三洋電機審査部鑑査課	06-901- 1111(内)471
浜岡 秀洋	43	工機	大阪市寝屋川市東大利6-5 浜明男方	572	0472 21-2509	三洋電機KK	
斉藤 勝雄	44	農機	札幌市澄川12の8	061-21	831-6281	ホクレン農業機械課	
田中 力	44	獣	水戸市石川4丁目4028-9	310		雪印乳業KK花巻工場原料課	
春田 恭彦 (43主)	44	農畜	市川市若宮3-41-7 中山競馬場第一寮	272	0473 35-0504	競争場診療所 診療係	0473 34-2222
村井 弘一	44	農畜	室蘭市絵柄町3丁目11-10-102			協同飼料㈱室蘭サービスステーション	
山本 進	44	水化	横浜市保土谷仏向町1723 栗田工業相模寮			栗田工業	
寺崎 弘恭	44		大阪府豊中市刀根山町4-98 近藤方	560		大阪大学在学中	
建部 雅子 (旧今井)	45	農化	豊平区羊ヶ丘1番地北海道農業試験場宿舍 C-7-1		851-5344		
小野 政則	45	農林	名古屋市中川区中京通り3-12 同右内	454	0542 61-0311	永大産業㈱名古屋出張所	

氏名	卒業年度	住 所	郵便番号	電 話	勤 務 先	電 話
加藤 公敏	45 理化	福岡県大牟田市歴木4-10 米仙寮			三井東圧KK	
橋口 庸	45 医	札幌市琴似八軒10条東4丁目高野マンション		752-7750		
本田 徹 (44主)	45 医	東京都豊島区高田1-1-19		03 983-3524		
太田 清澄	46 農農	茨城県土浦市中貫25 日本住宅公団職員 住宅3の1号	300		日本住宅公団研究学園都市開発局	
堤 秀世	46 獣医		065			
中寺 清久	46 工機	明石市川崎町2-5-305	673		川崎重工KK 技術本部制御技術部	
松井 亮 (45主)	46 医	根室市朝日町3-21		3-3676	市立根室病院	
今井 敏郎	47 理化	札幌市北13条西4丁目 山田方	060	631-1621	北大理学部大学院生(博士)	
大見 太一	47 文美	福岡県北九州市八幡区久喜町1丁目 陣山2丁目10-29	806		自由業	
梶村 哲世 (46主)	47 獣	市川市南八幡1-4-9 石渡荘5号	272	681-8326 682-8667	第一製菓	
中村 慎一	47 水産					
榊井 明	47 工鋳	札幌市北20条東4丁目 北沢方	065		北大大学院博士課程	
田崎 拓明 (47主)	48 獣医	鹿児島県曾於郡未吉町岩崎3613	899-86		開 業	
近森 憲助	48 獣医				徳島大学医学部助手	
西村正二郎	48 農林	島根県松江市西川津町1015 野津方	690	0852 21-0592	島根県庁	
横山 豊昭	48 獣医	滋賀県栗太郡栗東町大字御園1028東5-403号			中央競馬会、栗東トレセン	
南部 孝一	49 農農化	札幌市東区北20条東4丁目 北沢方	065	741-3758	木田製粉	
則近 彰 (48主)	49 文独文	岡山県真庭郡勝山町原方 教職員住宅6号室	717		勝山高校	
景山 博文 (49主)	50 文中文	東京都中野区丸山1-14-8	165	03 388-3305	地方競馬振興会	

吉野 勝之	50	農林学	東京都葛飾区金町5丁目6-11 サニーコーポ A-101	125	608-3584	ヨシモトボール(株)	03 216-5931
相川 宗蔵	50	農農	札幌市北区北20条西7丁目 幌北荘	001		北大農学部大学院生	
江口 州志	50	理高分子	" " "	001		北大理学部大学院生	
佐伯久美子	50	農畜					
則近 和子 (旧常田)	50	工応化	岡山県真庭郡勝山町勝山1091-3 教職員住宅6号	717			
添田 昌一	51	農畜産	東京都稲城市矢野口37	192-02			
柴沼 俊	51	理化Ⅱ	札幌市北区北15条西2丁目 奥村方	065	711-3973		
阿部 一哉	51	経済	" 北区北23条西4丁目 静和荘	065		北大経済学部学生	
水野 豊香	51	獣	滋賀県彦根市正法寺町231	522		日本中央競馬会	
本村 洋文	51	農経	愛知県知多市八幡字岩の脇44-3 王子コンスターチKK八幡寮	479	0562 32-4273	王子コンスターチKK	
若松 光子	51	農畜	札幌市東区北16条東1丁目 クラブ荘	065		北大農学部学生	
阪上 泉	51	水産	函館市中道町9 北大北農寮	040	0138 52-1160	北大水産学生	
新野 晶子	51	水産	札幌市西区手稻西野555の21 嵐川方	063	662-2272	北海道公害防止研究所	
森 蔵	51	水産	函館市中道町9 北大北農寮	040	0138 52-1160	北大水産学生	

現 役 部 員 名 簿

氏 名	学年	学部学科	現 住 所	帰 省 先
石川 淳子	3	理、高文	北19条西3丁目 藤原アパート (742-7894)	静岡県静岡市神明町10
桑田 壮平	4	衛生工学	北20条西7丁目 金木方 (711-7811)	兵庫県神戸市東灘区御影町城の前1438
佐野 淳之	3	農 林 学	月寒東2条2丁目 月寒学寮 (851-0856)	神奈川県藤沢市鶴沼松ヶ岡1-10-12
平野 雅裕	4	法 学	南11条西23丁目 (563-0479)	東京都目黒区南1の4の8
横沢 敏夫	3	農 農 化	北20条西7丁目 幌北荘 (75-4100)	上川郡和寒町字中和480
笠間 淳子	3	農 農 化	北19条西3丁目 藤原アパート (721-8587)	宇都宮市桜4丁目17の14
長屋 清隆	3	工 応 物	北18条西6丁目 山田荘 (85-4513)	岐阜市上土居743-53
半浦 剛	3	工 土 木	北15条西3丁目 中村方 (741-4549)	東京都練馬区北町7の16の3
本城 敬文	3	獣 医	北17条西5丁目 ゆり荘 (731-7806)	大阪市天王寺区堂ヶ芝町14
水井とく子	4	理 地 物	北32条西9丁目 石神方 (741-8444)	長野県埴科郡戸倉町若宮368-1
山川 恵	2	理 類	北21条西8丁目 さつぼろハウス (741-8515)	神奈川県藤沢市亀井野1850
山本 裕介	2	理 類	北19条西4丁目 弥永方 (711-2575)	根室市幸町5 運輸合同宿舎501-12
矢田 明	2	理 類	北17条西8丁目 恵迪寮 (742-7333)	静岡県田方郡大仁町宗光寺
飯島 茂	2	理 類	北22条西2丁目 協和荘 (711-2575)	群馬県高崎市上豊岡町48
岩田 正勝	1	理 類	北19条西4丁目 弥永方 (711-2575)	神戸市灘区桜ヶ丘町13-8
蛭子 雄次	1	理 類	北22条西2丁目 協和荘 (710-0931)	福岡県北九州市小倉北区昭和町9-21

木村 憲子	2	文 類	北 3 0 条西 1 2 丁目	(7 5 1 - 6 0 2 1)	同 左
滝華 聡之	1	理 類	北 2 0 条西 8 丁目	あららぎ荘 (7 4 2 - 8 9 9 9)	大阪府豊中市南桜塚 1 - 1 3 - 9
中畠 孝幸	1	文 類	北 2 2 条西 2 丁目	協和荘	名寄市西 8 条北 4 丁目
浪内 陽子	2	北 看	北 1 4 条西 5 丁目	北看寄宿舎 (7 1 1 - 1 1 6 1) 内線 5 8 7 2	網走市西 3 丁目
三好 功悦	2	文 類	北 1 8 条西 3 丁目	遠藤方	群馬県高崎市下小島町 3 6 7 - 3

編集後記

ついに今年も大幅に予定を遅れながらも部報を発行させることができました。河田部長・岡田監督始め御協力頂いた先輩諸氏、並びに原稿書きに頭を悩まされた部員諸兄に深く感謝の意を表すると共に、発行の遅れましたことをお詫びいたします。また再三の原稿請求をも「馬の耳に念仏」と化し、一歩も動じなかった数名の部員諸兄には、一片の氷塊とそれにまさる大きな花束をもって、心の底から絶大なる拍手を送りたいと思います。

今、校正を完了致しました。うつろな状態です。幾日かしてりっぱな部報を手にしても、もう読んでなんかやるものか。原稿が集まって来て、興味本位で読んだ最初の新鮮な読後感を大切にしました。あの時点で編集委員なんて辞めれば良かった。OB並に部員諸兄の遅れ気味ながらも心のこもった原稿を手にしたことだけが、完成後の満足感のようです。この部報も、やっと私たちのもたら果立っていきます。部報を大切にやって下さい。

。水野さん、ごめんなさい。

中山競馬場白井分場の高松厩舎所属で、牡、鹿毛、父にミンシオを持ち、母ジェラルテインツウ（母の父パーシア）という血統のマイキュービッドという元競走馬が、ゲラが刷り上がった日に、当部

に入厩しました。競走成績は全くなし、軽い屈腱炎とのことで、未だ全く海のものとも、山のものともつかぬ段階です。とりあえず、新馬入厩の事のみお伝え致します。

編集・校正などというもう二度とやる気のしない仕事を終えたという感動は、眠たさで消えてしまいました。ミスはないと信じて、オヤスマイナサイ！

鬼になれなかった鬼の編集委員

三好功悦 木村憲子 滝華聡之 その他一年目

表紙 岩田正勝

題字 浪内陽子

部報 第二十一号

昭和五十一年六月 発行

発行者 北海道大学馬術部

札幌市北区北七条西六丁目

北大体育会内

編集者 部報編集委員会

印刷所 北大生協プリント部

非売品

広告のページ

クリーンサッポロ!!自動車公害追放整備

札幌陸運局指定民間車検工場

北大モータース

札幌市北区北十八条西五丁目

721-1526

太 田 装 蹄 所

札幌市東区東苗穂三八番の一六二

医 薬 品 卸



ホシ伊藤株式会社

本 社 札幌市南 8 条西 14 丁目 1397 番地

支 店 帯 広・釧 路・北 見・函 館・旭 川

滝 川 室 蘭・苫 小 牧・岩 見 沢

江戸考

政壽司

割烹 一品料理

本店 小樽市物見所畔
電話 ① 〇〇二二 ② 〇〇一一
支店 札幌市南七番丁西小路
電話 (511) 〇四〇〇 (511) 二〇二七

一人でしんみり
二人で仲良く
みんなでゆかいに

昭和の春 直営
三 鈴

南 5 西 4

アメリカンタイプとヨーロッパのスタイルを融合して
分けた遊びやすいコーナーへ男の館ヤングクワイアを演出



今井
札幌 TEL 221-7115
赤松 4-2-51

男のための本格派スーツ。



乗馬用長靴
スキー・スケート・登山靴
各種靴製造と販売

札幌専加盟店

三浦靴店

札幌市南一条西八丁目八番地
TEL (代) (231) 0901

和洋酒・煙草・食品

川端商店

札幌市北17条西4

Tel (742)
〇三三八八



塩野屋

北18西4 北18条ハイツ地下

飲むほどに
酔うほどに……



北海道フロンティア牧場

フロンティア乗馬クラブ

(馬場/札幌市郊外—石狩01336②3858)

- 競争馬預託調教
 - 乗用馬生産預託
 - 初心者乗馬教室
 - ※アルバイト募集(牧場勤務, 乗馬の出来るタレント)
- 登録制

乗馬用品のある喫茶店

フロンティア

札幌市北区北6条西6丁目
TEL 711-9427

男性デザインパーマ&アイパー

理容室

マコト

北区北16西4 本通西向
TEL 742-7058

明朗会計システム 安心して飲めます
マンガの本もアルヨ!

スナック

マコト

東区北15東1 仲通南向
TEL 741-6784

雑穀飼料問屋

渡部商店

札幌市中央区北13西18(競馬場前)

TEL 711-7034

Coffee

味とかおりを
創る店



サッポロ北区北11西4
TEL 741-2345
741-3174

 協和荘

北22条西2丁目
馬術部公認

清く、明るく、美しい
学生生活を!

1食付. 月 9800円

クラシック名曲と珈琲

CREMONA

クレモナ

N16・W5 近代店舗ビル1F
(地下鉄北18条駅より3分)
TEL: 742-7599

おふくろの味

食堂

まことや

札幌市北14条西4丁目
TEL 742-7794

北海道名物

ジンギスカン専門の店

義経本店

毎度御引立有難う御座居ます。60名迄のコンパ、宴会が出来ますので御利用願います。

札幌市北18条西5丁目
TEL 721-1723
義経本店

土野商店

北18条西5丁目

酒・たばこ・食料品・塩

TEL711-2575

喫茶 タマキ

なつかしの映画大会!!

と き 4月の毎週水曜日
5月6日の毎

と き 4月の毎週水曜日
5月6月の毎週木曜日
午後6時からと8時からの2回

ところ 喫茶タマキ(北18条西4丁目
TEL742-7790)

りょうきん

4回券(コーヒー券付き)1,200円

1回券(コーヒー券付き) 400円

コーヒー券はいつでも御利用出来ます

5月以降のプログラムのリクエストは
喫茶タマキへどうぞ!!

庄内歯科

院長 庄内真夫

札幌市白石中央 五三の三

TEL (861) 2504

くらしと健康を守る

市民生協

札幌40店・旭川6店・小樽3店

本部 / 南1条東1丁目
TEL 271-7711

安全・親切・快適

全日空限定乗合・一般観光貸切・一般乗用の

北都交通株式会社

取締役社長 武田忠幸

本 社 札幌市東区北30条東1丁目 ☎代表751-1631
ハイヤー部 札幌市西区北23条西16丁目 ☎代表711-4181
バ ス 部 札幌市北区北7条西4丁目東センビル内
貸切バスセンター ☎代表721-6371



■中村玉緒



■大竹しのぶ



■堀越陽子



■若尾文子



■和泉雅子



■山本陽子

笑わせます、泣かせます、女の愛を演じます。

堀越陽子／「人間の条件」月～金・昼1時

主人公・俺の妻美千子という大役に挑む彼女のフレッシュな演技が好評です

大竹しのぶ／「たぬき先生騒動記」月・夜8時

民放初出演のしのぶちゃん、坂上二郎先生の娘で、葉大生という役に大いにノッてます。

中村玉緒／「さらば浪人」月・夜9時

仕官を求めて旅を続ける浪人の夫。その天にとことんつくす理想の妻を演じてまさにハマリ役です。

若尾文子／「女の足音」水・夜9時

男女の愛を通して女の生き方を探るこのドラマ。女を演じて定評ある彼女の円熟した演技がみものです。

和泉雅子／「嫁だいこん」

土・夜9時

傾きかかった薩摩漬の老舗十文字屋の建直しに情熱をまよす若奥さんを明るく演じます。

山本陽子「逢えるかも知れない」土・夜10時

サスペンスタッチのこの異色ドラマで、新しいイメージを出したいと意欲満々の彼女です。



UHB
北海道文化放送

日本中央競馬会

札幌競馬場

札幌市北14条西19丁目
TEL (721)0461~5

場長 室屋 浩一郎